祝谷９号墳

２０２４

松 山 市 教 育 委 員 会

公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団

埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

いわいだに

祝谷９号墳

２０２４

松山市教育委員会

公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

1. 完掘状況（鳥瞰／北より）

2. 完掘状況（俯瞰）

1. 出土遺物（円筒埴輪・朝顔形埴輪・馬形埴輪・家形埴輪）

2. 出土遺物（馬形埴輪）

3. 出土遺物（円筒埴輪・朝顔形埴輪）

4. 出土遺物（色違いの胴部と突帯）

5. 出土遺物（環頭大刀柄頭）

序　　言

本書は、平成28年度に実施した発掘調査の報告書です。

ここに報告する祝谷９号墳は、弥生時代中期の土坑群や古墳時代後期の横穴式石室を持つ古墳などが調査された祝谷大地ヶ田遺跡の一角にあり、市内でも重要な遺跡が集中する、いわゆる「道後城北遺跡群」を構成しています。

祝谷９号墳は、松山平野北東部、祝谷地区の小規模な河岸段丘上に立地する前方後円墳で、後世の開墾などで埋葬施設こそ失われていましたが、墳丘と周壕外壁を葺石で覆う、全国でも珍しい構造を持っていることがわかりました。調査時には新発見の前方後円墳として新聞等にも大きく報じられ、現地説明会にはおよそ700名の方にご参加いただくとともに、不明な点の多い古墳時代中期の松山平野の歴史を探る貴重な資料となりました。

最後になりましたが、発掘調査や整理作業、そしてこの報告書の刊行にあたってご協力いただきました地権者をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げるとともに、本書が文化財保護や考古学研究の進展の一助となれば幸いです。

令和６年６月

松山市教育委員会
教育長　前田　昌一

例　　言

1．本書は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが平成 28 年 9 月から平成 29 年 1 月に実施した、松山市祝谷六丁目 1027 番 1・4・5、1034 番 3、1041 番 1 の各一部における高齢者総合福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査『祝谷大地ヶ田遺跡 6 次調査』のうち、祝谷 9 号墳に係る発掘調査報告書である。

2．本書掲載の遺構は、呼称名を一部、略号化して記述した。
土坑：SK

3．本書で使用した標高値は海抜標高を示し、方位はすべて世界測地系を基準とした座標北である。

4．本書掲載の基本土層や遺構埋土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版－標準土色帖』（2006 年版）に準拠した。

5．本書掲載の遺構図は作田一耕の指示のもと、山邊進也、保島秀幸及び現場作業員が担当し、遺物の実測･トレース及び遺構図の修正･トレースは作田の指示のもと、山邊、木下奈緒美、重松希依、富谷英子、寺尾いずみ、丹生谷道代、平岡直美が行った。

6．本古墳の葺石立面図の写真測量は、株式会社四航コンサルタントに委託した。

7．発掘調査時の遺構写真撮影は作田、山本健一が、遺物の写真撮影及び編集は大西朋子が行った。

8．本書の執筆は作田、山内英樹（松山市教育委員会文化財課 2021（令和 3）年度在職）が担当し、浄書･版組みを含む編集は木下、寺尾が行った。
なお、執筆者名は各章・各節の末尾に記した。

9．本書で使用した遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

本 文 目 次

第 1 章　はじめに…………………………………1

第１節　調査に至る経緯と経過………………………………………………… 1

第２節　調査・整理・刊行組織 ………………………………………………… 2

第３節　遺跡の立地と歴史的環境……………………………………………… 3

第 2 章　調査の経過と成果……………………………11

第１節　調査の経過……………………………………………………………11

第２節　層　位……………………………………………………………12

第３節　遺構と遺物……………………………………………………………12

第 3 章　まとめ…………………………………………51

第１節　祝谷古墳群について…………………………………………………51

第２節　松山市内の前方後円墳について……………………………………51

第３節　前方後円墳の築造工事と地域内での勢力の有り様……………………56

第４節　祝谷９号墳出土埴輪について………………………………………58

第５節　祝谷９号墳周壕出土の環頭大刀柄頭について………………………61

挿図目次

第１章　はじめに

第 1 図　表層地質図 …… 3
第 2 図　祝谷大地ヶ田遺跡３～８次調査区配置図 …… 4
第 3 図　周辺遺跡分布図 …… 6
第 4 図　主要古墳分布図（水系地図）…… 8

第２章　調査の経過と成果

第 5 図　等高線及びトレンチ土層断面ポイント図 …… 13
第 6 図　トレンチ土層断面図（1）…… 15
第 7 図　トレンチ土層断面図（2）…… 16
第 8 図　トレンチ土層断面図（3）…… 17
第 9 図　周壕平面図 …… 18
第 10 図　周壕葺石断面図（1）…… 20
第 11 図　周壕葺石断面図（2）…… 21
第 12 図　墳丘・周壕葺石　区割り図 …… 23
第 13 図　墳丘葺石立面図（a 区）…… 24
第 14 図　墳丘葺石立面図（b 区）…… 24
第 15 図　墳丘葺石立面図（c 区）…… 25
第 16 図　墳丘葺石立面図（d 区）…… 26
第 17 図　墳丘葺石立面図（e 区）…… 27
第 18 図　周壕葺石立面図（1 区）…… 27
第 19 図　周壕葺石立面図（2 区）…… 28
第 20 図　周壕葺石立面図（3 区）…… 29
第 21 図　周壕葺石立面図（4 区）…… 30
第 22 図　周壕葺石立面図（5 区）…… 31
第 23 図　埴輪実測図（前方部）…… 32
第 24 図　埴輪実測図（北括れ部）…… 33
第 25 図　埴輪実測図（後円部北側）…… 34
第 26 図　埴輪実測図（後円部南側）（1）…… 35
第 27 図　埴輪実測図（後円部南側）（2）…… 36
第 28 図　埴輪実測図（後円部南側）（3）…… 37
第 29 図　埴輪実測図（後円部西側・南括れ部）（1）…… 38
第 30 図　埴輪実測図（後円部西側・南括れ部）（2）…… 39
第 31 図　埴輪実測図（線刻）…… 40
第 32 図　埴輪実測図（馬形）…… 41
第 33 図　埴輪実測図（家形）…… 43
第 34 図　埴輪実測図（盾形）…… 43

第 35 図　埴輪実測図（不明）…… 43
第 36 図　その他の出土遺物実測図（環頭大刀柄頭）…… 44

表 目 次

第 2 章　調査の経過と成果

表 1　トレンチ土層断面ポイント座標値一覧 …… 14
表 2　9 号墳規模一覧…… 19
表 3　葺石断面ポイント座標値一覧 …… 19
表 4　埴輪観察表（前方部）…… 45
表 5　埴輪観察表（北括れ部）…… 46
表 6　埴輪観察表（後円部北側）…… 46
表 7　埴輪観察表（後円部南側）…… 47
表 8　埴輪観察表（後円部西側・南括れ部）…… 48
表 9　埴輪観察表（線刻）…… 49
表 10　埴輪観察表（馬形）…… 50
表 11　埴輪観察表（家形）…… 50
表 12　埴輪観察表（盾形）…… 50
表 13　埴輪観察表（不明）…… 50
表 14　その他の出土遺物観察表（環頭大刀柄頭）…… 50

写真図版目次

巻頭図版 1　1. 完掘状況（鳥瞰／北より）
　2. 完掘状況（俯瞰）
巻頭図版 2　1. 出土遺物（円筒埴輪・朝顔形埴輪・馬形埴輪・家形埴輪）
　2. 出土遺物（馬形埴輪）
　3. 出土遺物（円筒埴輪・朝顔形埴輪）
　4. 出土遺物（色違いの胴部と突帯）
　3. 出土遺物（環頭大刀柄頭）

図版 1　1. 俯瞰写真（検出状況）
　2. 鳥瞰写真（南より）
図版 2　1. 墳丘葺石立面 c 区（北より）（H － H´ ～ G － G´ トレンチ間）
　2. 墳丘葺石立面 c 区（北より）（H － H´ ～ B ②－ B ②´ トレンチ間）

3. 墳丘葺石立面ａ－ｂ区（北より）（前方部北東角Ｆ－Ｆ´トレンチ部）
図版　3　1. 周壕葺石立面３区（南西より）（Ｂ②－Ｂ②´～Ｇ－Ｇ´トレンチ間）
2. 周壕葺石立面３区（南西より）（Ｂ②－Ｂ②´～Ｄ②－Ｄ②´トレンチ間）
3. 葺石検出状況（北西より）（Ｆ－Ｆ´～Ｂ②－Ｂ②´トレンチ付近）
図版　4　1. Ａ②－Ａ②´土層断面（南西より）
2. Ｂ②－Ｂ②´土層断面（西より）
3. Ｃ①－Ｃ①´土層断面（東より）
4. Ｈ－Ｈ´土層断面（西より）
5. Ｇ－Ｇ´土層断面（南より）
6. Ｅ－Ｅ´（SK172）土層断面（北より）
図版　5　1. 馬形埴輪出土状況（東より）
2. 馬形埴輪出土状況（南より）
3. 馬形埴輪出土状況（西より）
4. 円筒埴輪等出土状況（南より）（Ａ①－Ａ①´～Ｃ①－Ｃ①´トレンチ間）
5. 円筒埴輪等出土状況（南より）（Ｂ①－Ｂ①´～Ｄ①－Ｄ①´トレンチ間）
6. 環頭大刀柄頭出土状況（俯瞰）（Ｂ②－Ｂ②´トレンチ土層断面）
図版　6　1. 周壕葺石断面（ｈ－ｈ´北西面）（北西より）
2. 墳丘葺石断面（ｈ－ｈ´北西面）（北西より）
3. 墳丘葺石断面（ｎ－ｎ´東面）（東より）
4. 周壕葺石断面（ｎ－ｎ´東面）（東より）
5. 墳丘葺石断面（ｆ－ｆ´北西面）（北西より）
6. 墳丘葺石断面（ｓ－ｓ´南東面）（南東より）
図版　7　1. 形象埴輪（馬形：114、円筒：46、朝顔：69、家形：118、盾形：120）
図版　8　1. 出土遺物（前方部）
2. 出土遺物（北括れ部）
3. 出土遺物（後円部北側）
4. 出土遺物（後円部南側）
5. 出土遺物（後円部西側・南括れ部）
6. 出土遺物（線刻）

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯と経過

2007（平成 19）年 12 月 14 日、社会福祉法人愛寿会理事長　長戸金昭氏（以下、申請者という。）より松山市祝谷四丁目 990 番１及び六丁目 1027 番１・４・５、1034 番１・２・３、1041 番１（以下、申請地という。）における土地造成工事に伴う埋蔵文化財の確認申込書が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課という。）に提出された。

これらのことから文化財課は対象地（9,549㎡）における遺跡の有無を確認するために試掘調査を実施し、弥生時代以降の遺跡が存在する可能性が高いという結果を得た。

確認申込書が提出された申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地「№ 55・56・57 北代・緑台・土居窪遺物包含地」に所在する（平成 19 年当時）※注１。申請地の位置する祝谷周辺では、主に弥生時代、古墳時代を中心とする遺跡が数多く調査されている。松山城以北エリアに広がる弥生時代を中心とした遺跡の集まりを「道後城北遺跡群」と呼び、祝谷周辺の遺跡もこの遺跡群の北端の一角に含めて考えられている。弥生時代では祝谷六丁場遺跡や祝谷畑中遺跡の集落跡で発見された住居跡、土坑や溝などから多量の土器や石器が出土し、祝谷六丁目遺跡では壺棺内の人骨がイモガイ製の腕飾りを装着した状態で発見されている。また、祝谷六丁場遺跡は後期の平形銅剣の出土でもよく知られている。古墳時代では、丘陵上で祝谷１～５号墳の調査が行われ、１墳丘に２基の横穴式石室を持つ古墳や箱式石棺の検出をみている。これらの他、周辺の丘陵上には多数の古墳が分布することが知られている。

2012（平成 24）年度に実施した祝谷大地ヶ田遺跡３次調査（1,106㎡）の結果、弥生時代中期中葉の貯蔵穴約 40 基が密集した状態で見つかり、また青銅鏡や象嵌のある大刀柄頭などを持つ祝谷６号墳を確認した。引き続き 2013（平成 25）年度には、祝谷大地ヶ田遺跡４次調査（1,239㎡）を実施し、７・８号墳等を検出した。

これを受け、土地所有者である申請者と文化財課との間で本調査地及び５次、７次調査地部分についてあらためて協議が行われ、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。申請者と公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センターという。）との間で調査に関する委託契約が結ばれ、その後、埋蔵文化財センターが主体となり、2016（平成 28）年６月１日より同年９月 15 日まで祝谷大地ヶ田遺跡５次調査を、９月 16 日より 2017（平成 29）年１月 15 日までの期間で同６次調査を行った。その後、同年３月 10 日まで整理作業を行い、本調査地の概要報告書を作成して申請者に提出し、本報告書作成を残して、一連の調査を終了した。

本調査地の地番は、上記申請地のうちの、松山市祝谷六丁目 1027 番１・４・５、1034 番３及び 1041 番１の各一部で、調査面積は 2,420㎡である。（作田）

注１　平成 26 年３月 24 日付けで、№ 55 が「北代遺物包含地」から「祝谷大地ヶ田遺跡」、№ 56 が「緑台遺物包含地」から「祝谷畑中遺跡」、№ 57 が「土居窪遺物包含地」から「土居窪遺跡」へと包蔵地変更された。

第２節　調査・整理・刊行組織

発掘調査終了後、申請者に対し調査費用の精算に合わせて、調査概要報告書を作成し提出した。概要報告書作成では、まず調査で検出した遺構の図面整理及び遺物の実測を行い、その後、それらの図面や遺物実測図のトレース作業、遺構写真の選別、遺物写真の撮影、原稿執筆等を行い、それらをもとに編集作業を経て、概要報告書にまとめた。

本書は 2016 年度に、概要報告書で取り上げた遺構・遺物のデータのうち、祝谷９号墳について概要報告書作成と同様の作業を行った後に作成したものである。弥生時代の貯蔵穴等、他の遺構については稿を改めたい。

2016 年度に実施した発掘調査及び概要報告書の作成、並びに 2024 年度に行った調査報告書刊行業務における組織体制は以下のとおりである。

（１）調査組織〔平成 28 年度〕

松山市教育委員会　教育長　藤田　仁
　　事務局　　局　長　前田　昌一
　　次　長　家串　正治
　　次　長　杉本　威
　　文化財課　課　長　若江　俊二
　　主　幹　越智　茂樹

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
　　理事長　中山　紘治郎
　事務局　　局　長　中西　真也
　次長兼総務部　部　長　橘　　昭司
　文化振興部　　部　長　梶原　信之
　埋蔵文化財センター
　　所長兼考古館館長　村上　卓也
　　専門嘱託調査員　作田　一耕（調査担当）

（２）刊行組織〔令和６年度〕

松山市教育委員会　教育長　前田　昌一
　　事務局　　局　長　横山　憲
　　次　長　野口　信隆
　　次　長　白石　秀一
　　次　長　好光　慎吾
　　文化財課　課　長　岸　　洋三
　　主　幹　楠　　寛輝

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
　　理事長　本田　元広
　事務局　　局　長　横本　勝己
　　次　長　宇高　徹二
　施設管理部　　部　長　仙波　義道
　埋蔵文化財センター
　　所長兼考古館館長　梅木　謙一
　　パート調査員　作田　一耕（編集担当）

（作田）

第３節　遺跡の立地と歴史的環境

（１）遺跡の立地

本遺跡は高縄山地の南西麓に位置し、松山平野に向かって延びる丘陵の先端に近い部分に立地する。標高は概ね 52.5 ～ 54.5ｍの範囲にある。南東方向約 1.4㎞のところに現在の道後温泉があるが、本遺跡からの視野のうちには入らない。

本遺跡背後の瀬戸風峠及びその間の斜面に瀬戸風峠遺跡、瀬戸風峠古墳群、常信寺山古墳群が広がり、北には祝谷アイリ遺跡、南には祝谷畑中遺跡が接している。西には南流する丸山川右岸に祝谷六丁場遺跡、その後背の尾根に祝谷古墳群がある。この尾根を南に下ると御幸寺山に至る。

高縄山地の表層地質は花崗閃緑岩が主体で、山麓の丘陵末端では砕屑物の堆積が認められる。本遺跡は花崗閃緑岩の風化土壌の上に所在する。地形は概略、瀬戸風遺跡より上位が大起伏丘陵、瀬戸風古墳群のある斜面部が小起伏丘陵、本遺跡が乗る谷底平野からその下位の砂礫台地へと続く。

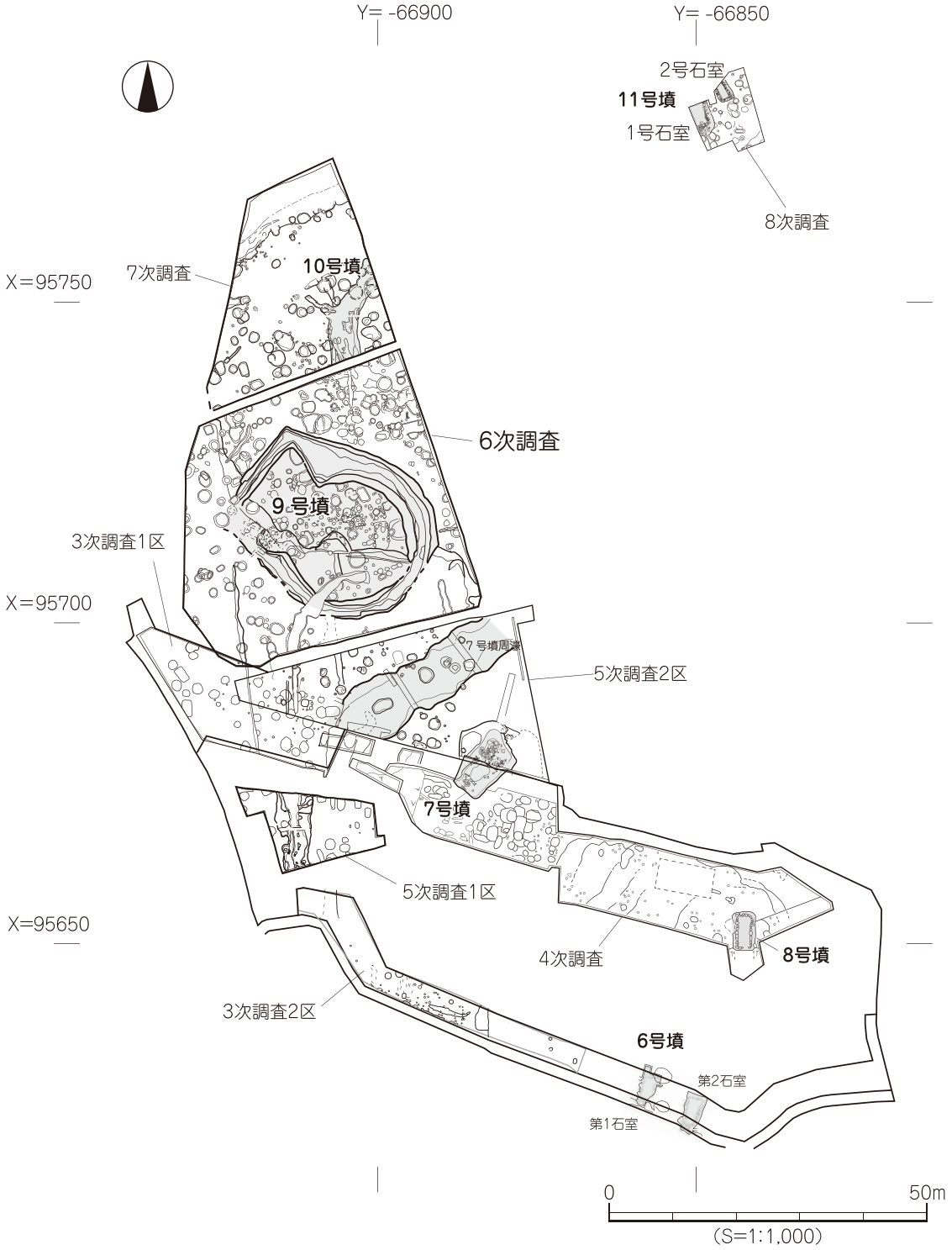
第１図　表層地質図

（２）歴史的環境

本遺跡が所在する祝谷地区や低地の道後城北地区は、縄文時代から近代にかけての遺跡が連綿と続くが、とくに弥生時代、古墳時代、古代から中世にかけての遺跡が卓越する。本項では、弥生時代の文京遺跡、域内で調査を行った各古墳、河野氏関連の中世遺跡を中心に概要を記したい。

松山城北地区を代表する遺跡として文京遺跡があげられる。この遺跡は愛媛大学城北団地を中心と

した遺跡で、縄文時代前期から近現代にわたる複合遺跡である。その中で、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけての集落遺跡は、全国的にも有数の拠点集落として知られている。他には西に隣接する松山大学構内遺跡と共に、古墳時代中期から後期の集落も確認されており、御幸寺山や勝山周辺に展開する古墳群も含めた有機的な関係が解き明かされることを期待したい。



第２図　祝谷大地ヶ田遺跡３～８次調査区配置図

文京遺跡の東、道後温泉との間には、文京遺跡の弥生時代集落と同時期に属する平形銅剣が10口出土したと言われる道後今市遺跡があり、他にも道後樋又遺跡、道後公園山麓遺跡、祝谷六丁場遺跡も含めて合計22口が出土している。

発掘調査で出土したのは祝谷六丁場遺跡の1口のみで、他は出土状況などの詳細は不明である。このうち、道後今市遺跡と道後樋又遺跡8口の出土地は、記録や伝承どおりであるならば、文京遺跡に接していると言ってもよい場所である。

祝谷六丁場遺跡の平形銅剣は、文京遺跡や道後今市遺跡といった平地の遺跡から見ると、祝谷地区丸山川沿いの谷を20～25m上った丘陵斜面地の埋納遺構から出土した。

続いて本遺跡（祝谷大地ヶ田遺跡6次調査地）や祝谷六丁場遺跡に近接する弥生時代の遺跡を見ると、前期末から中期にかけての集落遺跡である祝谷畑中遺跡や祝谷本村遺跡、土居窪遺跡などが連綿と分布し、文京遺跡をはじめとする平地部の遺跡と合わせて、城北地区の弥生時代を彩っている。

この中には、前期末から中期前半の数百基に及ぶ貯蔵穴群が本遺跡を中心として広がっており、その様態と運営主体となるべき集落の解明が課題となろう。

古墳時代については、前述のとおり、中期から後期の集落が文京遺跡や松山大学構内遺跡を中心に展開しているが、現時点で本遺跡の近接地からの検出はなされていない。

次に本遺跡及び周辺で調査を行った古墳について概観したい。

まずは本遺跡が属する祝谷古墳群である。

祝谷古墳群は大きく2カ所に分かれ、祝谷1～5号墳は山田池の南、祝谷6丁目の現有料老人ホーム内に所在する。1976年頃に調査を行ったものであるが、調査報告書は未刊で、『愛媛県史』、『遺跡』等いくつかの刊行物に記載が見られる。

今回報告の9号墳を含む祝谷6～11号墳は祝谷1～5号墳の南東500～600mのところに位置する。

祝谷1～5号墳は御幸寺山から北へ続く小丘陵の東麓、標高65～75m前後の場所に立地する。河川で見ると丸山川上流の右岸にあたる。祝谷6～11号墳は南白水町、山田町の丘陵から丸山川左岸へ続く標高50～55mの山麓に立地する。

以下のとおり、二つのまとまりは、

1. 距離が離れている
2. 丸山川の両岸に分かれ、包蔵地も別の名称が付されている
3. 2とも関連するが、後背には別の丘陵があり、それぞれに違う名称の古墳群が記載されている

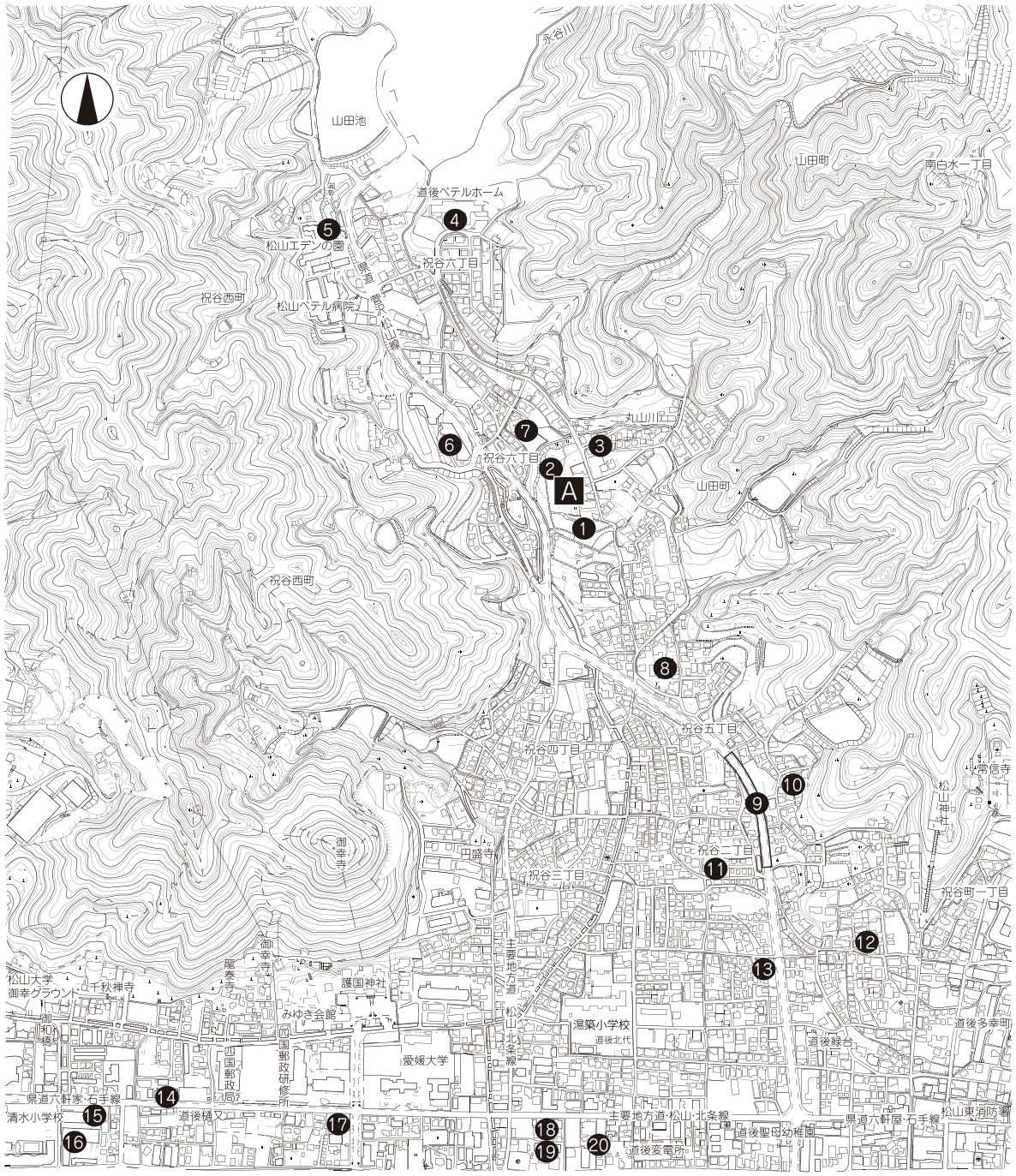
という状況で、今後中間地点で古墳群が発見された時の扱いも勘案すると、別の古墳群とするか、古墳番号はそのままで、支群で分けることも考慮する必要があろう。

さて、祝谷1～5号墳について、最も詳細な記述がなされている『松山市史料集』に拠って記載する。

1号墳は2号墳と共有の墳丘を持つ(1墳丘2石室？)とされている。主体部は横穴式石室であるが、副葬品は後世の撹乱、盗掘などで鋤先、須恵器の杯を各1点出土したのみである。

2号墳も横穴式石室で、1号墳に後続する。副葬品はこれも後世の盗掘によるものか、赤色瑪瑙製の丸玉が出土しているのみである。

2号墳は上述のとおり、1号墳と同一墳丘内の石室と判断されているが、「2号墳」の位置付けについて触れた記述はない。しかし、すでに2号墳の存在を前提に3号墳以降の番号が付されているので、1墳丘2石室の古墳と仮定しても、今後の混乱を避けるため祝谷古墳群内での新規発見古墳への番号



A 祝谷大地ヶ田遺跡6次調査

1. 祝谷大地ヶ田遺跡 3次～5次調査
2. 祝谷大地ヶ田遺跡 7次調査
3. 祝谷大地ヶ田遺跡 8次調査
4. 祝谷アイリ遺跡
5. 祝谷遺跡（祝谷六丁目遺跡）
6. 祝谷六丁場遺跡
7. 祝谷アイリ遺跡2次調査
8. 祝谷本村遺跡1次調査
9. 祝谷畑中遺跡
10. 祝谷畑中遺跡2次調査
11. 祝谷畑中遺跡3次調査
12. 土居窪遺跡4次調査
13. 土居窪Ⅲ遺跡
14. 道後樋又遺跡3次調査
15. 道後城北RNB遺跡（南海放送遺跡）
16. 松山大学構内遺跡7次調査
17. 道後樋又遺跡2次調査
18. 道後今市遺跡9次調査
19. 道後北代遺跡
20. 道後北代遺跡2次調査

第３図　周辺遺跡分布図

付け替えは避ける必要がある。つまり今後、1号墳「1号石室」、「2号石室」とするにしても、このような事情を持つ両石室であることを認識した上で使用すべきであろう。

3～5号墳はいずれも「1・2号墳の封土を撤去した下部から検出した竪穴式石室構造のもの」としている。この報文では、後述のとおり1・2号墳に先行する石室としており、明記はないが、後期古墳である1・2号墳に対して、中期古墳的な印象を持つものである。これは9号墳の失われた主体部を探る上でも参考になる資料であるが、現時点では、これ以上の詳細は不明である。なお、報文中においては、構築順序を3号→4号→5号→1号→2号墳としている。(森　1980)

なお、祝谷古墳群の中で、1墳丘2石室の形態を持つと明示しているものは6号墳のみである。11号墳もその可能性はあるが、現時点では判断できていない。

6号墳以降については調査報告書が未刊のため、概要報告書の内容に即して記していきたい。

6号墳は本古墳の南にあり、古墳時代後期、6世紀中頃に築造された横穴式石室を主体部とする1墳丘2石室の古墳である。第1石室の最初の被葬者は古墳築造時に埋葬され、6世紀末ごろに追葬が行われている。第2石室は、6世紀後半から7世紀初頭頃に2体の被葬者が埋葬されたとしている。

副葬品は、須恵器、馬具、武具、農工具、装身具の他、第1石室からは神獣鏡、第2石室からは円頭柄頭の大刀が出土しており、畿内政権と繋がりの深い地方豪族の姿が見えてくる。

7号墳は本古墳の南、6号墳の北西にある横穴式石室を主体部とする古墳である。かなり削平、破壊の進んだ石室のみの検出であり、墳形は不明である。調査区設定の都合上、平成25年度と平成28年度の2回に分けて調査を行った。平成25年度の調査では石室開口部側の調査を行い、玉石を用いた床石と框石と推定できる石のほか、壁石基底石の抜き痕の一部を検出している。遺物は須恵器、馬具、武具、農工具、装身具が出土している。これらの遺物から、築造は6世紀中頃、同後半の追葬を経て、7世紀前葉から中葉頃に途絶えたとしている。

平成28年度の調査は石室奥壁寄りの調査を行った。結果的に床石もまともに残っていないほどの撹乱を受けていたが、墓坑の奥壁後部の版築が一部残存している。

8号墳も本古墳の南にある。横穴式石室の玄室部分のみの残存である。墳丘は残っていないが、石室北側に外径約26m、平均約5m幅の溝が半円形に残っており、これが8号墳の周溝であるならば、円墳もしくは楕円形墳ではないかとしている。

壁石は基底石もしくは2～3段しか残っていないが、玄室長が4.86m、幅が奥壁寄り2.32m、羨道寄り1.82mと比較的大型の横穴式石室である。

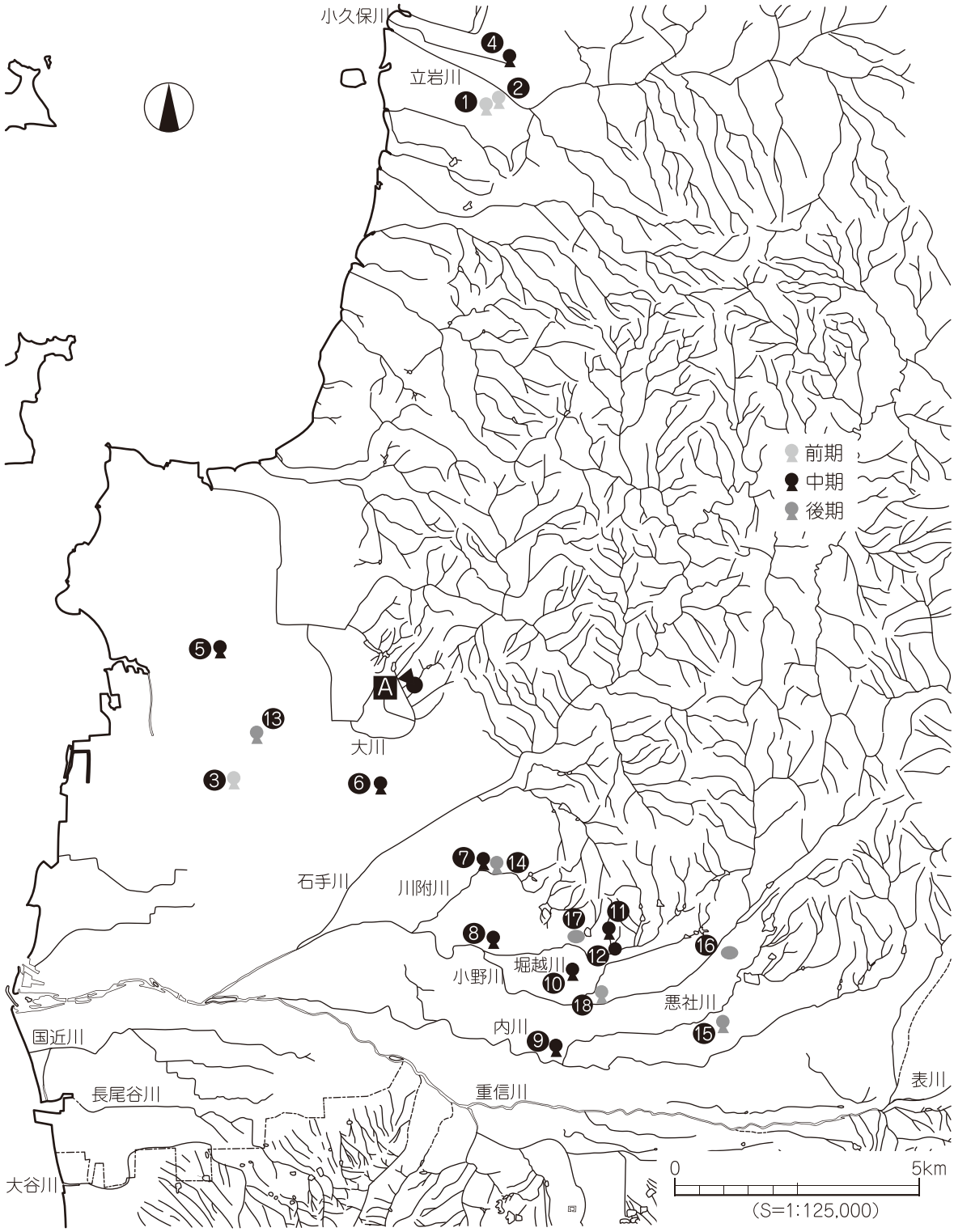
遺物は須恵器、土師器、馬具、武具、農工具、装身具が出土している。これらの遺物から築造は6世紀代に求められるが、最終的な追葬は7世紀前半と判断している。

10号墳は9号墳の北に隣接するが、検出したのは周溝の一部で、墳丘部分は未調査である。周溝内出土の瑳は6世紀中葉から後半の特徴を持ち、10号墳も概ね該期の古墳と判断した。

11号墳は横穴式石室を主体部とし、1墳丘2石室の可能性を持つ古墳である。後世の削平、破壊が著しく、墳丘は無く、石室の遺存状態も悪い。副葬品は両石室とも須恵器、武具、装身具が出土しており、須恵器の特徴から6世紀中頃の古墳である。

以上、祝谷古墳群の既往調査について概略を記した。6号墳以降では発掘調査報告書が刊行されたものは無く、今回の9号墳が初めてである。

1～5号墳については調査から50年近くが経ち、測量データ等も見つけることができない。今後



A 祝谷9号墳
1 櫛玉比売命神社古墳
2 国津比古命神社古墳
3 朝日谷2号墳
4 上難波南古墳群10号墳
5 船ケ谷向山古墳
6 東雲神社古墳
7 経石山古墳
8 二つ塚古墳
9 波賀部神社古墳
10 タンチ山古墳
11 桧山峠7号墳
12 観音山古墳
13 永塚古墳
14 三島神社古墳
15 播磨塚天神山古墳
16 葉佐池古墳
17 素鷐神社古墳
18 鶴塚古墳

第４図　主要古墳分布図（水系地図）

関連データが発見されることを期待するものである。

本書収録の9号墳を除く6～11号墳については今後順次刊行されるが、10号墳について補足しておきたい。

10号墳は、本古墳を調査した6次調査地と続く7次調査地において周溝のみを検出しており、主体部が想定される部分は未調査である。6～8号墳の状況から、主体部が残っている可能性もあり、想定地の開発が行われる際には留意が必要である。

次に祝谷古墳群に近接する古墳、古墳群について概観したい。

本古墳東の丘陵上に瀬戸風峠遺跡がある。宅地開発に伴う調査で、中期古墳1基、横穴式石室を伴う後期古墳4基の他、出土遺物が無いかもしくは少ないために時期を明確にし得ない石蓋土坑墓1基、箱式石棺墓6基、木棺墓1基を検出している。

中期古墳であるE区6号墳は竪穴式石室を有し、刀子、鉄鏃が出土している。この古墳は、出土した長頸鏃の型式をもとに、5世紀後半から6世紀前半に位置付けている。

本古墳から南西に目を転ずると、文京遺跡や松山大学構内遺跡といった城北地区に横たわる多くの遺跡を望む御幸寺山があり、それがそのまま北方の祝谷古墳群や姫原古墳群が築かれた丘陵へと続く。

その南端に位置する御幸寺山古墳群は、本来6基ほどあったものの、そのほとんどが崩壊してしまったと言われるが、そのうちの1基を終戦直後に調査している。6世紀代の古墳で、墳形は円墳、主体部は横穴式石室である。出土遺物は須恵器、馬具、装身具、武具、農工具などとともに方格規矩四神鏡、環頭大刀が出土している。（大場　1950／森　1982　p.633）

松山城がある勝山には、南部を中心として多くの古墳が残存している。

東部の東雲神社古墳群は、1973年に東雲神社宝物館の改修等に伴う調査が行われたが、1999・2000年に至って、詳細な再整理を行った。

C地点1号横穴式石室（東雲神社1号墳B）は削平が著しく、基底石の痕跡を検出したにとどまる。墳形は不明。出土遺物は須恵器、鉄剣、刀子等の鉄製品、臼玉、ガラス小玉等の装身具が出土。時期は須恵器壺から6世紀。

C地点1号箱式石棺（東雲神社1号墳A）は1号横穴式石室に切られ、南側は消滅。築造時期は古墳時代前期から1号横穴式石室築造の間。

F地点では、弧状に廻る埴輪片列を確認。（東雲神社2号墳）

G地点では1973年の調査で、5世紀後半に築造された全長約34mの柄鏡形前方後円墳とも帆立貝式前方後円墳とも言われる古墳を検出し、後円部の中央部上には長方形に配石された遺構が主軸と直交して東西方向に確認された（竪穴式石室か？）。その後、改築された宝物館の下に保存されている。再整理作業に伴う現地での補足調査等も加えた結果、この古墳が前方後円墳であるかどうかは、改めての詳細な調査を要し、さらに同地点東の2基の墳丘様のものについても確認が必要としている。

なお、D地点ではC地点一帯の掘削土を盛り上げていたが、その中から採取した須恵器の中に5世紀末から6世紀初頭のものが含まれ、この周辺の古墳に伴うものではないかとしている。これは、G地点の前方後円墳ではないかとされる古墳の時期とも重なっており、より詳細な調査がなされることを期待したい。なお、この前方後円墳と言われる古墳の石室は、記述からすると竪穴式石室の可能性がある。（森　1982　p.567／長井・森　1992　p.588／梅木　2001）

他にも、東雲神社古墳群の南に隣接する東雲学園古墳群は6世紀中頃の横穴式石室を主体部とした

古墳群である。勝山西部の若草古墳群では6世紀中葉から後半の横穴式石室が6基確認されており、7号墳は竪穴系横穴式石室とされる。

さらに南部の城の内古墳群では、5世紀末の竪穴式石槨及び6世紀後半から7世紀前半の横穴式石室が確認されている他、長者ヶ平の南側尾根筋及び斜面には明確な時期は不明ながら、10基以上の古墳の分布が認められる。この古墳群については、南下方の番町遺跡から同古墳群に関連すると思われる盾形埴輪及び円筒埴輪が出土しており、その型式から概ね6世紀に収まるものとしている。

これらのことから勝山に分布するのは後期古墳が主体ではあるが、数基の中期古墳やそれより古い埋葬主体を有する古墳の存在も想定できる。(西村　2011／栗田・武田他　2022)

本古墳の南東方向には、三味線山古墳群、桜谷古墳群がある。

三味線山古墳1号墳の墳形は円墳、主体部は横穴式石室で、6世紀中葉から後半にかけての古墳である。周溝の底から前期の小児土器棺墓を検出している。2号墳は箱式石棺墓であるが、人骨以外の出土遺物が無く、時期は不明である。(栗田　2014)

桜谷古墳は4基の調査を行っている。円墳の可能性がある1号墓以外は墳形が不明である。1号墓の主体部は竪穴式石室であるが、横穴式石室の可能性も指摘している。2・3号墓が箱式石棺、4号墓が土坑墓を埋葬主体とする。1・2・4号墓が6世紀代、3号墓が弥生時代に遡ると報告されているが、再検討が必要かもしれない。(大山　1973)

本古墳と三味線山、桜谷古墳群の間には常信寺山古墳群があり、3基の古墳が登録されているが、踏査のみで詳細は不明である。(愛媛県　1991)

このように見てくると、本古墳と近接する古墳、古墳群の中での中期古墳は、瀬戸風峠E区6号墳の他、勝山一帯の東雲神社古墳、城の内古墳の一部に認められる。

これは首長墓という明確な規範が存在していた中期古墳から、前方後円墳という墳墓形態が終息へ向い、小規模な円墳や方墳への埋葬対象となる被葬者の階層的広がりが見られ、群集墳築造に向かう後期古墳への移り変わりが反映された姿を目の当たりにしているからであろう。(作田)

【引用文献】

大場磐雄　1950「伊予国御幸寺山古墳覚書」『国史学』52・53
大山正風　1973『天山・櫻谷遺跡発掘報告書』　松山市教育委員会
森　光晴　1980「祝谷古墳の発展経過と遺構」『松山市史料集　第一巻考古編』　松山市
森　光晴　1982「第四章　古代文化の発達と社会の充実」『愛媛県史　原始・古代Ⅰ』　愛媛県
　　1991『愛媛県内古墳分布調査報告書』　愛媛県教育委員会
長井数秋　1992「原始編第四章　古墳の発生」
森　光晴　　『松山市史第一巻　自然・原始・古代・中世』　松山市
梅木謙一　2001『東雲神社遺跡』　松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
西村直人　2011『平成23年度　史跡松山城跡－松山城本丸防災設備等整備事業に伴う
　　埋蔵文化財確認調査概要報告書－松山城本丸跡5次調査』　松山市役所・松山市教育委員会
栗田茂敏　2014『松山市文化財調査報告書168　三味線山古墳　船ケ谷向山古墳』
　　松山市教育委員会・(公財)松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター
栗田正芳・武田尊子ほか
　　2022『史跡松山城跡　－史跡整備に伴う遺構確認調査等総括報告書(平成13～29年度)－』
　　松山市・松山市教育委員会　(公財)松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター

第２章　調査の経過と成果

第１節　調査の経過

委託契約締結後、調査準備を経て 2016（平成 28）年 9 月 21 日から発掘調査に着手し、2017（平成 29）年 1 月 15 日に屋外調査を、同年 3 月 15 日に屋内での整理作業及び概要報告書作成を終了した。

祝谷大地ヶ田遺跡 6 次調査では、文化財課による調査指示範囲 2,420㎡の調査を行った。当初、隣接する既往調査で検出された弥生時代中期中葉を中心とする土坑群の広がりと、関連遺構の検出を目的として調査に着手した。

本調査では、試掘調査で確認していた弥生時代の遺構検出面である褐色砂質土（撹乱等で削平されている場合は、その下部の若干性質の違う褐色砂質土又はにぶい黄橙色砂質土）まで重機で掘削を進めた。その結果、当初目的の土坑群の他に、同一面上で未発見の周壕を伴う前方後円墳を検出した。

本書は、その前方後円墳のみを掲載する発掘調査報告書である。

以下、調査の工程を略記する。

2016（平成 28）年度

9 月 16 日（金）：重機（バックホー 0.45㎥、不整地運搬車 3t）を使用し、5 次調査で排出し、6 次調査地内に仮置きしていた廃土を 5 次調査 1・2 区に埋め戻す作業を行う。〔～ 9 月 20 日（火）〕

9 月 21 日（水）：重機を使用して表土層の掘削作業を開始する。〔～ 10 月 12 日（水）〕
表土層掘削と併行して遺構の検出も始める。〔～ 10 月 31 日（月）〕

10 月 6 日（木）：9 号墳検出状況の概略平面測量を開始する。〔～ 10 月 21 日（金）〕

10 月 14 日（金）：9 号墳以外の土坑、溝、柱穴の検出写真撮影を開始する。〔～ 10 月 31 日（月）〕

10 月 31 日（月）：9 号墳以外の土坑、溝、柱穴の掘削作業を開始する。〔～ 1 月 10 日（火）〕

11 月 4 日（金）：ドローンを使用して、9 号墳周壕掘削前の現況空中撮影を行う。

11 月 7 日（月）：9 号墳掘削を開始する。〔～ 1 月 10 日（火）〕

11 月 9 日（水）：9 号墳、土坑、溝、柱穴、調査区の土層断面図及び各遺構の完掘平面図の測量並びに写真撮影を開始する。〔～ 1 月 13 日（金）〕

12 月 6 日（火）：ドローンを使用して、9 号墳周壕掘削後の空中撮影を行う。

1 月 10 日（火）：9 号墳葺石立面図作成のための写真測量現地作業を行う。〔～ 1 月 11 日（水）〕

1 月 13 日（金）：ドローンを使用して、調査区全体の完掘空中撮影を行う。

1 月 14 日（土）：現地説明会の準備を行う。

1 月 15 日（日）：現地説明会を開催し、すべての調査を終了した。　（作田）

第2節　層　位

調査で確認した基本堆積土層は、表土耕作土層等を除いて、以下の6層である。

遺構確認面は現地表から約15～50cm下である。

各層の新旧関係は一部において2→3→4層、2→5層が直接確認できるのみで、全体の層序順位の決定は、各層から掘り込んでいる遺構の切り合い等も含めて行った。そのため、これを柱状図で表すのは困難である。さらに、この基本堆積土層は調査区境界の土層断面で確認したものを元にしており、9号墳と直接接していない。

これらのことから、基本堆積土層の層序図は省略する。

表土：耕作土や造成土

1層：褐色砂質土	7.5YR 4/3	中～粗砂を多く含む
2層：褐色砂質土	7.5YR 4/3	1層より砂の含有が多い
3層：灰褐色砂質土	7.5YR 4/2	中～粗砂を多く含む
4層：にぶい黄橙色砂質土	10YR 6/4	中～粗砂を多く含む
5層：黒褐色砂質土	7.5YR 3/2	中～粗砂を多く含む
6層：灰褐色砂質土	7.5YR 4/2	中～粗砂を多く含む　3層より若干色調が暗い

上記のうち、5層は調査区北東部の一部に見られる植生痕等、有機質の腐植による土層と推定できるもので、遺構の掘り込み面と判断することはできない。しかし、現地調査時には、この土層の性格を把握できないまま基本堆積土層の中に組み入れたため、本書の中でも一応基本堆積土層の一つとして表記する。（作田）

第3節　遺構と遺物

本調査では、前述のように同一検出面上で弥生時代の遺構群と祝谷9号墳を検出している。本書では整理期間と紙幅の関係で、祝谷9号墳のみの掲載となる。

祝谷9号墳は前方部、後円部とも墳丘部分が完全に削平された状態で検出された。つまり後世において、少なくとも弥生時代の遺構が掘り込まれた面か、それ以上に削平を受けた状態である。

表土の直下はすぐに地山で、墳丘や周壕の外側でも、後世の遺物包含層すら皆無であった。

このような状態で、墳丘盛土の一部、主体部の掘り方の痕跡すらも検出できず、地山を大きく掘り込んだ周壕とそこに葺かれた葺石、周壕内に転落した円筒、朝顔、形象といった各種埴輪が、祝谷9号墳の存在を示す全てである。

当該地では5世紀代の埴輪片が採集されているが、明確な出土位置は不明である。（吉田他 2006）遺構としては新発見の古墳であり、松山平野内の中期中葉の前方後円墳としては初例となる。

この古墳の発見によって、少なくとも現時点の城北地区における古墳時代中期中葉から後期へと繋がる墓制に新たな資料を追加することができた。

以下、葺石を主体とする検出遺構、埴輪が主体の出土遺物について記す。

【参考文献】
吉田　広・濱田美加
2006 「旧愛媛大学歴史学研究会保管の祝谷丸山遺跡採集資料その（1）」
『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2004年度－』 愛媛大学埋蔵文化財調査室

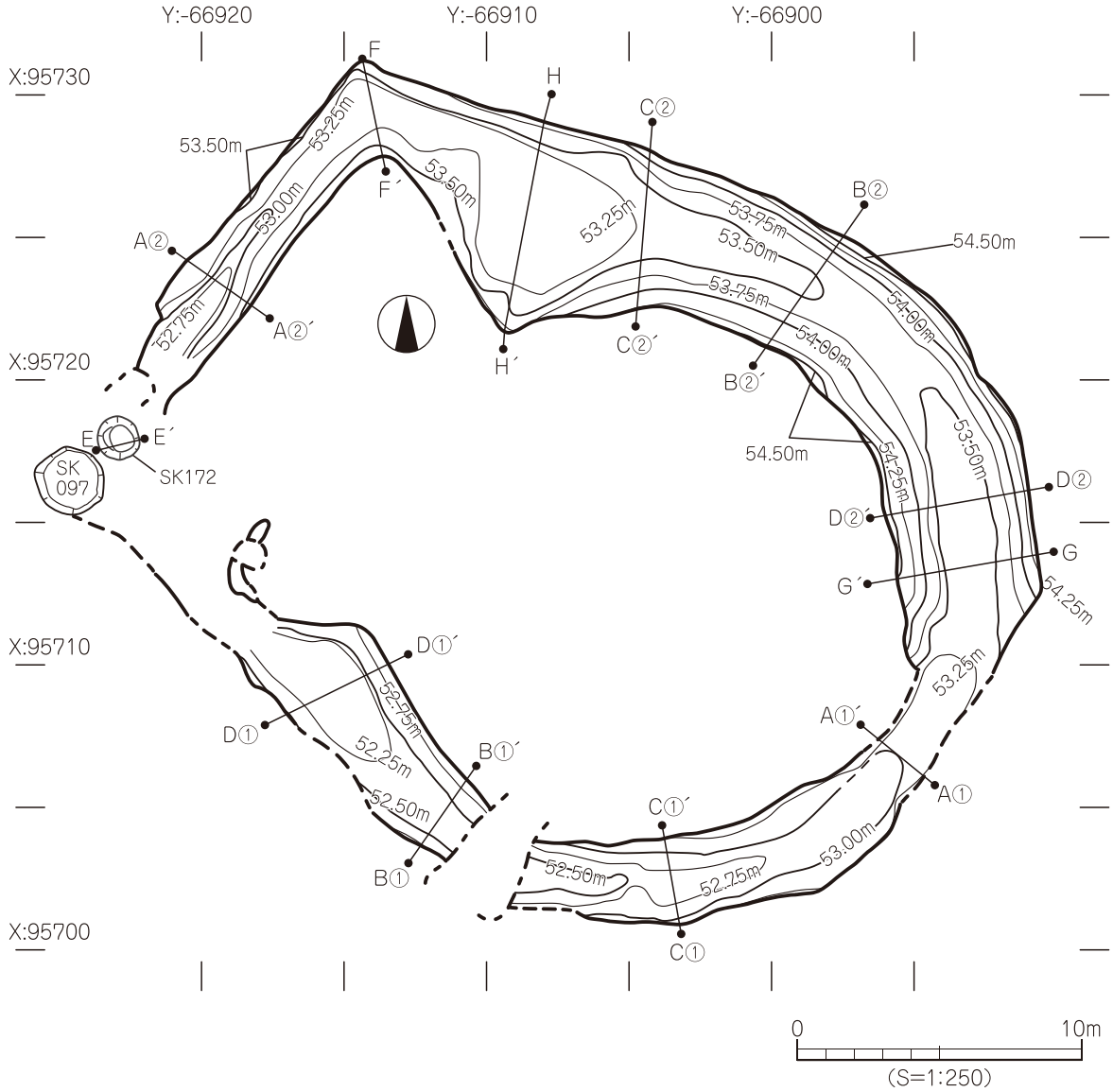
（1）古墳の形状と規模（第５～８図、表１～２、図版１）

９号墳の規模の詳細については表３に記したので、ここでは概略に触れるにとどめたい。

本古墳は主体部の位置も掘り方も確認できないほどに削平されていることから、計測値の大半は、現況の数値及び推定復元値である。

とくに本古墳西寄り部分は墳丘も周壕もほぼ全壊しており、本来の形状を窺うことができず、残存良好な部分を利用しての推定復元となった。

墳丘は全長 26.81m、前方部幅 14.5m、後円部径 18.9 ～ 19.9m、くびれ部幅 8.5m、前方部周壕幅 2.77m、後円部周壕幅 2.86 ～ 4.72m、前方部周壕深さ 0.82m、後円部周壕深さ 0.62 ～ 1.09m、南北の周壕底の標高差 1.57mである。



第５図　等高線及びトレンチ土層断面ポイント図

表１　トレンチ土層断面ポイント座標値一覧　（座標値は概数）

ポイント記号番号	トレンチ土層断面図ポイント座標		レベル（m）			肩幅	深さ（m）
	X	Y	墳丘部肩	周壕底	周壕部肩		墳丘肩－底
A ①	95705.780	－ 66894.270	53.36	53.02	53.31	2.00	0.34
A ①´	95707.900	－ 66896.875					
A ②	95724.530	－ 66921.040	53.05	52.72	53.54	2.58	0.78
A ②´	95722.160	－ 66917.670					
B ①	95703.045	－ 66912.740	52.91	52.30	52.91	2.71	0.61
B ①´	95706.455	－ 66910.360					
B ②	95726.150	－ 66896.700	54.64	53.62	54.51	4.86	1.02
B ②´	95720.500	－ 66900.650					
C ①	95700.560	－ 66903.170	53.22	52.69	53.10	2.80	0.53
C ①´	95704.370	－ 66903.840					
C ②	95729.050	－ 66904.180	54.23	53.46	54.17	4.54	0.77
C ②´	95721.880	－ 66904.780					
D ①	95707.890	－ 66917.775	52.85	52.04	52.50	2.78	0.81
D ①´	95710.370	－ 66912.660					
D ②	95716.240	－ 66890.270	54.63	53.34	54.42	4.72	1.29
D ②´	95715.150	－ 66896.540					
E	95717.060	－ 66924.150	52.58	52.28	52.48	1.77	0.30
E´	95717.830	－ 66922.090					
F	95731.270	－ 66914.360	53.70	53.07	53.67	3.27	0.63
F´	95727.315	－ 66913.535					
G	95713.970	－ 66890.100	54.30	53.21	54.42	3.50	1.09
G´	95712.840	－ 66896.635					
H	95730.099	－ 66907.718	53.92	53.10	53.89	7.31	0.82
H´	95721.082	－ 66909.413					

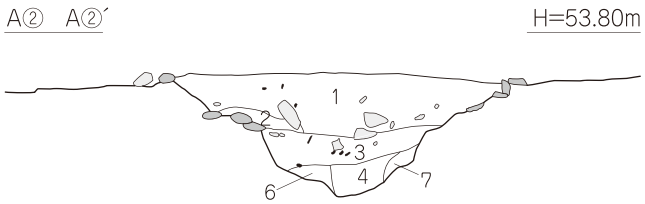
肩幅：肩部が葺石の場合、その外側から計測

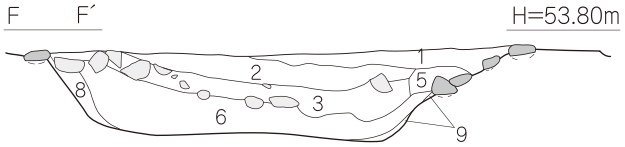
これらを前提に墳丘形状について記述したい。

墳丘は直径 19 ～ 20mの後円部に、撥形をした小さな前方部が付いたものである。前方部先端幅 / 後円部径は約 75％、くびれ部幅 / 後円部径は約 40％、面積で比較すると、前方部 / 後円部は約 30％となる。これは帆立貝型前方後円墳と呼ばれる他の古墳と比較しても形態的には概ね近く、本古墳をそれに含めても差し支えないであろう。

周壕外周はいわゆる「馬蹄形」で、墳丘を囲繞している。後述するが、丘陵斜面下方（南側）より上方（北側）の方が残りが良く、肩部からの深さも 2 倍前後あるため、葺石もしっかりと残っている。

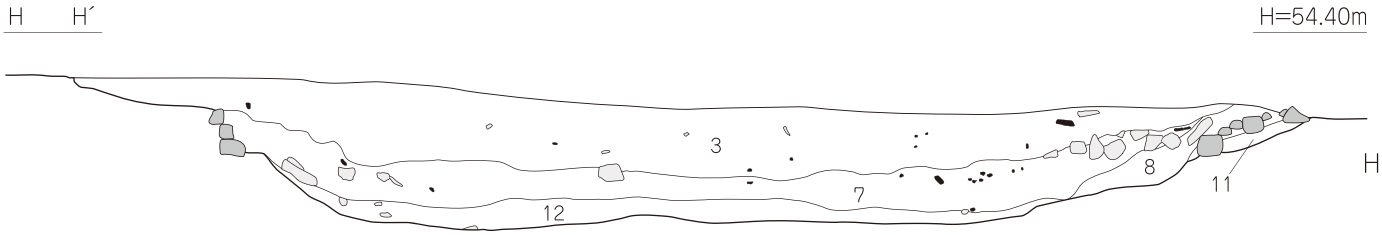
この中で周壕底の標高差が 1.6m近くあり、丘陵斜面下方側のレベルが低い。これだけの標高差があると、水を湛えるためには、南側の周堤をよほど高くするか周壕の途中に渡土堤や堰堤を造る必要がある。しかし、調査の過程でそれらを検出することはできなかった。周堤についても古墳全体の削平が著しいため、その痕跡を確認することはできず、現状では「空堀（周壕）」の可能性が高いと判断している。（作田）

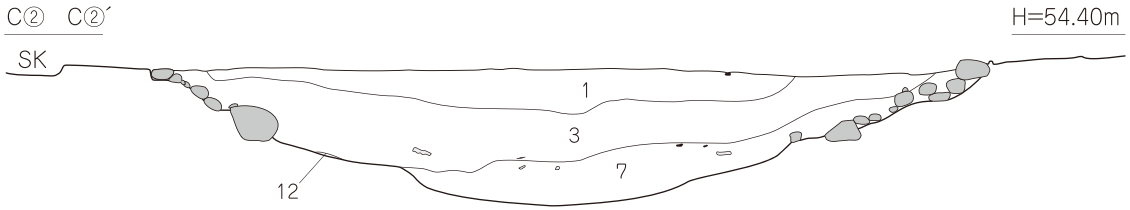




A②-A②´・F-F´

1　7.5YR 3/3　暗褐色砂質土
2　10YR 3/3　暗褐色砂質土
3　2.5Y 3/1　黒褐色砂質土(Hトレンチ等の7層と同じ)
4　10YR 4/3　にぶい黄褐色砂質土と
　　2.5Y 3/1　黒褐色砂質土の混土層
5　10YR 3/4　暗褐色砂質土
6　7.5YR 3/2　黒褐色砂質土
7　10YR 4/3　にぶい黄褐色砂質土
8　7.5YR 3/3　暗褐色砂質土
9　7.5YR 3/2　黒褐色砂質土



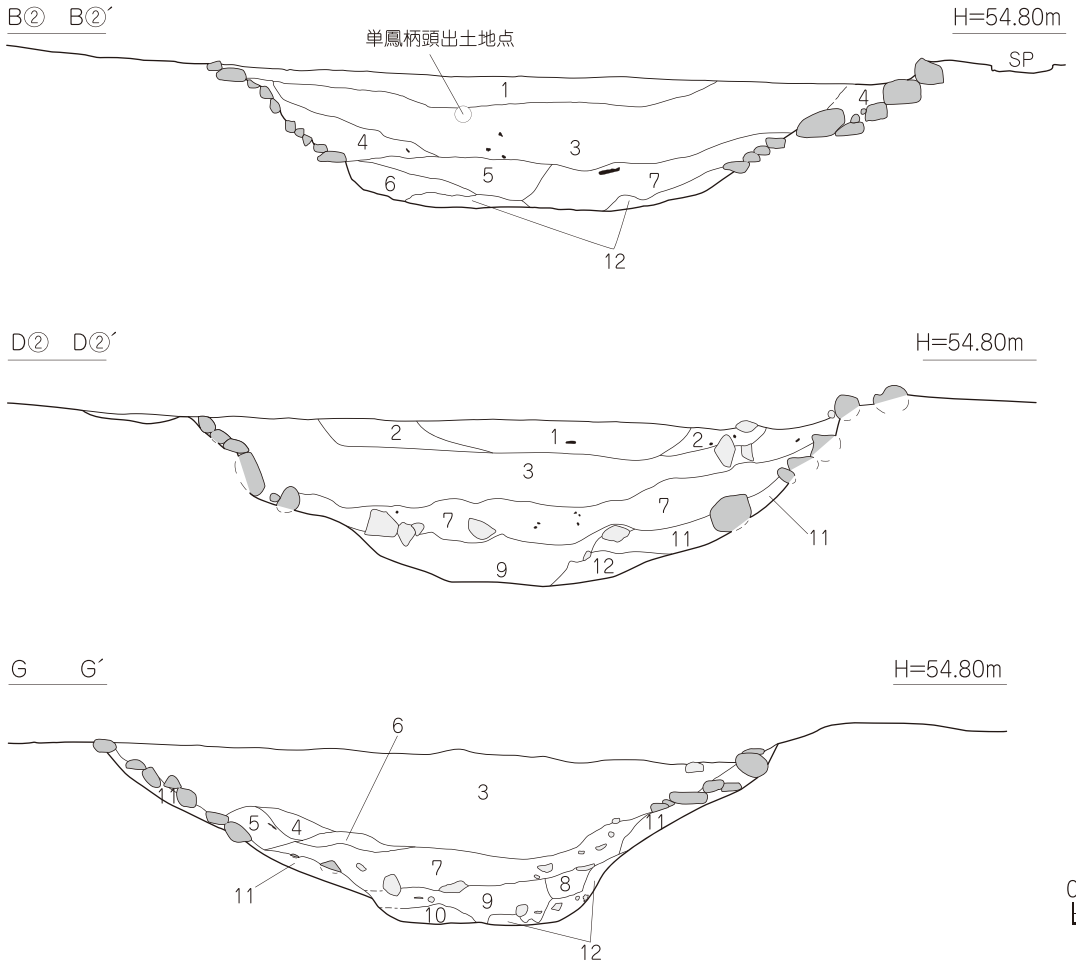


(S=1:50)

H-H´・C②-C②´

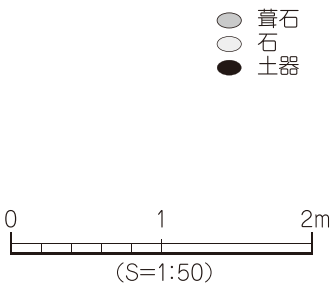
1. 10YR 3/2　黒褐色砂質土
2. 10YR 2/3　黒褐色砂質土
3. 10YR 2/2　黒褐色砂質土
4. 10YR 3/2　黒褐色砂質土
5. 10YR 3/1　黒褐色砂質土
6. 2.5Y 3/2　黒褐色砂質土
7. 2.5Y 3/1　黒褐色砂質土
8. 7.5YR 3/2　黒褐色砂質土
9. 7.5YR 3/3　暗褐色砂質土
10. 10YR 3/2　黒褐色砂質土
11. 7.5YR 3/2　黒褐色砂質土
　（8層よりわずかに褐色が強い）
12. 7.5YR 4/3　褐色砂層（地山か？）

第６図　トレンチ土層断面図（1）

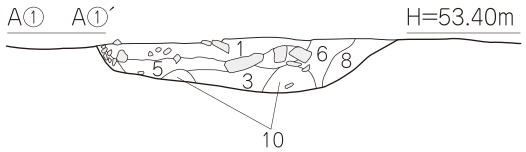


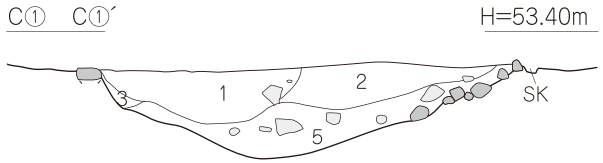
B②-B②´・D②-D②´・G-G´

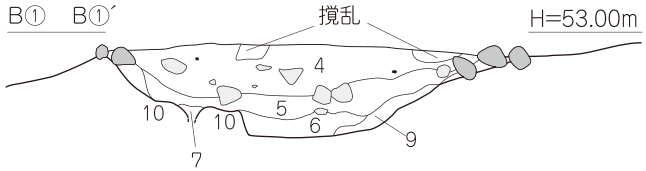
1　10YR 3/2　黒褐色砂質土
2　10YR 2/3　黒褐色砂質土
3　10YR 2/2　黒褐色砂質土
4　10YR 3/2　黒褐色砂質土
5　10YR 3/1　黒褐色砂質土
6　2.5Y 3/2　黒褐色砂質土
7　2.5Y 3/1　黒褐色砂質土
8　7.5YR 3/2　黒褐色砂質土
9　7.5YR 3/3　暗褐色砂質土
10　10YR 3/2　黒褐色砂質土
11　7.5YR 3/2　黒褐色砂質土
（8層よりわずかに褐色が強い）
12　7.5YR 4/3　褐色砂層（地山か？）



第７図　トレンチ土層断面図（2）

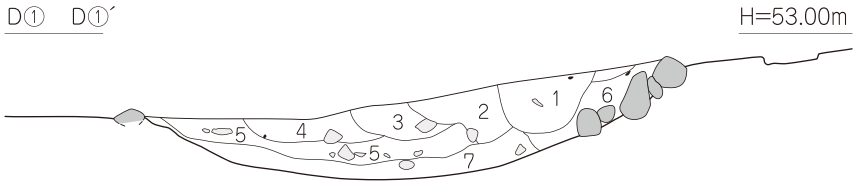






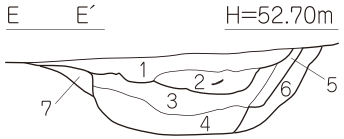
A①-A①´・C①-C①´・B①-B①´

1　2.5Y 3/2　黒褐色砂質土
2　10YR 3/2　黒褐色砂質土
3　10YR 2/2　黒褐色砂質土
4　7.5YR 3/2　黒褐色砂質土
5　2.5Y 3/1　黒褐色砂質土
6　7.5YR 3/3　暗褐色砂質土
7　7.5YR 3/3　暗褐色砂質土(植生痕？)
8　2.5Y 3/2　黒褐色砂質土
9　7.5YR 4/2　灰褐色砂質土
10　10YR 4/3　にぶい黄褐色砂層（地山または地山土のブロック）



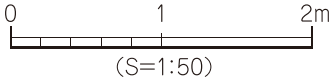
D①-D①´

1　7.5YR 3/3　暗褐色砂質土
2　7.5YR 2/2　黒褐色砂質土
3　7.5YR 3/2　黒褐色砂質土
4　7.5YR 4/2　灰褐色砂質土
5　7.5YR 3/3　暗褐色砂質土
6　2.5Y 3/2　黒褐色砂質土
7　2.5Y 4/2　暗灰黄色砂質土



E-E´

1　10YR 3/3　暗褐色砂質土（周壕埋土）
2　10YR 3/4　暗褐色砂質土（周壕埋土）
3　2.5Y 3/3　暗オリーブ褐色砂質土（弥生土坑埋土）
4　5YR 3/2　暗赤褐色砂質土（弥生土坑埋土）
5　2.5Y 3/3　暗オリーブ褐色砂質土（わずかに淡い）（弥生土坑埋土）
6　10YR 4/3　にぶい黄褐色砂層（地山か？）
7　10YR 4/3　にぶい黄褐色砂層（地山）



第８図　トレンチ土層断面図（3）

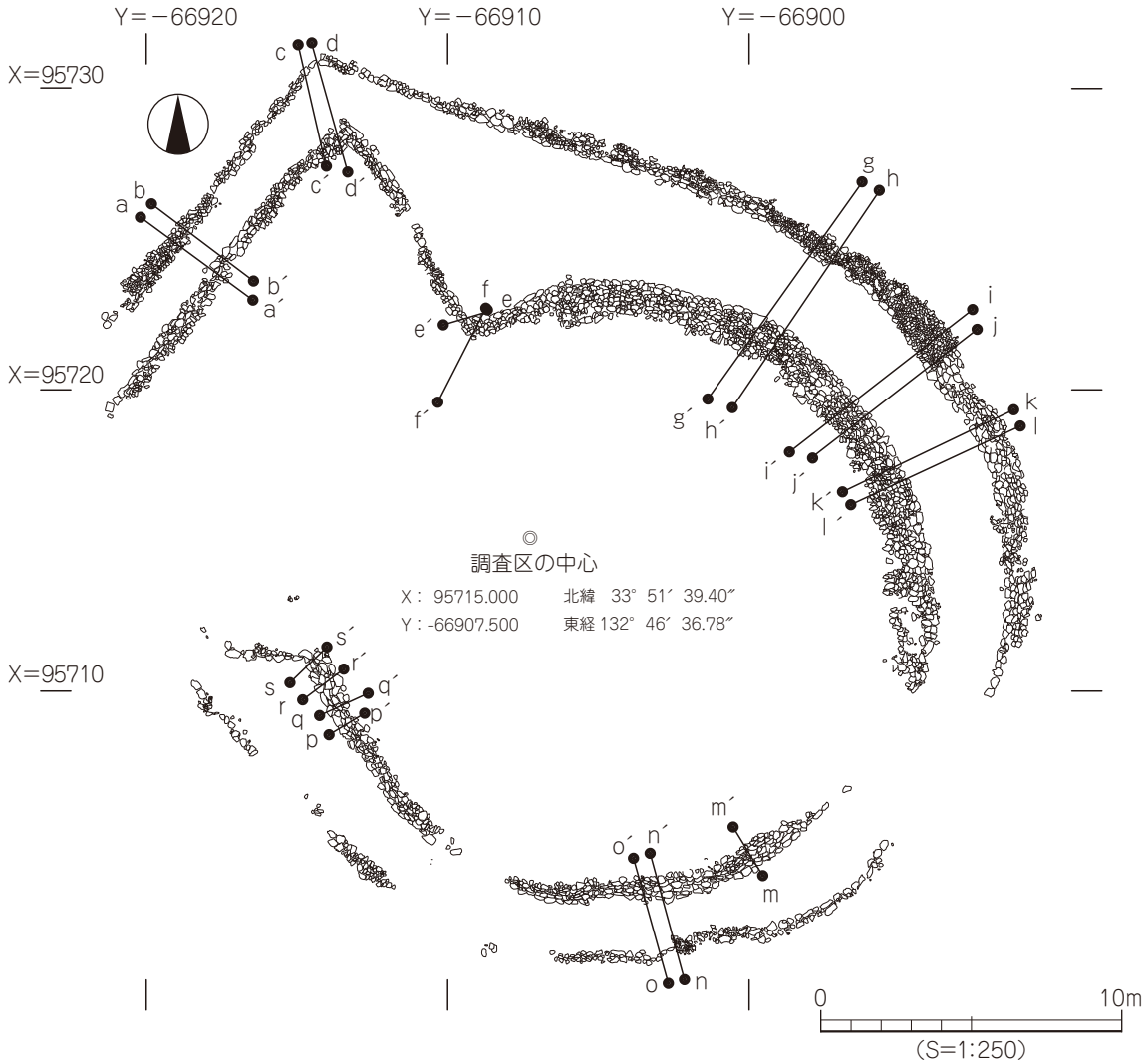
（2）墳丘及び周壕の葺石（第 9 ～ 22 図、表 3、図版 2 ～ 4）

1）概要

本古墳の葺石は、墳丘側だけではなく、周壕外側の壁（以下、周壕外壁）にも葺いてあるのが特徴で、現時点では四国で唯一の事例である。

前述したように、著しい削平のために葺石が欠失している場所が何カ所かある。A ①-①´トレンチの北東 4m～同南西 1.5m付近の墳丘と周壕外壁部分、B ①-①´トレンチ南東 0.5m～ 2.5 mの墳丘及び同 0.5m～ 6m付近の周壕外壁部分、D ①-①´トレンチ南東 0.5m～ 4m付近、南側くびれ部の 2 m付近～前方部南西部分にかけての墳丘と周壕外壁部分がほぼ全壊している場所である。

葺石は表土掘削段階で、そのほとんどの最上面が露出している状態であった。このため、周壕の存在もその時点で確認はできていた。墳丘部は表土直下の検出面で弥生時代の土坑群が確認できたため、盛土は存在していないと判断した。周壕の後円部側については中心から放射状にトレンチを設定した。前方部側は後円部中心から本古墳の概ねの主軸線を割り出し、その線上にトレンチを設けると共に、前方部南北両角と北側くびれ部にも同様に設定した。総数は 8 方向 12 本である。



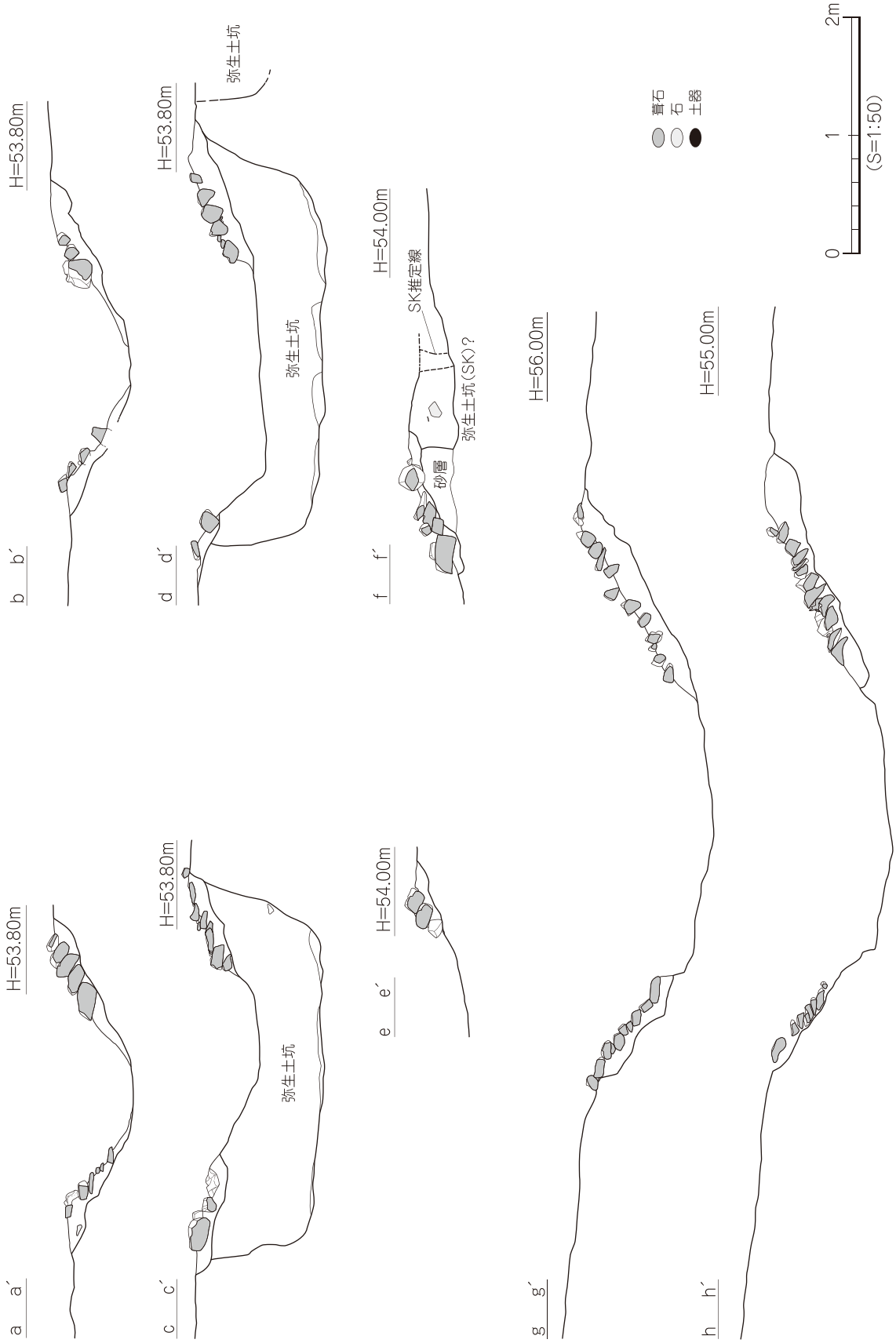
第 9 図　周壕平面図

表２　９号墳規模一覧　　単位：m　（　）：残存値　〔　〕：復元推定値

方位	N－55°54′7.199″－W		―	古墳規模の全長測定線を主軸ラインとした（以下、主軸線）
古墳規模	全長 (31.60)	前方部幅 〔18.83〕	後円部径 26.03	主軸線の位置は後円部中心と括れ部ラインの中心を結んだ線 後円部径（周壕含む）は主軸線の直交方向で測定
墳丘規模	全長 (26.81)	前方部幅 〔14.50〕	後円部径 主軸　〔19.9〕 直交　18.9	全長は、主軸線上の長さ 後円部径は主軸線と直交方向の２カ所で測定 墳丘の高さは削平のため不明
前方部長さ	7.53	―	―	括れ部と前方部先端間の長さ
括れ部幅	〔8.50〕	―	―	北括れ部から前方部先端と平行なラインを引いて復元推定した値
周壕幅	前方部 2.77	後円部 北東側　4.72 南西側　2.86	―	前方部：主軸線で測定 後円部：主軸線の直交方向で測定（北東側と南西側の２カ所） ＊検出した肩部の幅
周壕深さ	前方部 0.82	後円部 1.09 0.62	―	前方部：主軸線で測定 後円部：主軸線の直交方向で測定（北東側と南西側の２カ所） ＊検出した肩部から底部にかけての深さ
周壕底のレベル	最高地点 53.62	最低地点 52.04	レベル差 1.58	

表３　葺石断面ポイント座標値一覧　　（座標値は概数）

ポイント記号番号	近辺の土層断面ポイント	葺石断面ポイント座標 X	葺石断面ポイント座標 Y	墳丘部	←→は通し	周壕部
a	A②-A②′	95725.723	－66920.191	○	←→	○
a′		95722.977	－66916.462			
b	A②-A②′	95726.167	－66919.825	○	←→	○
b′		95723.609	－66916.441			
c	F - F′	95731.452	－66914.961	○	←→	○
c′		95727.403	－66913.919			
d	F - F′	95731.531	－66914.421	○	←→	○
d′		95727.260	－66913.329			
e	H - H′	95722.651	－66908.681	○	墳丘側のみ	
e′		95722.156	－66910.147			
f	H - H′	95722.710	－66908.734	○	墳丘側のみ	
f′		95719.587	－66910.327			
g	B②-B②′	95726.899	－66896.251	○	←→	○
g′		95719.694	－66901.037			
h	B②-B②′	95726.617	－66895.683	○	←→	○
h′		95719.409	－66900.555			
i	B②-B②′	95722.664	－66892.584	○	←→	○
i′	D②-D②′	95717.936	－66898.661			
j	B②-B②′	95722.007	－66892.433	○	←→	○
j′	D②-D②′	95717.717	－66897.964			
k	D②-D②′	95719.338	－66891.222	○	←→	○
k′		95716.611	－66896.901			
l	D②-D②′	95718.799	－66891.003	○	←→	○
l′		95716.184	－66896.625			
m	A①-A①′	95703.879	－66899.547	○	墳丘側のみ	
m′	C①-C①′	95705.494	－66900.530			
n	C①-C①′	95700.426	－66902.143	○	←→	○
n′		95704.622	－66903.282			
o	C①-C①′	95700.302	－66902.678	○	←→	○
o′		95704.457	－66903.834			
p	D①-D①′	95708.550	－66913.935	○	墳丘側のみ	
p′		95709.264	－66912.752			
q	D①-D①′	95709.188	－66914.249	○	墳丘側のみ	
q′		95709.927	－66912.636			
r	D①-D①′	95709.716	－66914.809	○	墳丘側のみ	
r′		95710.731	－66913.447			
s	D①-D①′	95710.280	－66915.233	○	墳丘側のみ	
s′		95711.465	－66914.007			



第10図　周壕葺石断面図（1）

第 11 図　周壕葺石断面図（2）

南側くびれ部から前方部南西部分にかけては葺石の欠失範囲が広く、周壕も壊滅状態であるため、当該部分の本来の形状は不明である。しかしながら、周壕外壁は主軸線に対して概ね対称であることを前提とした上で、前方部南西角と推定できる付近から検出した弥生時代の土坑 SK097、SK172 の埋土上半部に周壕堆積土を確認したことも参考に墳丘と周壕の復元を試みた。（第５図）

次に南側くびれ部について、前方部方向に東に延びる葺石列はほとんど残っていないが、残存部だけを見ると、北側くびれ部から北西方向に延びる葺石列とは、左右対称をなしておらず、大きく外れている。さらに葺石が途切れた先には石の抜き痕と推測できる溝が続いており、それらを合わせて推測すると、南側くびれ部には「造り出し」があった可能性が高い。調査時にはその点を想定して、葺石や溝から墳丘に向かって検出面の精査やトレンチ調査を行ったが、祭祀にかかわるような遺構や遺物は確認できなかった。

２）墳丘及び周壕外壁の葺石平・立面

本古墳は、南西側が丸山川の開析によって区切られ、南方に広がる平野に向かって延びる丘陵上にある。平野側に立つと、手前に見えるのは古墳の南東から南西面であり、斜面上方（北側）は古墳の裏手にあたって見えない。

このことから、視覚的に威信を示すためには、手前側の南東～南西面により重厚で盛大な仕掛けを施していたと推定できるが、現状ではそれを推し測ることはできない。

しかし、周壕底面に近いレベルから集中的に出土する埴輪は墳丘手前側に多く、古墳の裏手にあたる後円部の北側（斜面上方）ではそれが見られないことが、その証拠となり得るかもしれない。

葺石の欠失部については既述したとおりである。残り具合については、概ね斜面上方（北側）が良好で、下方が不良である。実際に後世の段状カットを受けている部分があったり、丘陵肩部に近接していたりすることから、後世の開墾に伴う切削や雨水による土砂流出等によって、下方側がとくに影響を受けたという事情があるのかもしれない。以下、葺石の詳細について記していく。

1. 使用礫

ほとんどは花崗閃緑岩、花崗斑岩（深成岩）、安山岩（火山性岩石）、砂岩（堆積岩）といった周辺で普通に見ることができる円礫、亜角礫、角礫を使用しており、大きさは 10㎝前後から 60㎝を超えるものまである。このうち小礫は通常の葺石に使われるが、中程度のものは通常の葺石以外に、後述する目地石として使用される。大きいものは基底石として使われ、一部は目地石として使用されるものもある。

2. 構造

葺き上げる工程は、以下の順序で行っている。

1. 地山を削り込んで、大まかな段を付ける
2. そこに下敷き、裏込めの土を入れながら、基底部から上方に葺き上げていく

地山の段は各葺石に合致するような精密な削り込みではなく、どちらかというと下敷き、裏込めの土に「スベリ」を起こさないような働きがあるのではないかと推定した。それは、葺石と地山が直に接していないものも多くあることをもって、その根拠とした。各葺石は上方に向かって、水平に少しずつずらしながら葺き上げるもの（葺石断面 q-q´ 他）と、斜面に対して直交に突き刺すように葺くもの（葺石断面ｓ－ｓ´他）とがある。この違いが生じる原因は後段で考察する。

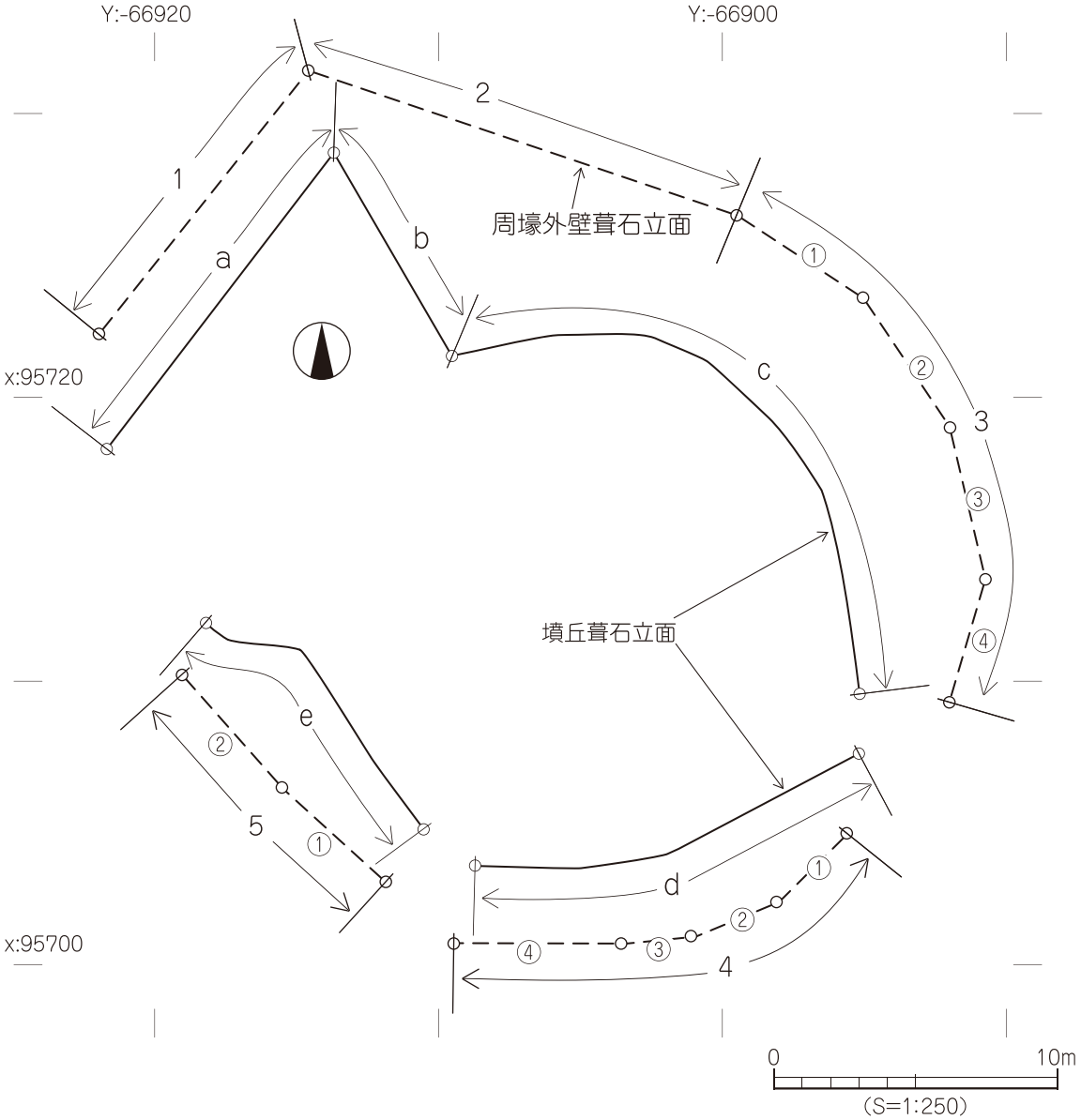
下敷き、裏込めの土は黒褐色砂質土を使用している。目視では腐植質の土を含んでいるように見えるが、非常に締りがある。さらに何カ所かで葺石を伝って上り下りしてみたが、ぐらつきは無かった。このことは、石の葺き方はもちろんであるが、下敷き、裏込めの土の効用もあるのではないかと推定した。

3. 葺き方（第 12 ～ 22 図、図版 2 ～ 4）

石を葺く作業においては、本古墳でもまず目地石を葺いて、次にその間の石を葺くという手順で行っている。

以下、墳丘、周壕葺石平、立面区割り図及び葺石立面図に基づき、目地石を基準に各地点の概要を記す。墳丘は時計回りに a ～ e の記号を付しているが、立面図は葺石の面に相対して左から右へと描画するため、反時計回りとなる。

周壕外壁は時計回りに 1 ～ 5 までの番号を付しているが、立面図も時計回りとなる。



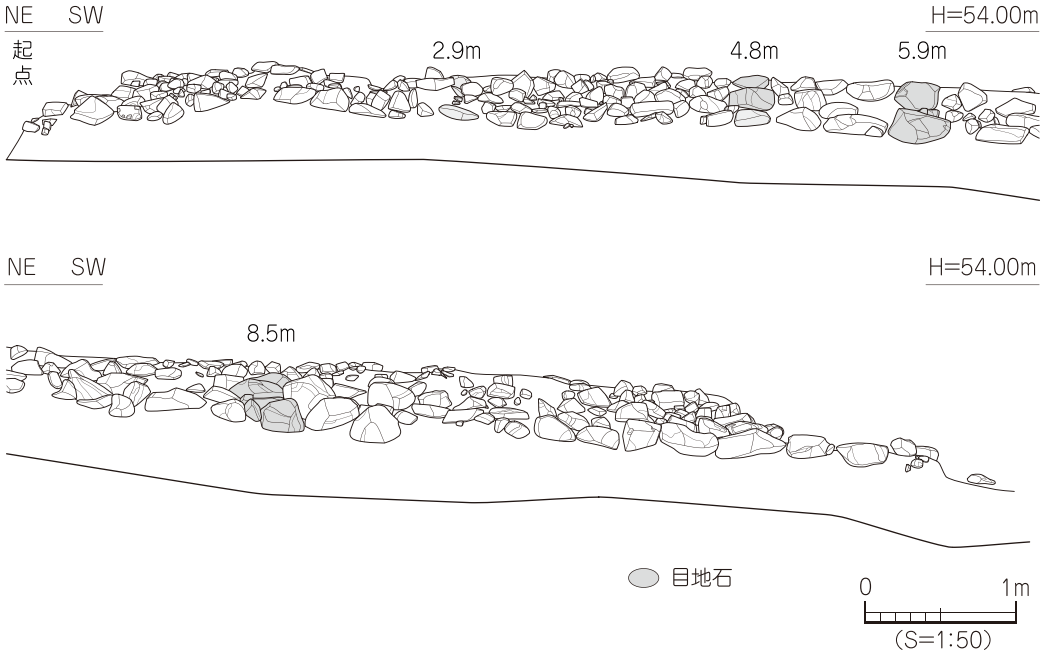
第 12 図　墳丘・周壕葺石　区割り図

a 区（第 12・13 図、図版 2・4・5）

前方部前面の葺石で、北東角を起点とし、南西端を終点とする。

目地石は起点から 2.9、4.8、5.9、8.5m付近に認めることができる。このうち、2.9m地点は目地が明瞭に通っているわけではないが、その両側の葺石を見ると、起点側の基底石が波打っていることや石の密度が粗いことから、目地石と想定した。8.5m地点は周辺に 30 ～ 40㎝前後の大きな石が集中しており、網掛けした石以外のものも含めて目地石である可能性が高い。

それぞれの目地石間の距離が 1.9、1.1、2.6mと規則性がないため、上記以外にも目地石があるかもしれないが、抽出することはできなかった。

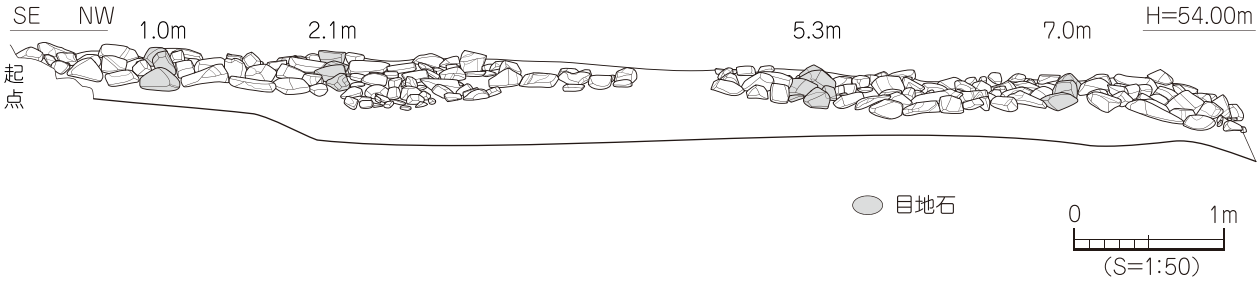


第 13 図　墳丘葺石立面図（a 区）

b 区（第 12・14 図、図版 2・4・6）

墳丘北東側くびれ部から前方部北東角にかけての葺石で、区割り図 a の起点及び区割り図 c の終点と接する。

葺石が概ね 3 ～ 4 段と少ないが、目地石は起点から 1.0、2.1、5.3、7.0 m付近に認めることができる。このうち 2.1m地点は終点側で使用している葺石の一部に小さい石が目立つことから、この地点を境に両側が相違していると判断し、これを目地石とした。2.1 ～ 5.3m間は葺石の欠落している部分もあ



第 14 図　墳丘葺石立面図（b 区）

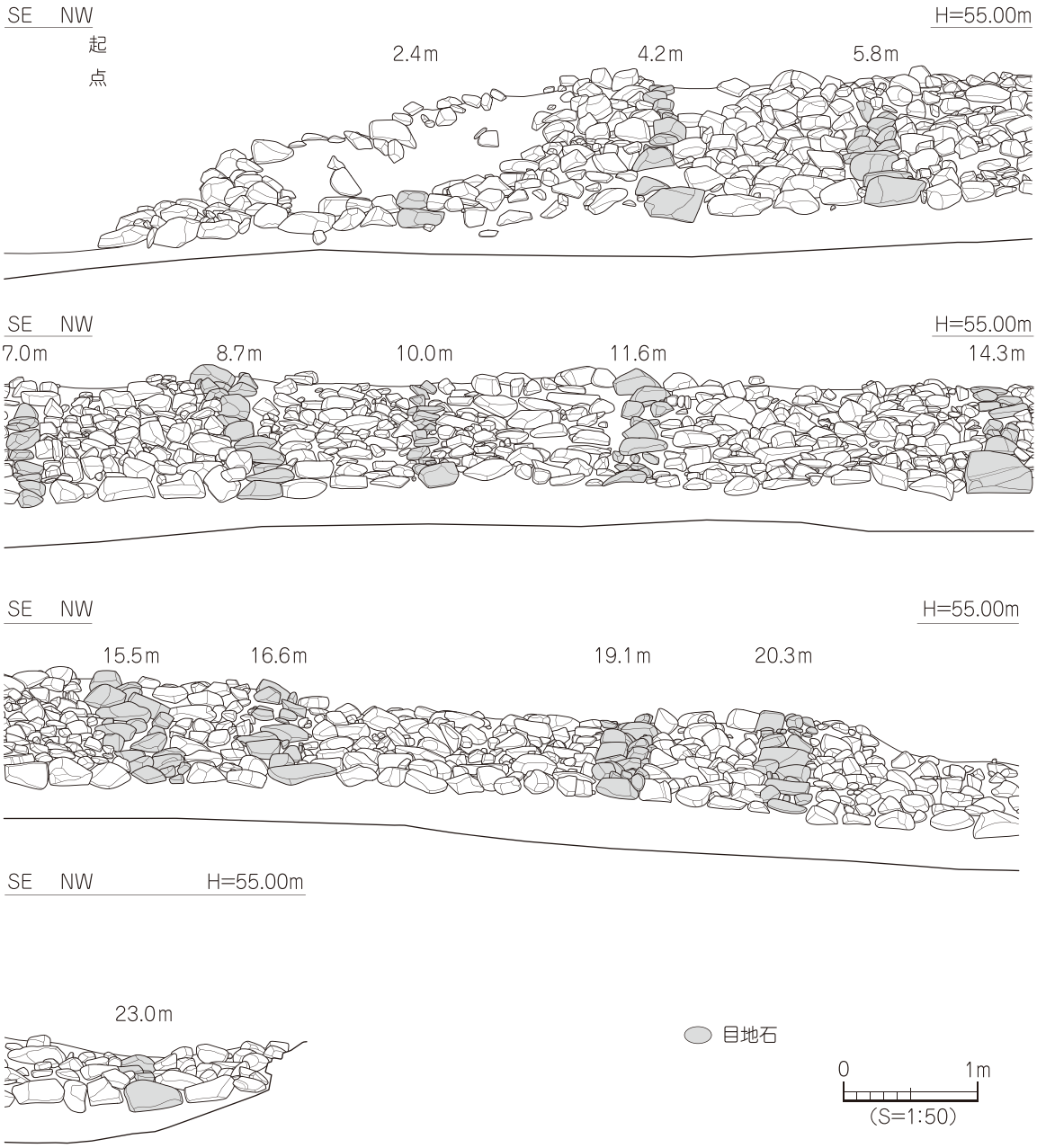
るなど、残存状況が悪いため、新たな抽出には至らなかった。

起点側（くびれ部）と終点側（前方部北東角）の基底石のレベルを比較すると、起点側の方が約 0.2 m高くなっている。これは前方部の復元をする上での材料となる。

ｃ区（第 12・15 図、図版 2・4 ～ 6）

墳丘後円部の北から東側で、後世の開墾や切削等で葺石が途切れる地点（X 座標：95710、Y 座標：－ 66895 付近）を起点とし、終点は墳丘北東側のくびれ部にあたり、区割り図ｂの起点と接する。この部分は全長が約 24.1mある上、円弧状であることから、立面展開した際にひずみを解消することはできなかった。しかし、全体を把握するために、あえて一葉の立面展開図とした。

以下、この区割り図に従って記述する。



第 15 図　墳丘葺石立面図（ｃ区）

起点から約 3.5m地点と 21.0m地点から終点までは、後世の切削によって、石の欠落が著しい。

目地石は起点から概ね 2.4、4.2、5.8、7.0、8.7、10.0、11.6、14.3、15.5、16.6、19.1、20.3、23.0m付近に認めることができる。このうち 2.4 及び 23.0m地点は基底石とその上段の 2 ～ 4 石しか残っていないが、しっかりと面を揃えていることから目地石と判断した。

さらに、4.2、7.0、10.0、15.5、20.3m地点は、それぞれの両側に葺いている石の大きさ、大小の石の組合せ等に違いを認めることができるので、これも目地石と判断した。

この他、11.6 ～ 14.3、16.6 ～ 19.1、20.3 ～ 23.0mは間隔が広いことから、その間にも目地石が存在する可能性はあるものの、調査中に目地の通りや葺石の違い等を認めることはできなかった。

なお、15.5m及び 16.6m地点の目地石は、2 ないし 3 列の石を目地石として網かけをしているが、この中の一部のみが目地石である可能性もあり、そのあたりを明確にすることはできなかった。

今後もこのような掲載図が何カ所かあるが、同様であることを記しておきたい。

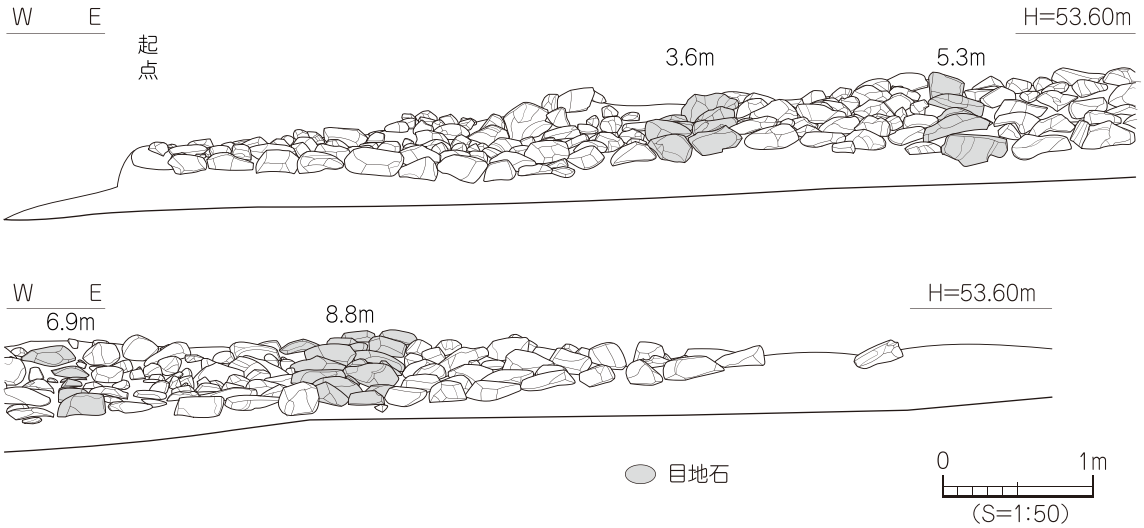
d 区（第 12・16 図、図版 4 ～ 6）

墳丘後円部の南側にあたり、検出長は約 14.1mで、後世の切削によって葺石の上半部は失われている。大部分は基底石から 4 ～ 7 段前後の葺石が残っているが、起点と終点の両側は完全に欠落している。本図の範囲でも、終点（東）寄りの 2.6mの間は基底石を 1 石検出したのみである。

西端の葺石を起点として、3.6、5.3、6.9、8.8m付近に目地石を認めることができる。このうちの 8.8m地点は、その終点（東）側に接して、もう一列あるようにも見え、2 列の目地石になる可能性もある。

その他に起点から 1.8m付近にも目地の通っていそうな葺石もあるが、明瞭ではないため認定できなかった。

それぞれの目地石の間隔は 1.6 ～ 1.8mで、ほぼ等しい。



第 16 図　墳丘葺石立面図（d 区）

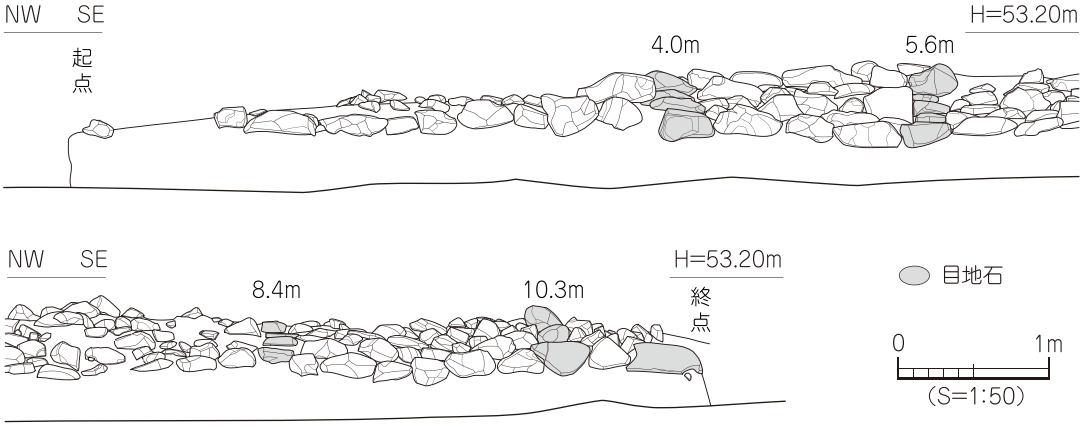
e 区（第 12・17 図、図版 5・6）

墳丘後円部南西端から南側くびれ部付近にあたり、検出長は約 11.2mである。後世の切削により葺石の上半部は失われている。大部分は基底石から 4 ～ 6 段前後の葺石が残っている。このうち、起点

の基底石のみ、他とは離れた状態で検出した。

この北西端検出の基底石を起点として、4.0、5.6、8.4、10.3m付近に目地石を認めることができる。

それぞれの目地石の間隔は1.6～2.8mで、ばらつきがあるが、起点から4.0及び5.6～8.4mの区間は、途中にもう1カ所目地石の存在する可能性がある。さらに、終点部は上部が全て欠落しているが、大きな基底石を目地石と判断した。



第17図　墳丘葺石立面図（e区）

1区（第12・18図、図版4・5）

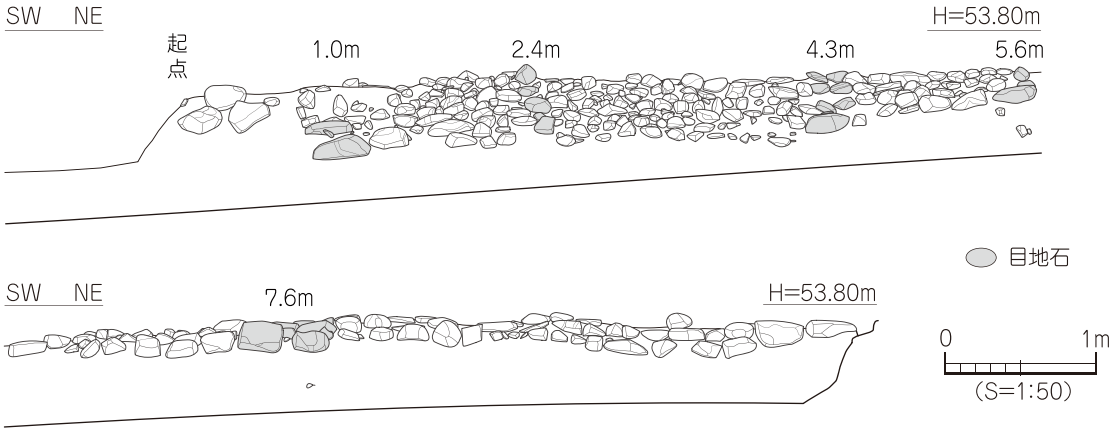
前方部周壕外壁で、南西から北東に延びる。南西端の葺石から南西側は欠落している。

南西端葺石を起点として、おおよそ1.0、2.4、4.3、5.6、7.6m付近に目地石を認めることができる。

それぞれの間隔は大きく分けて、それぞれ1.2～1.3mと1.8～2.0mの2つがある。しかし、起点から1.5～4.3mの範囲は、5～8段の葺石が残っており、目地石の抽出も比較的容易であるが、それ以外は2～3段の検出にとどまり、5.6mと7.6m地点は石の大きさや通りから判断したものである。

基底石を除くと、起点から1.0～5.6mの間は10～20cm前後の石を使用しているが、2.4～4.3mの間は葺き方に整然としたところが無く、雑な印象を受ける。

5.6mから北東側は、残存する段数が少ないため断定はできないが、南西側に比べて20cm前後の石の割合が多い。



第18図　周壕葺石立面図（1区）

２区（第 12・19 図、図版 4・6）

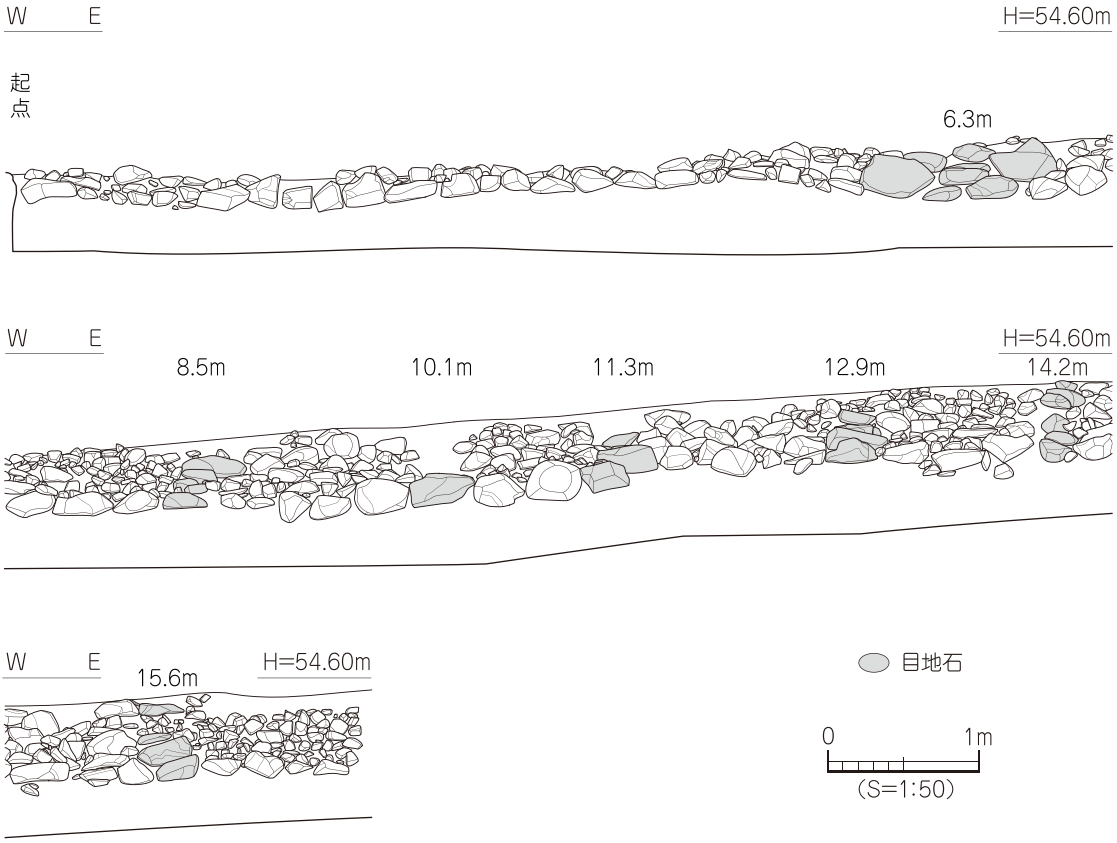
周壕外壁で、前方部北東角を起点として南東へ約 16.9m直線的に延びる部分である。

起点から 5.6mの範囲は、葺石が 1 ～ 3 段ほどしか残存しておらず、目地石を抽出することはできなかった。

目地石は起点からおおよそ 6.3、8.5、10.1、11.3、12.9、14.2、15.6m付近に認めることができる。このうち、6.3m地点は 3 列ほどが該当しそうであるが、その全てであるか一部であるかの判断はできなかった。さらに、10.1m地点は基底石のみであるが、その両側に葺かれた石の状況から、目地石と判断した。それぞれの間隔は 1.2 ～ 2.4mとばらつきがある。

基底石を除くと、起点から 6.3 ～ 8.5m、10.1 ～ 11.3m、12.9 ～ 14.2mは 5 ～ 10㎝前後の石の割合が高く、15㎝を超えるものは少ない。逆に 8.5 ～ 10.1m、11.3 ～ 12.9m、14.2 ～ 15.6mは小さい石の割合が低い。

起点から 15.6m地点の目地石より先は区割り図 3 に属する葺石である。



第 19 図　周壕葺石立面図（２区）

３区（第 12・20 図、図版 3 ～ 6）

区割り図 2 に続き、墳丘の後円部北東側に沿う周壕外壁で、後世の切削等で葺石が途切れる地点（X 座標：95710、Y 座標：－ 66892 付近）までの範囲である。この部分は弧を描いている上に、全長が約 20mあるので、立面図は 3 分割した。

全体の約 1/2 を占める 3 区①・②は 2 区との接続部を起点として、南東方向に約 11m延びる。起点から約 9.6m地点の石は 2 列で目地が通っていることから明瞭に判断できる。しかし、その間の葺

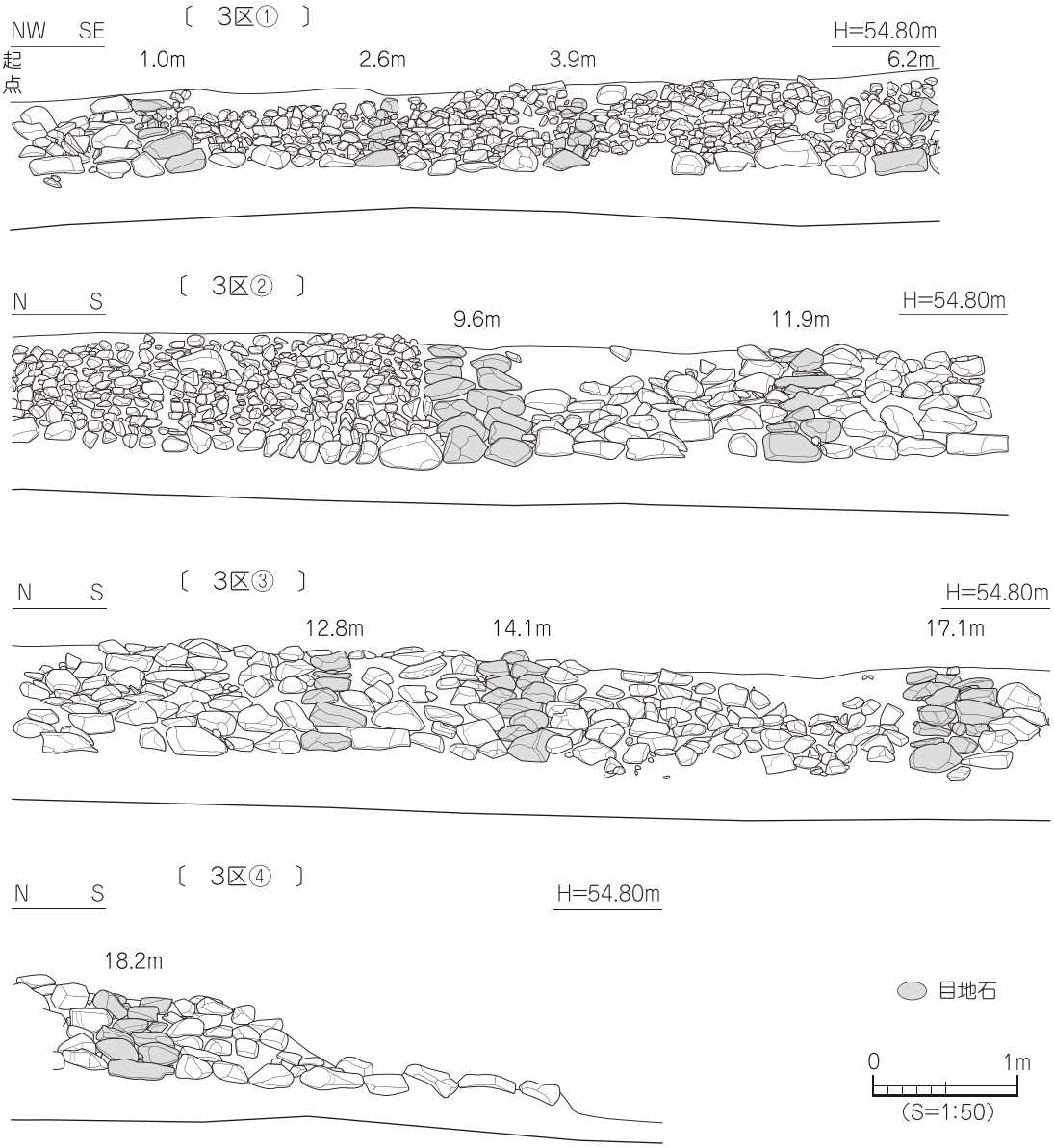
石は5～10㎝の小石を多く使用しているものの、明瞭に目地石と断定できるものはなく、中段や上段に20㎝を超えるような石を配して、それらしく見える数カ所を候補地として示した（起点からおおよそ1.0、2.6、3.9、6.2m）。9.6m地点より先は、20～30㎝を超すような比較的大きな石を主体に葺いている。起点から11.9m地点にも目地石があり、これより先は3区③に属する葺石である。

なお、3区②図の終点寄りと3区③図起点寄りの約2.7mの範囲は、葺石図が重複している。

3区③は起点からおおよそ12.8m、14.1m、17.1mの地点に目地石を認めることができる。14.1～17.1mの間にも目地石の存在する可能性があるが、石の欠落が多いため明確にできなかった。

3区④は3区③との接続部を起点として、南に約4.1m延び、それより先の葺石は後世の切削等で完全に欠落している。起点から約18.2m地点に目地石が通っているが、それより先は葺石の欠落が多く不明である。

4区（第12・21図、図版4～6）



第20図　周壕葺石立面図（3区）

4区は①～④の4面の図に分けているが、後世の切削による石の欠落が著しく、全体を通して基底石のみ、もしくは2～3段の残存にとどまっており、目地石の判断は難しい。

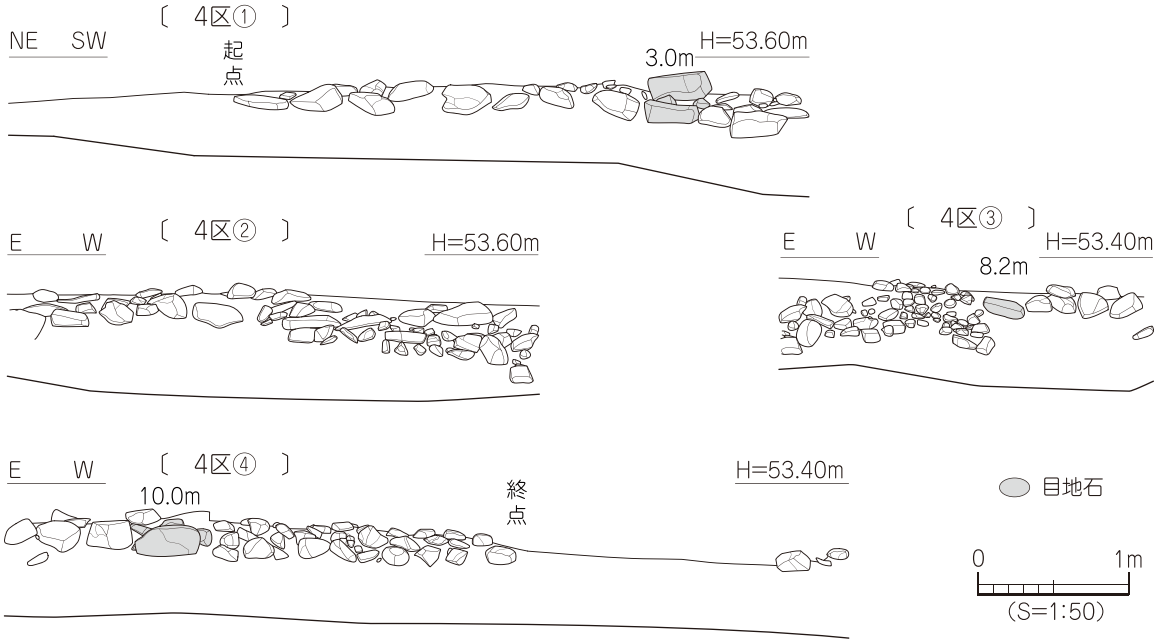
4区①は起点から約3.6mの範囲図である。ほぼ基底石のみの残存であり、明確に目地石として判断できるものはない。しかし、起点から約3.0m地点に残っている2段の比較的大きな石が目地石となる可能性がある。

4区②は起点から約3.8～7.0mの範囲である。本地点はほぼ1～2段の残存で、目地石は不明である。

4区③は起点から約7.0～9.2mの範囲である。本地点もほぼ1～2段の残存であるが、起点から8.2mの石の両側に葺いてある石の大きさが違うことから、この石が目地石の可能性あり。

4区④は起点から約9.2～12.3mの範囲である。本地点の葺石は1～3段の残存で、目地石は不明瞭である。しかし起点から約10.0mまでと、それより先の葺石の大きさが明らかに違っており、その間の最も大きな基底石が目地石になる可能性あり。

なお、終点から約1.7m離れた地点で3石検出したが、原位置を保っているかは不明である。



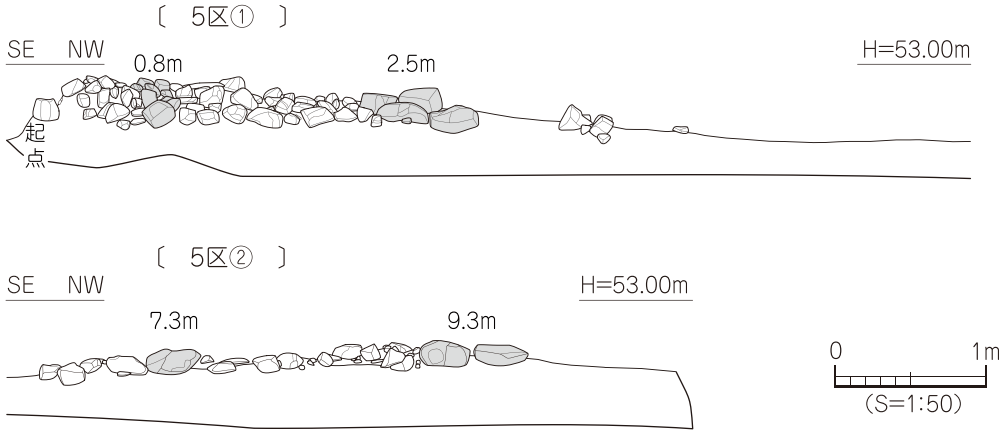
第21図　周壕葺石立面図（4区）

5区（第12・22図、図版5・6）

本地点は、石の欠落が著しく、基底石から上方に2～3段の残存にとどまっていて、目地石の断定は困難である。しかし、使用している葺石の違いなどから、4カ所を候補として掲示した。

5区①は起点から0.8mの範囲に葺いている石の大きさが、2.5mまでの範囲よりも若干小さく、葺き方も異なっていること。その間に葺いてある石の目地が通っていることから、これを目地石と判断した。さらに2.5m地点にある4石が比較的大きな石を使用していることから、その全部もしくは一部に目地石の可能性があると判断した。

5区②は起点から7.3mと9.3m地点に目地石を想定した。（作田）



第 22 図　周壕葺石立面図（5 区）

（3）出土遺物

周溝各地点での出土傾向

本古墳からは多量の埴輪片が出土しているが、そのほとんどが墳丘周囲を巡る周壕内で、前方部、北括れ部、後円部南側、西側では集中的に出土している。また、出土埴輪の種類は円筒･朝顔形埴輪、形象埴輪（動物・器財ほか）と多種にわたり、特に馬形埴輪は、前方部前面の周壕に転落した出土状況から、本来は前方部墳頂に樹立されていた可能性が高い。

以下、各地点出土の円筒・朝顔形埴輪および線刻埴輪や形象埴輪について説明を加える。なお、「B 種ヨコハケ」のうち、静止痕が明瞭でないものについては（　）書きとした。

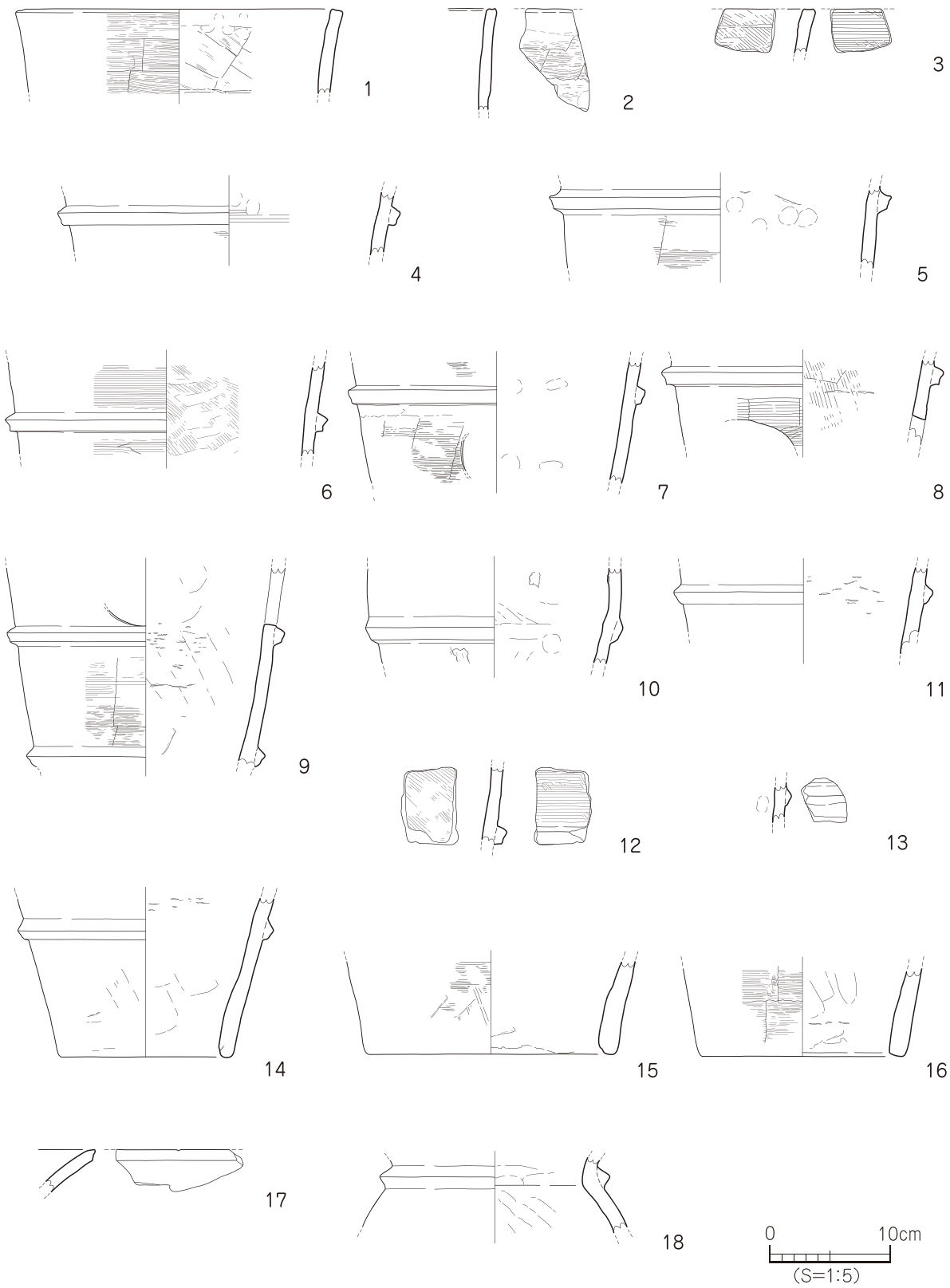
さらに、「前方部（E ‐ E’ ～ F ‐ F’）」等の項目は、概略の出土範囲を示しているので、第 5 図又は付図で位置を参照いただきたい。

1　円筒埴輪・朝顔形埴輪（第 5・23 ～ 30 図、表 4 ～ 8、巻頭図版 2、図版 7・8、付図）

（1）前方部（E-E’ ～ F-F’）（遺物№ 1 ～ 18）

1 ～ 16 は円筒埴輪で、赤色顔料が残る個体もある。口縁部（1 ～ 3）は外面に（B 種）ヨコハケが確認でき、端部外面に板ナデ･ヨコハケが施される。3 の内面には爪状の擦痕列がみられる。胴部（4 ～ 13）には断面台形の突帯が貼付され、ヨコナデにより上端が尖り気味の個体が多く、7・9・11・13 は突帯と胴部の色調が異なる。5・7・8・9 外面には B 種ヨコハケが顕著で、ハケ原体の中には粗目の個体（12）も混在する。スカシ孔は円形（8・9）で、内面にはナデ・指オサエ・ハケのほか、爪状の擦痕（列）が顕著な個体（8・9・11）もある。基底部（14 ～ 16）は端部をナデ、指オサエで調整し、16 は外面に複数段の B 種ヨコハケ、底面に置台痕が残る。14 は突帯と胴部の色調が異なる。

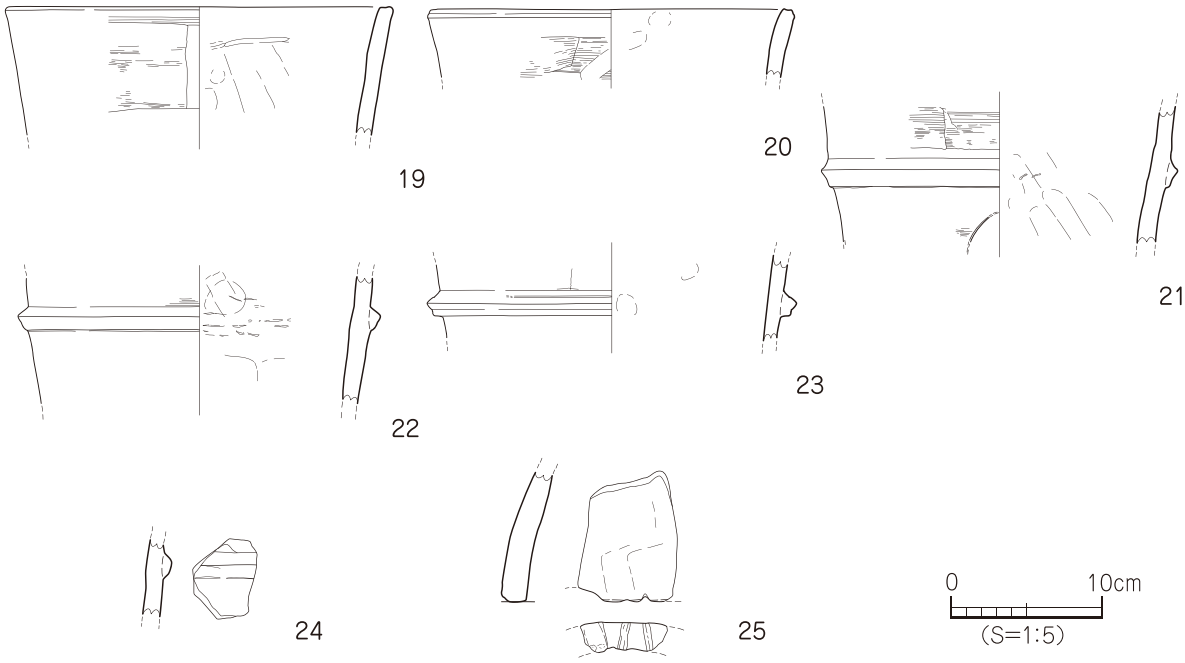
17・18 は朝顔形埴輪で、口縁端部は鋭く尖り、やや張った肩部から括れ部には断面三角形の突帯が貼付される。18 外面には赤色顔料が残り、内面にはヨコ・ナナメナデが顕著である。



第 23 図　埴輪実測図（前方部）

（２）北括れ部（H-H’）（遺物№19 ～ 25）

19 ～ 25 は円筒埴輪である。口縁部（19・20）は外面にＢ種ヨコハケ、端部内面に幅 2.0cm前後のヨコナデが認められ、19 内面には爪状の擦痕列が残る。胴部（21 ～ 24）には断面台形（23）のほか断面三角形（21・22）の突帯が混在し、24 は突帯と胴部の色調が異なる。外面はＢ種ヨコハケで、21 には円形スカシ孔を穿つ。24 内面には爪状の擦痕を残す。基底部（25）は端部がやや厚みを持ち、底面には置台痕が残るほか、指ズレ痕（剝がし痕）がみられる。（山内）

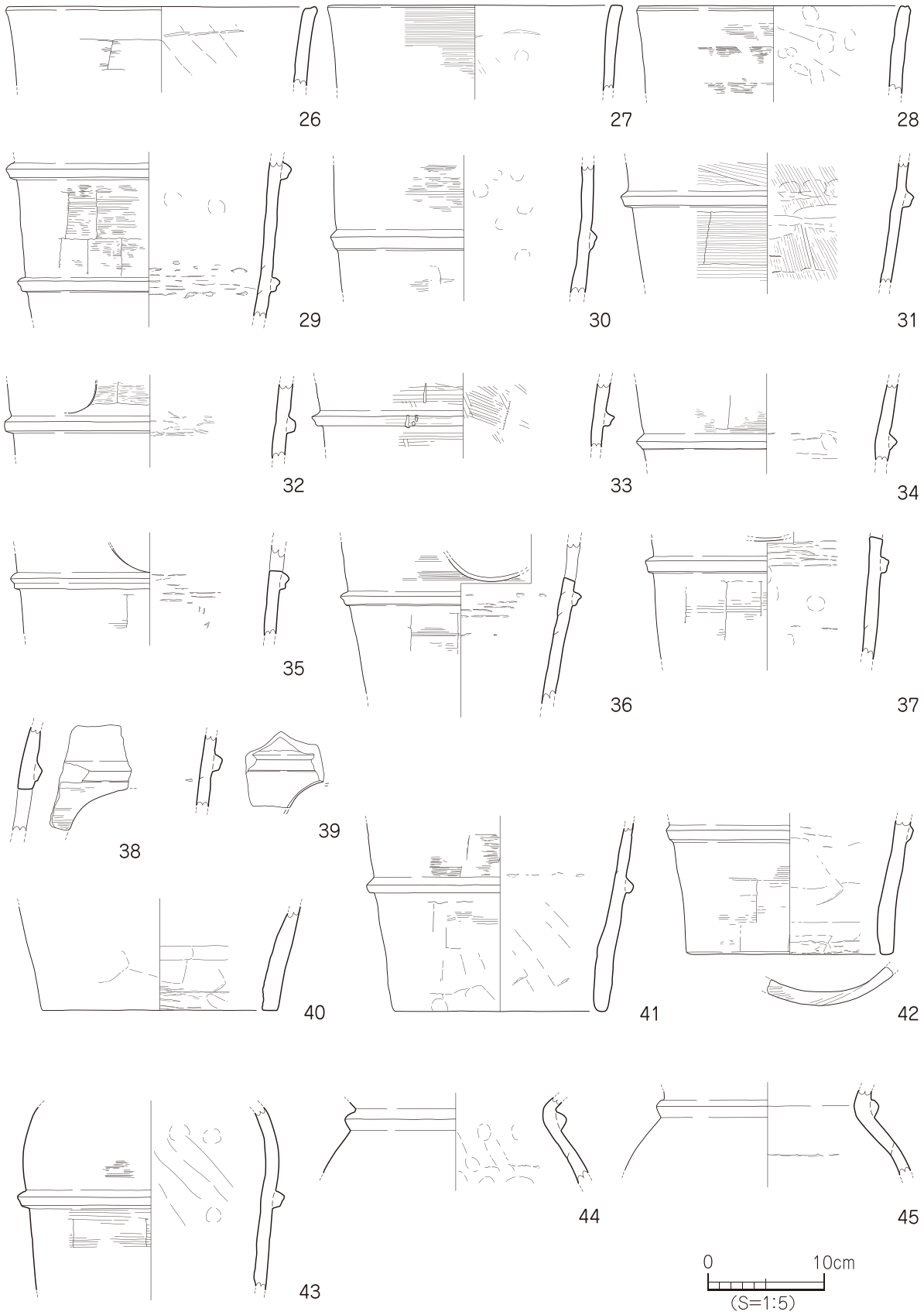


第 24 図　埴輪実測図（北括れ部）

（３）後円部北側（Ｃ②－Ｃ②’）（遺物№26 ～ 45）

26 ～ 42 は円筒埴輪で、赤色顔料が残る個体もある。口縁部（26 ～ 28）は外面に（Ｂ種）ヨコハケ、端部外面には幅 2.0 ～ 3.0cmの板ナデ・ヨコハケが施され、26・27 内面には爪状の擦痕列が顕著に残る。胴部（29 ～ 39）には断面が台形のほか、三角形の突帯（34・38）も散見される。外面には（Ｂ種）ヨコハケが施され、29・36 は突帯間に複数段みられる。ハケ原体の中には粗目の個体（31・33）も混在する。スカシ孔は円形で、内面にはナデ・指オサエ・ハケのほか、爪状の擦痕（列）が複数段にわたり集中する個体（29・32・34 ～ 37）も多い。基底部（40 ～ 42）は内外面の（Ｂ種）ヨコハケ、ナデ・オサエに加え、40・42 では端部内面に強いオサエと爪状擦痕が顕著に残る点で特徴的である。42 底面には置台痕が残る。

43 ～ 45 は朝顔形埴輪である。43 のように肩部は張り、括れ部には断面三角形の突帯が貼付される。外面はハケ（Ｂ種を含む）、内面はナデ・指オサエが顕著で、粘土紐接合痕も観察できる。（山内）

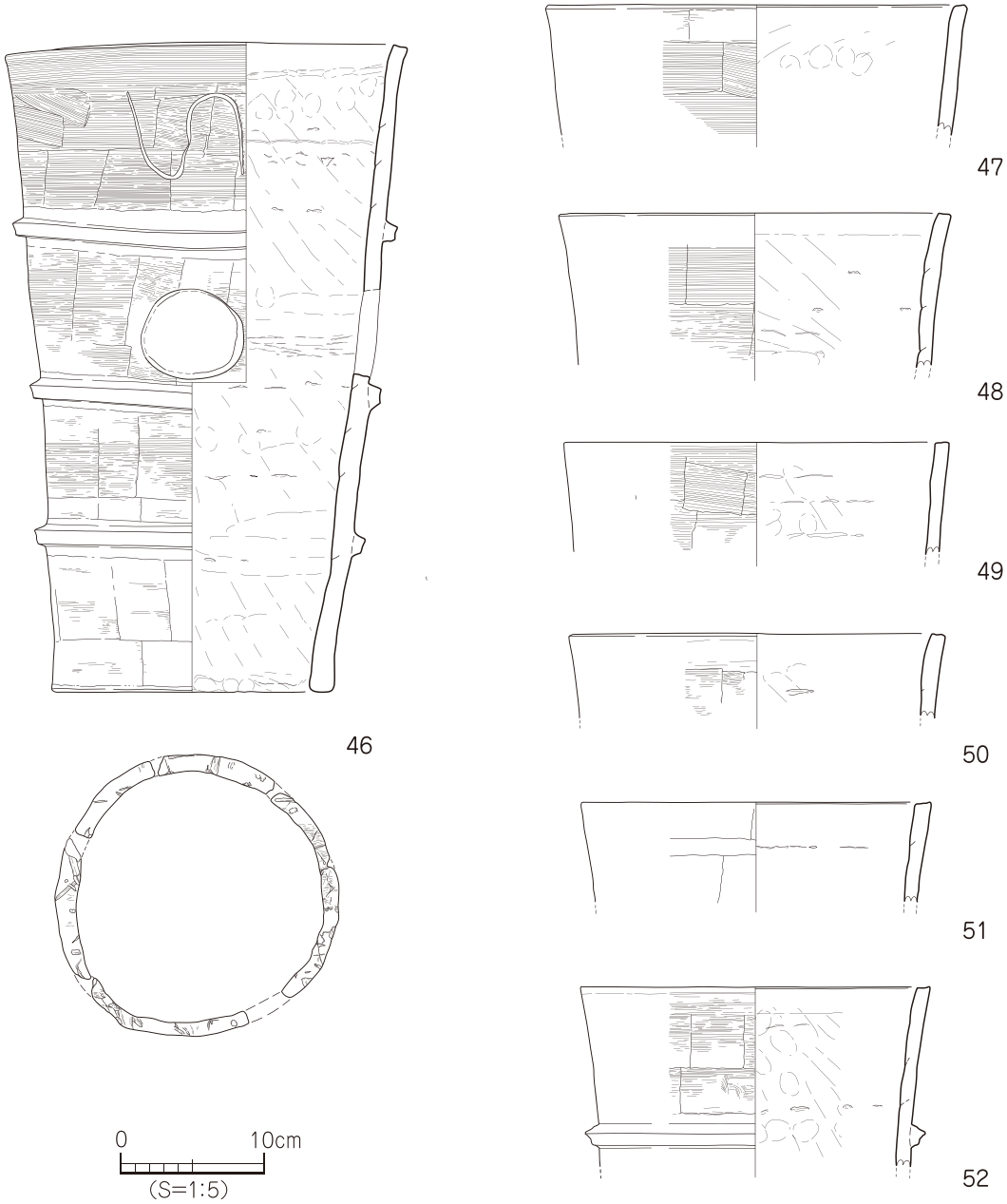


第 25 図　埴輪実測図（後円部北側）

（4）後円部南側（A①－A①’～C①′）（遺物№46～69）

46～66は円筒埴輪である。このうち、46は全体が完形に復元できる個体で、器高約45.1cm。突帯3条4段構成で、突帯断面は台形、突帯間幅および口縁高・基底部高は概ね10.0～12.0cmでほぼ等しい。スカシ孔は3段目に2孔を穿っている。外面にはB種ヨコハケが突帯間に複数段施され、口縁端部外面には仕上げに幅3.0cmのヨコハケが巡り、口縁部外面には波状の線刻がある。内面には全面に爪状の擦痕（押圧）列が顕著で、底面には置台痕が残る。

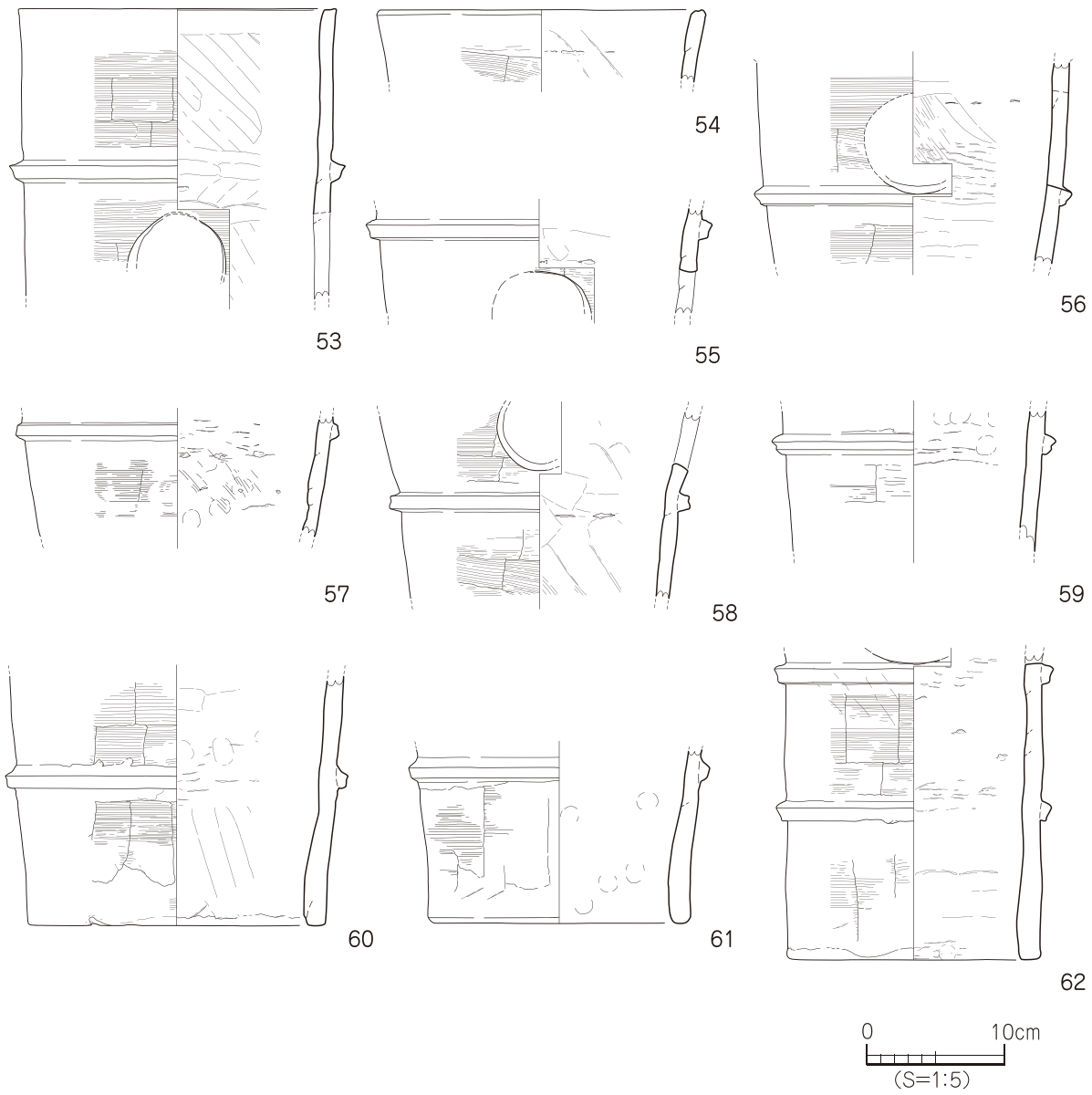
口縁部（47～54）は外面にB種ヨコハケ、端部外面には幅2.0～3.0cmのヨコハケ（ナデ）、内面は後述の56のように爪状の擦痕列が顕著に残る個体が多い。49には赤色顔料が胴部内面にも垂れて付着する。胴部（55～59）には上端部が尖った断面台形の突帯が貼付される。外面はB種ヨコハケ



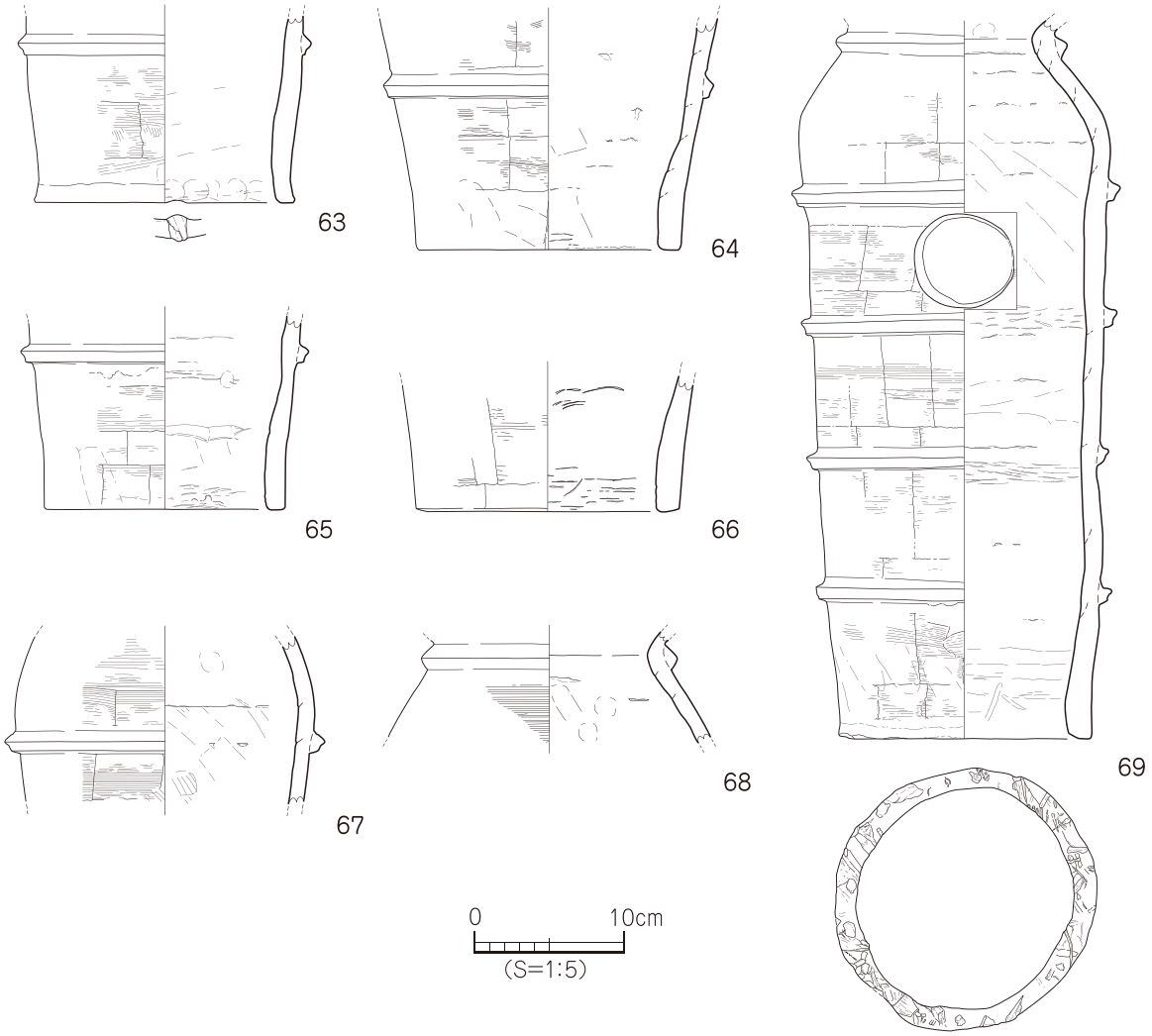
第26図　埴輪実測図（後円部南側）（1）

で円形スカシ孔を穿ち、内面は突帯裏側にあたる部分に、複数段の爪状擦痕（列）が集中する。基底部（60 ～ 66）は基底部高 10.0 ～ 11.0cm、外面には複数段のＢ種ヨコハケ、62・63・65・66 では端部内面に強いオサエと爪状擦痕が顕著に残る。63 底面には指ズレ痕（剝がし痕）がみられる。

67 ～ 69 は朝顔形埴輪である。69 は口縁部を除きほぼ全体が復元できる個体で、括れ部を除き 4 条 5 段で構成される。突帯断面は上端が尖る台形で、突帯間幅と基底部高はおおむね 9.0 ～ 10.0cm範囲に収まり、スカシ孔は 4 段目に円孔を穿っている。外面にはＢ種ヨコハケが各突帯間に複数段施される。突帯裏側にあたる内面には爪状擦痕（押圧）列が集中し、底面には置台痕が残る。肩部は大きく張り、括れ部には断面三角形の突帯がある。（山内）



第 27 図　埴輪実測図（後円部南側）（2）

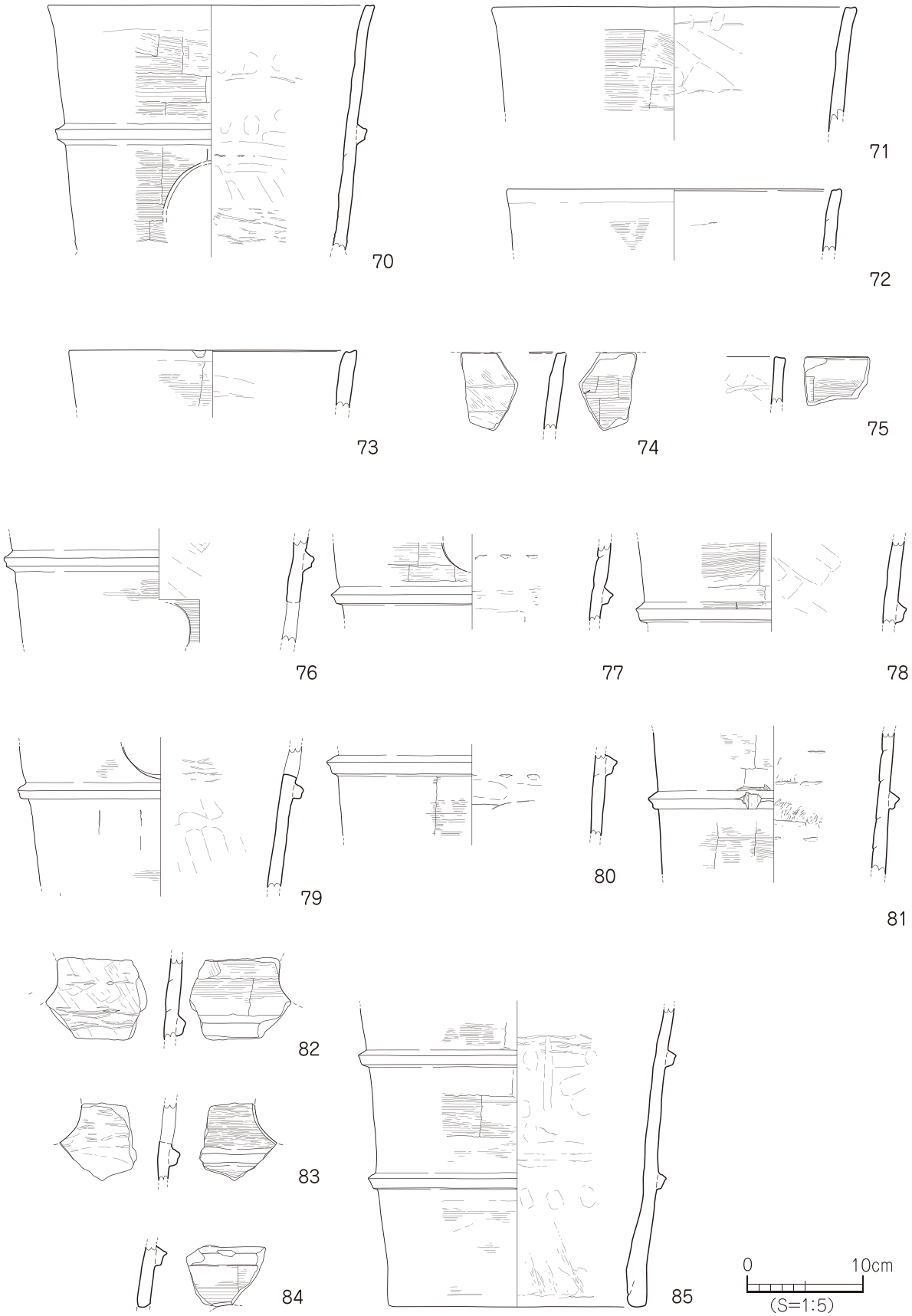


第 28 図　埴輪実測図（後円部南側）（3）

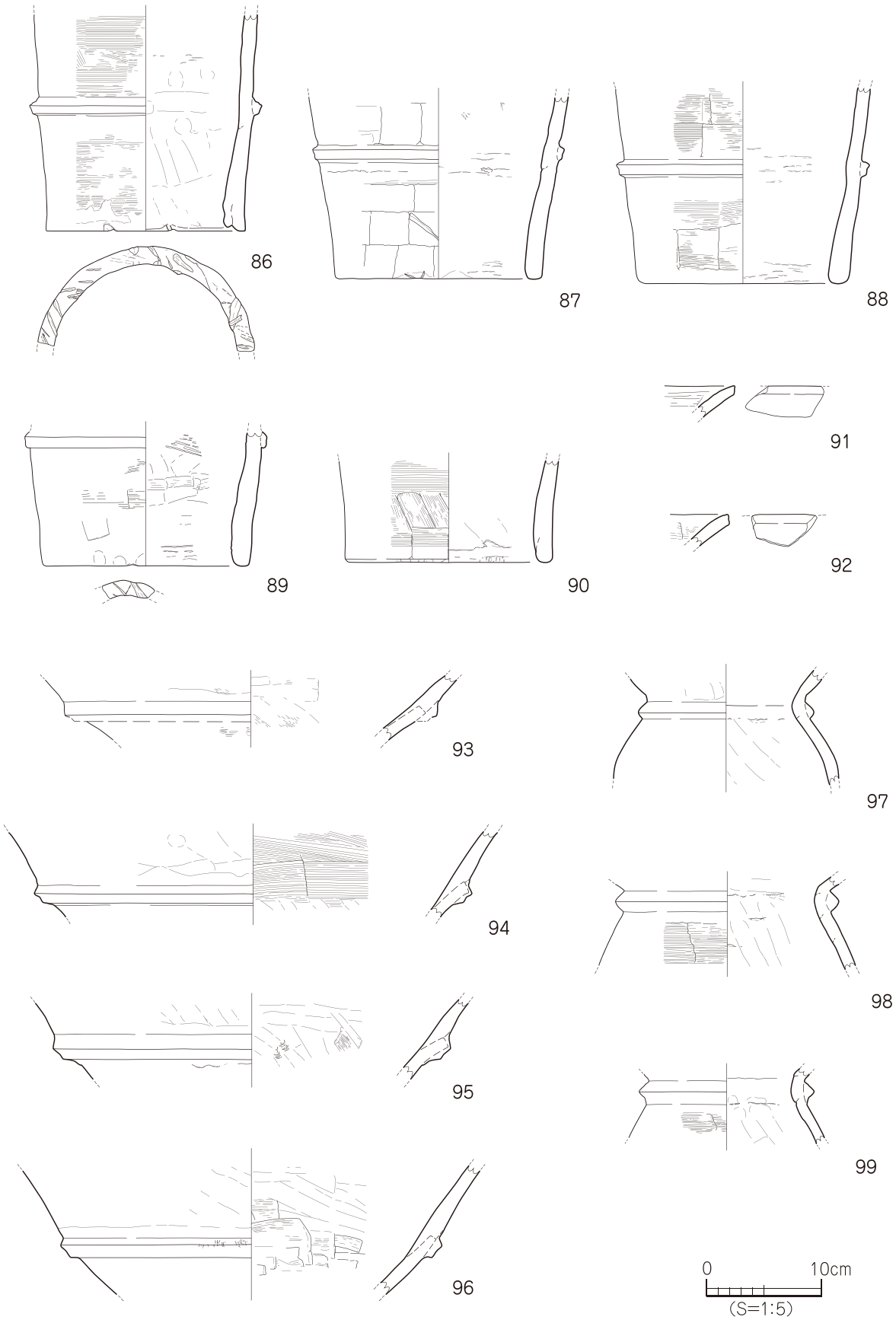
（5）後円部西側・南括れ部（B ①～ B ①'）（遺物№ 70 ～ 99）

70 ～ 90 は円筒埴輪で、赤色顔料の残る個体が多い。口縁部（70 ～ 75）は外面に B 種ヨコハケ、端部外面に幅 2.0 ～ 3.0cmの板ナデ・ヨコハケが施される。70 では口縁部長 11.0cmを測り、断面台形の突帯が貼付される。多くの個体で内面に爪状の擦痕列がみられる。胴部（76 ～ 84）には断面台形の突帯が貼付され、上端は尖り気味である。外面には B 種ヨコハケ（複数段）が施される。スカシ孔（70・76・77・79・82 ～ 84）は円形で、内面にはナデ・指オサエのほか、爪状の擦痕が列状に並ぶが、81 のように不規則な方向に爪痕が集中する個体もある。基底部（85 ～ 90）は基底部高 10.5 ～ 11.0cm、外面には複数段の B 種ヨコハケを有する。90 は一次調整のナナメハケが部分的に残る。85 は突帯間幅が基底部長とほぼ同じで、3 段目に円形のスカシ孔を穿っている。87 ～ 89 には端部内面にナデ・オサエと爪状擦痕が残り、86 をはじめ底面に置台痕が残る。

91 ～ 99 は朝顔形埴輪である。断面観察の結果、括れ部から大きく広がる 1 段目の上部に 2 段目を接合し、その境界付近にやや幅広の突帯（断面 M 字形）を貼付することで二段口縁を形成する。95 では接合部剝離面に刻目が確認でき、ほとんどの個体で上段（橙）・下段（黄褐色）の色調・粘土が異なる。括れ部には断面三角形の突帯が貼付され、98 内面には不規則な爪痕が集中する。（山内）



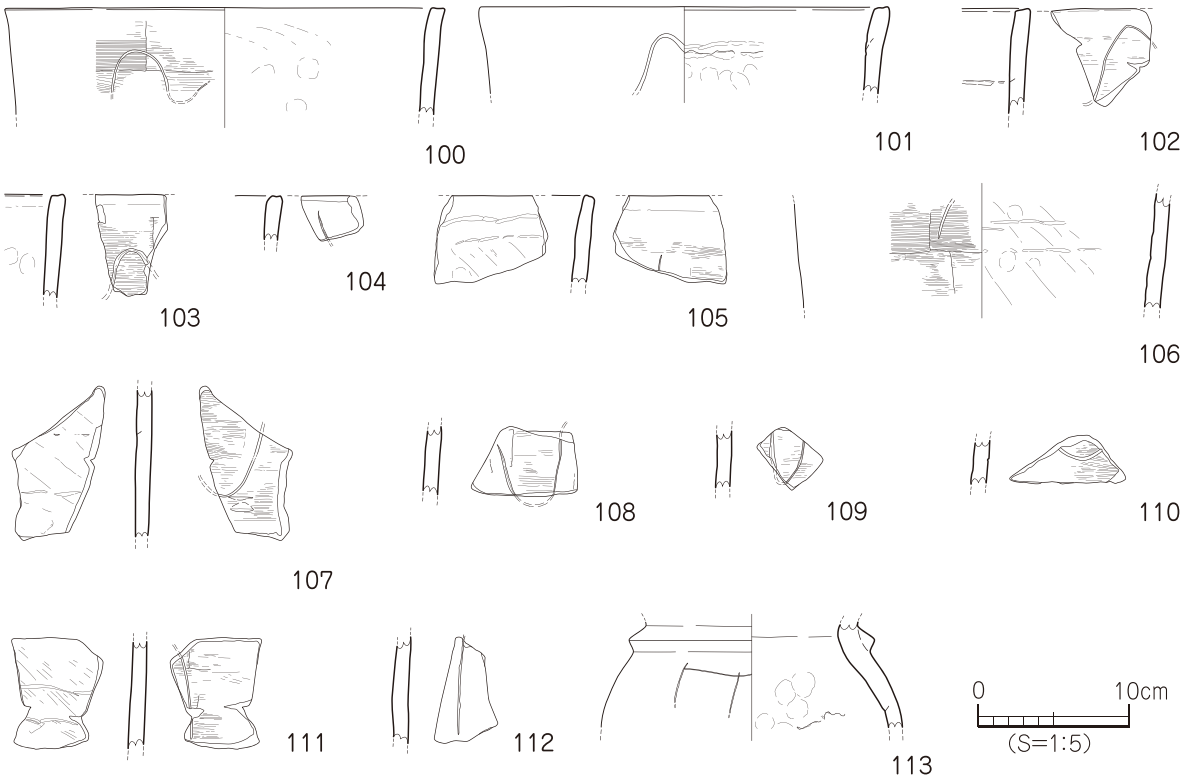
第 29 図　埴輪実測図（後円部西側・南括れ部）（1）



第 30 図　埴輪実測図（後円部西側・南括れ部）（2）

2　線刻（第 26・31 図、表 7・9、図版 7・8）（遺物№ 46・100 ～ 113）

線刻表現（ヘラ記号）は 46・100 ～ 105 では口縁部に施されており、その他の資料も同様の位置が想定できる。今回図化した線刻は、大きく屈曲する波形が最も多く、全体が不明な個体についても弧状に描かれたものが大半を占める。また、朝顔形埴輪（113）の肩部に施されたものは、下半が不明ながら「井」状の線刻を想定したい。他にも 112 のような直線や平行線が散見されるが、形象埴輪片の表現かもしれない。（山内）



第 31 図　埴輪実測図（線刻）

3　形象埴輪（第 32 ～ 35 図、表 10 ～ 13、巻頭図版 2、図版 7）

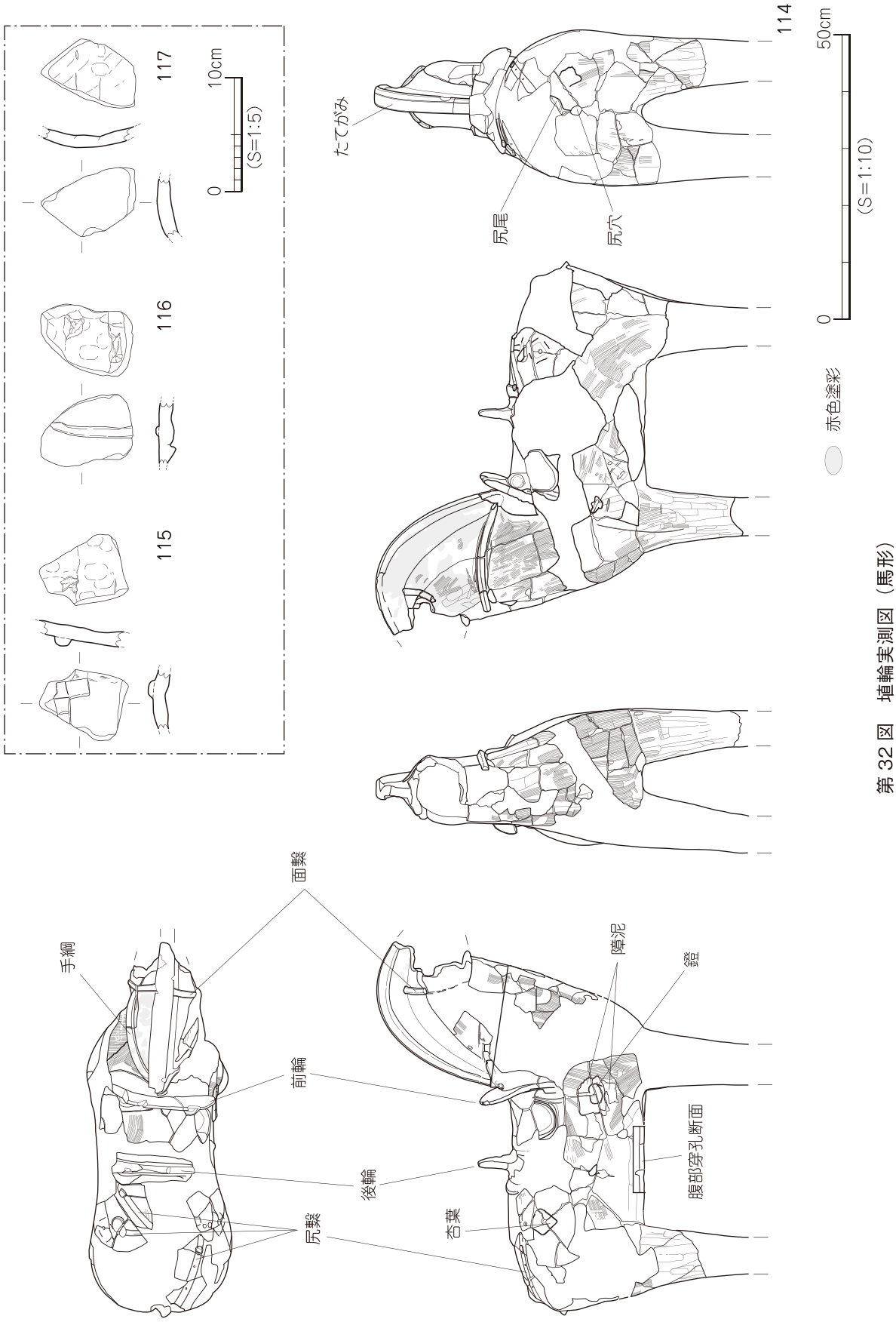
馬形埴輪（遺物№ 114 ～ 117）

114 ～ 117 は馬形埴輪である。114 は頭部を除き全体が復元できる個体で、前方部周壕南西寄りから出土した。層位は A2 トレンチ 3 層の黒褐色砂質土層で、周壕底より若干浮いており、初期埋土である 4 ～ 6 層の上位にあたる。鞍、たてがみ、脚部等の特徴的で大きな破片については、調査中に把握できていたが、鐙や尻繋、杏葉などの小破片は復元作業を行っていく過程で確認することができた。

以下、調整や成形等の特徴について記す。

調整はおおむね、首部から胴部にかけてはハケメ調整で、脚部はヘラケズリまたは指ナデである。

形状等についてみると、首は太く、躯体に対して若干右を向くが、頭部は面繋の前側に耳の付根の一部を確認できるものの、他は全て失われている。その破断面を見ると、きれいに剝離した状態が見



第 32 図　埴輪実測図（馬形）

て取れ、頭部を別に作って接合したことが解る。脚は残存の差はあるが、完全に残っているものはない。最もよく残っているのは左前脚で、右前脚は全て失われている。体部背面は、鞍部がわずかに低くなっているものの、後輪うしろ側と大きな差はなく続き、臀部は丸く収まっている。尾は付根の一部を残すのみであるが、尻穴はよく残っている。腹部はほぼ水平で、体部断面は中央付近が縦長の楕円、後ろ脚付近は円に近くなる。馬具表現について見ると、残存している面繋、手綱については粘土帯を貼付している。面繋の断面はほぼ長方形で、手綱は三角形である。鞍は、前輪と後輪とも完存してはいないが、原状を推定できる程度には残存しており、頂部の間隔は11.2cm、それぞれの高さは5.5cmを測る。その他、両側面に居木と鞍下らしきものも表現されている。鐙は右側面の鞍下と一部残存している障泥の間に線刻で表現されているが、左側面では確認できない。これは当該部分の鞍下や障泥が剝落してしまっているため、残らなかったものである。尻繋と辻金具は後輪のうしろ側に沿うように貼付された断面が扁平な粘土帯が残っているものの、他はほぼ線刻と穿孔・刺突孔で表現されている。その中でも、3か所ほど貼付の粘土塊が残っている部分がある。このことから本来は全体に粘土帯や粘土塊が貼付されていたことがわかる。ただし雲珠があったと推測できる位置又はラインは残存しておらず不明である。杏葉は剣菱形で、尻繋の両側に垂下しているが、これも線刻と穿孔で表現されている。

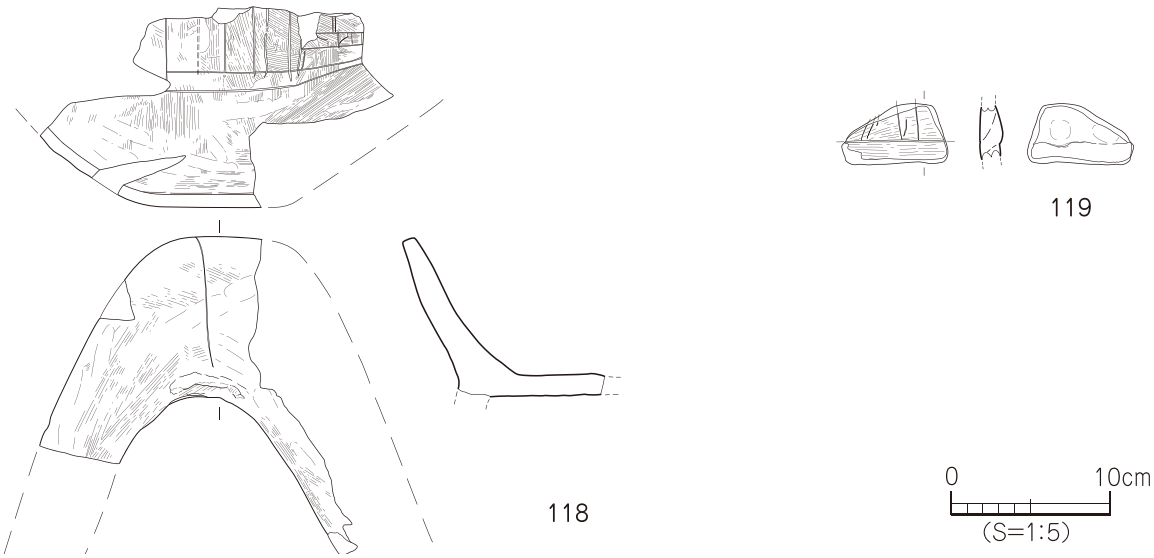
このように面繋、手綱、鞍、尻繋の一部は立体的に表現されているにもかかわらず、鐙や大部分の尻繋、杏葉が線刻のみというのは、非常にバランスを欠いていると言わざるを得ない。ましてや尻繋の一部には貼付されていたであろう粘土帯や粘土塊の一部が残っていることから、線刻、穿孔、刺突孔で表現された部分については下書きではないかと判断している。尻繋の穿孔、刺突孔は辻金具の位置を示すもので、実際に左側面の杏葉の上部には大きめの粘土塊が約1/2残っている。剝離した部分は周囲とは色調が異なっており、尻繋を表す線刻もない。これらのことから、雲珠も含めた鐙、尻繋、辻金具、杏葉は、最初に線刻、穿孔、刺突孔でそれぞれの位置を定め、尻繋部分で言うと辻金具、杏葉、雲珠を粘土塊で表現した後、それらを結ぶ粘土帯を貼付して完成させたことが推定できる。鐙も同様である。線刻、穿孔、刺突孔は、位置を決めるだけではなく、これらの粘土帯、粘土塊のズレを防ぐための細工でもあろう。これは上記の左側面杏葉と対をなす右側面の穿孔内に粘土が詰まった状態で残っていることからも推測できる。次に、内面の整形、調整等についてみると、内面は指ナデが明瞭に残り、臀部分を中心に爪圧痕を認めることができる。計測できる部分の器壁は0.8～1.2cmを測るが、胴部と脚部の接合部はもう少し厚いことが想定できる。腹部中央付近には、直径約4.5×4.8cmの穿孔がある。形を整えるためか、外面から指を入れ粘土を折り返しているため、指の幅で連続的なコブになっている。穿孔の直径が小さいため、おおむね指2～3本での細工が想定できる。

115は湾曲した器面に十字の粘土帯（一部剝離）が貼付されたもので、交差部分は刻目で区分される。革紐表現で交差部分は辻金具を表現したものであろう。116は器面に平坦で湾曲した粘土帯を貼付し、障泥の表現であろうか。117は丸みを帯びた破片で胴部片と推測できるが、馬形以外の可能性もある。

（作田・山内）

家形埴輪（遺物№118・119）

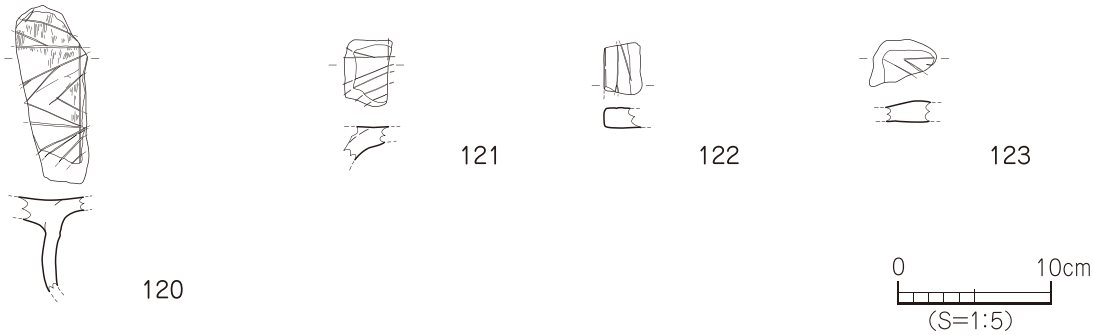
118・119は家形埴輪である。118は屋根頂部および破風で、屋根頂部は縦横の直線の線刻により装飾・区分し、直線区画内には省略化された直弧文を連続して刻む。破風は外方へ大きく開いている。119は平坦で1条の横線と直交する2条の縦線がみられる。壁体部を表現したものか。（山内）



第 33 図　埴輪実測図（家形）

盾形埴輪（遺物№ 120 ～ 123）

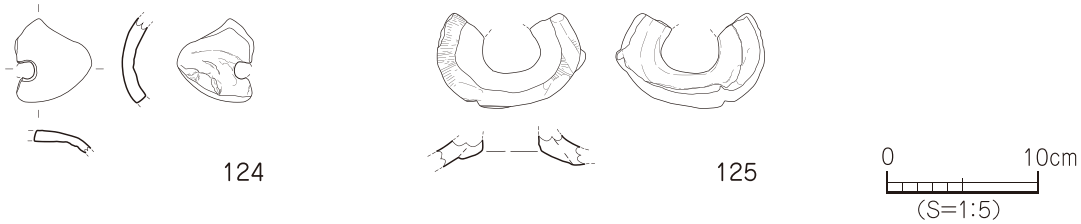
120 ～ 123 は盾形埴輪である。120 は円筒基部と鰭状盾面の一部で、やや小型品である。盾面には赤色顔料が塗布され、直線で刻まれた区画内に連続山形文が施している。121・123 にも連続山形文、122 は盾面縁に斜線文が施している。（山内）



第 34 図　埴輪実測図（盾形）

不明埴輪（遺物№ 124・125）

124・125 は特定できないものの、形象埴輪として扱う。124 には円孔がみられる。125 は下方に大きく開き、内面に粘土接合痕が顕著に残る（人物埴輪片か）。（山内）



第 35 図　埴輪実測図（不明）

（4）その他の出土遺物

環頭大刀柄頭（第 36 図、表 14、巻頭図版 2）

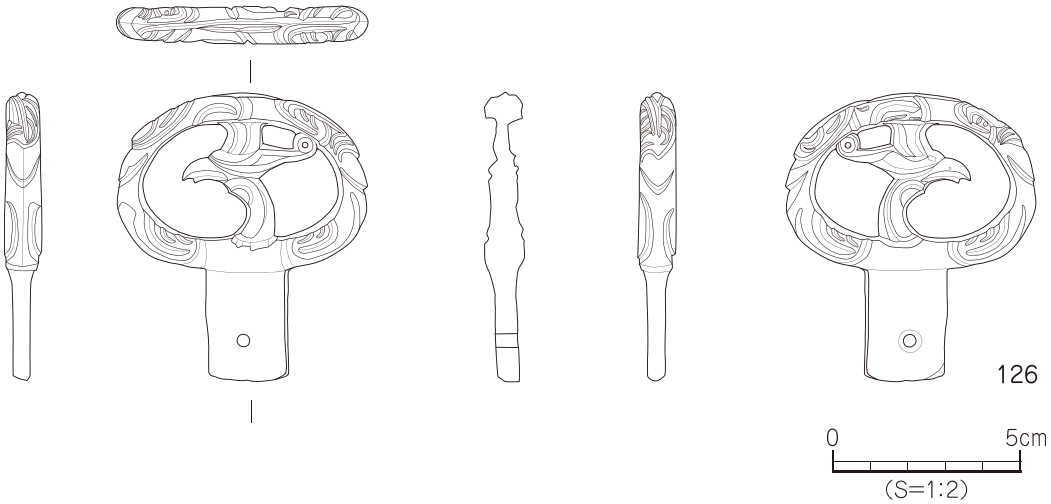
後円部北側にある土層断面Ｂ②－Ｂ②’の断面精査を行っている時に出土したものである。直上の表土上端から約 24.80cm下がった地点で、標高 54.27m、層位は 3 層からの出土である。葺石が多く落石している 7 層上端からは 30 ～ 40cm上方で、検出した堆積土の中では比較的浅い地点に当たる。

本遺物は 9 号墳の時期とは時間差があり、北側の丘陵斜面から流入したものと推定できる。

出土したのは柄頭部分のみで、刀身部分は出土していない。材質は茎を含めて銅地である。環頭は横長の楕円形で、円環部には簡略化された走龍紋が施されている。環内飾りは単鳳で、円環、茎とは一体鋳造である。現在は剝落部分もあるが、元々は円環・環内飾り全体と茎の一部に鍍金を施している。

単鳳の細工はクリーニングの難易によって左側面より右側面の方が明瞭であるが、冠羽と巻いた後羽は円環に接しており、嘴は玉をくわえていない非含玉単鳳環柄頭である。

茎は長さ 3.00cm、幅 2.05 ～ 2.20cm、厚さ 0.50 ～ 0.75cmを測り、円環から 1.90cmのところに中心径 0.35cmの目釘孔を穿っている。なお、本遺物の詳細な法量は観察表に譲る。（作田）



第 36 図　その他の出土遺物実測図（環頭大刀柄頭）

遺構一覧・遺物観察表　　－ 凡例 －

以下の表は、本調査地検出遺物の観察一覧である。

法 量 欄　　（　）：残存値　〔　〕復元値

形 態・施 文　口縁端部への立ち上がり・形状：口縁外傾、口縁外反

基底部への裾り　：基底外傾

突帯断面形状　　：突帯台形、突帯三角、突帯摩滅

円形スカシ孔　　：円孔

調 整 欄　　埴輪の各部位名称を略記した。

例）　口→口端、底→底端

胎 土 欄　　胎土欄は混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色粒

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1 ～ 4）→ 「1 ～ 4㎜大の石英・長石を含む」である。

焼 成 欄　　焼成欄の略記について

◎→ 良好、○ → 良

備　考　　Ｂ種ヨコハケ　：Ｂヨコ　爪状の擦痕列：爪擦痕　赤色顔料：赤色

表４　埴輪観察表（前方部）

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 焼成	備考
1	円	口〔27.2〕 高（6.9）	口縁外傾	口：指ナデ ヨコハケ	指オサエ ナナメナデ	浅黄橙	橙	密 ◎	Ｂヨコ
2	円	高（8.3）	口縁直線	ヨコハケ ナデ	ナデ	橙	橙	砂　赤 ◎	Ｂヨコ
3	円	高（3.6）	口縁外傾	口：指ナデ ヨコハケ（粗）	ナナメハケ ヨコナデ	橙	橙	― ◎	爪擦痕？
4	円	高（5.1）	突帯台形（中央窪み）	ヨコハケ	指オサエ ナデ	橙	橙	石・長（1） 赤　◎	爪擦痕（直線・多条）
5	円	高（6.8）	突帯台形（上端尖る）	ヨコハケ	指ナデ指 オサエ	浅黄橙	浅黄橙	石（5）赤 ◎	Ｂヨコ
6	円	高（7.7）	突帯台形（上端尖る）	ヨコハケ（複数幅）	ナナメハケ 指オサエ　ナデ	橙	橙	長（10）赤 ◎	Ｂヨコ　赤色
7	円	高（10.0）	突帯台形（中央窪み） 円孔	ヨコハケ	指オサエ	橙	橙	石・長（1～2） 赤◎	Ｂヨコ　赤色 突帯と胴部の色調異なる
8	円	高（7.0）	突帯台形（上端尖る） 円孔	ヨコハケ（複数幅）	ナナメハケ	橙	橙	砂　赤 ◎	Ｂヨコ　爪擦痕
9	円	高（16.2）	突帯台形（中央窪み） 円孔	ヨコハケ	ヨコハケ 口：指オサエ　ナデ	橙	橙	石・長（1～2） ○	Ｂヨコ　赤色 突帯と胴部の色調異なる
10	円	高（7.9）	胴部湾曲 突帯摩滅	ヨコハケ ナナメナデ	ナナメナデ 指オサエ	橙	橙	石（1） ◎	朝顔？
11	円	高（7.0）	突帯摩滅	摩滅	指オサエ	橙	橙	―　赤 ○	爪擦痕 突帯と胴部の色調異なる
12	円	高（6.3）	突帯台形（中央窪み）	ヨコハケ（粗）	ナナメハケ 指オサエ　ナデ	橙	橙	密 ◎	爪擦痕
13	円	高（3.3）	突帯三角	ヨコハケ	指オサエ	橙	橙	石（9）赤 ○	赤色 突帯と胴部の色調異なる
14	円	高（13.1） 底〔14.0〕	基底外傾 突帯台形（中央窪み）	ヨコハケ ナデ 底：指ナデ	ナナメナデ	橙	橙	石・長（1） 赤　○	爪擦痕　突帯と胴部の色調異なる
15	円	高（7.6） 底〔20.4〕	基底外傾	ヨコハケ ナデ 底：指ナデ	ナデ	橙	橙	― ○	
16	円	高（7.2） 底〔16.6〕	基底外傾	ヨコハケ	指オサエ　ナデ	橙	橙	― ○	Ｂヨコ　爪擦痕 置台痕
17	朝	高（3.5）	口縁尖り気味	口：指ナデ ヨコナデ	指ナデ	橙	橙	砂　赤 ◎	
18	朝	高（6.2）	肩張り 括れ突帯三角	ハケ？ ヨコナデ	指オサエ ナナメナデ	橙	橙	石・長（1～2） 赤○	

表５　埴輪観察表（北括れ部）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 焼成	備考
19	円	口〔25.2〕 高（8.4）	口縁外傾	口：指ナデ ヨコハケ	ハケ　指オサエ ナナメナデ	橙	橙	砂　赤 ◎	爪擦痕
20	円	口〔23.0〕 高（4.5）	口縁外傾	口:指ナデ(2段) ヨコハケ	指オサエ　ナデ	橙	橙	砂　赤 ◎	
21	円	高（8.9）	突帯三角 円孔	ヨコハケ	指オサエ ナナメナデ	橙	橙	石・長(1~3) 赤◎	Ｂヨコ
22	円	高（8.3）	突帯三角	ヨコハケ	指オサエ　ナデ	橙	橙	石　赤 ○	爪擦痕（直線・多条）
23	円	高（5.6）	突帯台形（端部尖る）	ヨコハケ ナデ	指オサエ	淡橙	淡橙	一　赤　密 ◎	赤色
24	円	高（5.0）	突帯摩滅	摩滅	摩滅	橙	橙	砂 ◎	爪擦痕 突帯と胴部の色調異なる
25	円	高（8.6）	基底外傾 底面に指ズレ痕あり	ヨコハケ　（板） ナデ	指オサエ　ナデ	浅黄橙	浅黄橙	砂　赤 ◎	置台痕

表６　埴輪観察表（後円部北側）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 焼成	備考
26	円	口〔26.2〕 高（6.7）	口縁外傾	口：指ナデ ヨコハケ	ナナメナデ	橙	橙	砂　赤　金 ◎	Ｂヨコ　赤色 爪擦痕
27	円	口〔25.0〕 高（7.3）	口縁外傾	口：指ナデ ヨコハケ	指オサエ　ナデ （ヨコ・ナナメ）	淡橙	淡橙	砂 ◎	Ｂヨコ　赤色 爪擦痕
28	円	口〔23.0〕 高（7.5）	口縁外傾	口:指ナデ(2段) ヨコハケ	指オサエ ナナメナデ	黄橙	黄橙	砂　赤 ◎	
29	円	高（13.4）	突帯台形（中央窪み）	ヨコハケ(複数段)	指オサエ　ナデ	橙	橙	石・長（1） 赤　◎	Ｂヨコ 爪擦痕（直線・多条）
30	円	高（10.9）	突帯台形（中央窪み）	ヨコハケ	指オサエ	黄橙	黄橙	石・長（1） ◎	設定用紐圧痕？（外面）
31	円	高（10.2）	突帯台形（中央窪み）	ヨコハケ（粗）	ナナメハケ 指オサエ　ナデ	橙	橙	一　密 ◎	Ｂヨコ 爪擦痕？
32	円	高（6.3）	突帯台形 円孔？	ヨコハケ	ナデ	橙	橙	砂 ◎	Ｂヨコ　爪擦痕
33	円	高（5.5）	突帯台形（上端尖る）	ヨコハケ（粗）	ナナメハケ	橙	橙	砂　赤 ◎	突帯に２条の刻み痕
34	円	高（6.5）	突帯三角	ヨコハケ	指オサエ　ナデ	橙	橙	砂　赤 ◎	Ｂヨコ　爪擦痕
35	円	高（7.7）	突帯台形（中央窪み） 円孔	ヨコハケ	ナデ	淡橙	淡橙	砂　赤 ○	Ｂヨコ　爪擦痕
36	円	高（13.7）	突帯台形（中央窪み） 円孔	ヨコハケ(複数段)	指オサエ　ナデ	橙	橙	砂　赤 ◎	Ｂヨコ　爪擦痕
37	円	高（10.4）	突帯台形（中央窪み） 円孔	ヨコハケ	指オサエ　ナデ	橙	橙	砂　赤 ◎	Ｂヨコ　爪擦痕
38	円	高（8.7）	突帯三角形 円孔	ヨコハケ	ナナメナデ 指オサエ	橙	橙	砂　赤 ○	
39	円	高（5.8）	突帯台形 円孔	摩滅	ナナメナデ	橙	橙	一　金・赤 ◎	突帯ヨコハケ
40	円	高（8.8） 底〔20.0〕	基底外傾	ナナメナデ	指ナデ　オサエ 底：指オサエ	橙	橙	石・長(1~2) 赤◎	爪擦痕（強め） 置台痕
41	円	高（16.0） 底〔18.0〕	基底外傾　突帯台形	ヨコハケ　ナデ 底：指オサエ	ナナメナデ 指オサエ	橙	橙	砂　赤 ○	Ｂヨコ　赤色 帯と胴部の色調異なる
42	円	高（11.4） 底〔17.0〕	基底外傾 突帯台形（摩滅）	ヨコハケ(複数段) 底：指ナデ	指ナデ　オサエ 底：指オサエ	黄橙	黄橙	石・長(1~3) ○	Ｂヨコ　爪擦痕（強め） 置台痕
43	朝	高（15.5）	肩張り大きい 突帯台形	ヨコハケ	指ナデ（ナナメ） 指オサエ	浅黄橙	浅黄橙	石・長(1~4) 赤○	突帯ヨコハケ
44	朝	高（7.3）	肩張り少ない 括れ突帯三角	ナデ	指オサエ　ナデ	浅黄橙	浅黄橙	砂　赤 ○	
45	朝	高（6.7）	やや肩張り 括れ突帯三角	ナデ	指オサエ　ナデ （粘土接合痕）	浅黄橙	浅黄橙	砂　赤 ○	

表７　埴輪観察表（後円部南側）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 焼成	備考
46	円	口 27.9 高 45.1 底 18.9	外傾（3条4段構成） 突帯台形（上端尖る） 3段目円孔（対面2孔）波形線刻（口縁）	口：指ナデ ヨコハケ（複数段）	口：板ナデ ナデ　オサエ 底：指オサエ	淡橙	淡橙	砂 ◎	Bヨコ　赤色 爪擦痕（複数段） 置台痕
47	円	口〔28.5〕 高（10.1）	口縁外傾（端部屈曲）	口：指ナデ ヨコハケ（複数段）	指オサエ ナナメナデ	橙	橙	石・長（1~3） ○	Bヨコ　赤色
48	円	口〔27.2〕 高（10.7）	口縁外傾	口：指ナデ ヨコハケ（複数段）	指オサエ ナナメナデ	橙	橙	砂 ◎	Bヨコ　赤色　爪擦痕
49	円	口〔26.6〕 高（7.8）	口縁外傾	口：指ナデ ヨコハケ（複数段）	指オサエ ナデ	橙	黄橙	―　密 ○	Bヨコ　赤色（内外面） 爪擦痕（複数段）
50	円	口〔23.4〕 高（5.8）	口縁外傾	口：指ナデ ヨコハケ	口：ヨコナデ 指オサエ　ナデ	橙	橙	砂　金 ◎	Bヨコ
51	円	口〔24.2〕 高（6.9）	口縁外傾	口：指ナデ ヨコハケ（複数段）	口：ヨコナデ ナナメナデ	橙	橙	砂 ◎	Bヨコ　赤色（内外面）
52	円	口〔24.2〕 高（12.5）	口縁外反　突帯台形（上端尖る）	口：指ナデ ヨコハケ（複数段）	口：ヨコナデ 指オサエ　ナデ	橙	橙	砂 ◎	赤色　爪擦痕
53	円	口〔23.0〕 高（21.0）	突帯台形（上端尖る） 円孔	口：ナデ ヨコハケ（複数段）	ナナメナデ（板） ※強め 指ナデ・オサエ	黄橙	黄橙	砂 ◎	Bヨコ　赤色　爪擦痕
54	円	口〔22.4〕 高（5.2）	口縁外傾	口：指ナデ ヨコハケ	ナナメナデ（板） ※強め	浅黄橙	浅黄橙	石（1） ◎	Bヨコ　赤色
55	円	高（7.5）	突帯台形（上端尖る） 円孔	ヨコハケ	指ナデ	橙	橙	― ◎	Bヨコ　赤色
56	円	高（14.5）	突帯台形（上端尖る） 円孔	ヨコハケ（複数段）	指オサエ ナナメナデ	浅黄橙	浅黄橙	石（1） ◎	Bヨコ　赤色（黒色斑点） 爪擦痕（複数段）
57	円	高（8.6）	突帯台形	ヨコハケ	指オサエ ナナメハケ	浅黄橙	浅黄橙	砂　赤 ○	Bヨコ　爪擦痕
58	円	高（13.5）	突帯台形（端部尖る） 円孔	ヨコハケ（複数段）	ナナメナデ（板） ※強め ナナメハケ	橙	橙	砂 ◎	Bヨコ　爪擦痕
59	円	高（10.1）	突帯台形（上端尖る）	ヨコハケ	指オサエ	黄橙	黄橙	砂　赤 ◎	Bヨコ　爪擦痕
60	円	高（18.0） 底〔21.4〕	基底外傾 突帯台形（中央窪む）	ヨコハケ（複数段） 底：指ナデ	指オサエ　ナデ 底：指オサエ	浅黄橙	浅黄橙	石・長（1~4） ◎	Bヨコ　爪擦痕 置台痕
61	円	高（12.5） 底〔22.0〕	基底外傾 突帯台形	ヨコハケ　ナデ 底：指ナデ	指オサエ ナデ	橙	橙	石・長（1~4） ◎	Bヨコ
62	円	高（22.3） 底〔17.6〕	基底上方 突帯台形（上端尖る）	ヨコハケ（複数段） 底：ナデ	指オサエ　ナデ	橙	橙	石・長（1~5） ◎	Bヨコ 爪擦痕（複数段）
63	円	高（12.4） 底〔17.4〕	基底外傾（底端外反） 突帯三角	ヨコハケ（複数段） 底：ナデ	ナデ 底：指オサエ	浅黄橙	浅黄橙	砂　赤 ○	
64	円	高（15.3） 底〔17.4〕	基底外傾 突帯台形（上端尖る）	ヨコハケ（複数段） 底：指ナデ	指オサエ　ナデ 底：指オサエ	橙	橙	石・長（1~3） 赤○	爪擦痕
65	円	高（12.9） 底〔15.8〕	基底外傾 突帯台形（上端尖る）	ヨコハケ（複数段）	指オサエ　ナデ 底:オサエ（強い）	橙	橙	砂 ◎	爪擦痕（複数段） 置台痕
66	円	高（9.0） 底〔17.6〕	基底外傾 底面に指ズレ痕	ヨコハケ（複数段）	指オサエ　ナデ 底：オサエ	橙	橙	石・長（1~3） ○	爪擦痕（複数段） 置台痕
67	朝	高（11.0）	肩張り大きい 突帯台形（上端尖る）	ヨコハケ（複数段）	ナナメハケ 指オサエ ナデ（粘土接合痕）	浅黄橙	浅黄橙	―　密 ◎	Bヨコ　赤色
68	朝	高（19.0）	肩張り少ない 括れ突帯三角	ヨコハケ	指オサエ　ナデ	浅黄橙	浅黄橙	―　密 ◎	赤色
69	朝	高（48.0） 底 14.9	直線的（4条5段） 胴部突帯台形（上端尖る）括れ三角 4段目円孔（2孔）	ヨコハケ（複数段） ナナメナデ	ナデ　オサエ 底：ナデ　オサエ	淡橙	淡橙	砂 ◎	Bヨコ　赤色 爪擦痕（複数段） 置台痕

表８　埴輪観察表（後円部西側・南括れ部）　（1）

報告	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 焼成	備考
70	円	口〔28.0〕 高　21.0	口縁外傾 突帯台形（上端尖る）	口：指ナデ ヨコハケ（複数段）	指オサエ　ナデ	淡橙	橙	石・長（1～2） ◎	Ｂヨコ　赤色 爪擦痕（複数段）
71	円	口〔31.2〕 高（10.7）	口縁外傾	口：指ナデ ヨコハケ（複数段）	指オサエ ナナメナデ	橙	橙	石・長（1～3） 金◎	Ｂヨコ（黒色斑点） 爪擦痕（複数段）
72	円	口〔29.0〕 高（5.4）	口縁外傾	口：指ナデ ヨコハケ（複数段）	指オサエ　ナデ	浅黄橙	浅黄橙	一　密 ◎	Ｂヨコ　赤色
73	円	口〔24.8〕 高（4.9）	口縁外傾	口：指ナデ ヨコハケ	板ナデ（ハケ）	橙	橙	砂 ◎	Ｂヨコ
74	円	高（6.0）	口縁外傾	口：指ナデ ヨコハケ（複数段）	ナナメナデ	橙	橙	砂 ◎	Ｂヨコ　赤色（内外面） 爪擦痕（複数段）
75	円	高（4.1）	口縁外傾	口：指ナデ ヨコハケ	ナデ	橙	橙	金　密 ◎	Ｂヨコ　爪擦痕
76	円	高（9.1）	突帯台形（上端尖る） 円孔	ヨコハケ	ナデ	橙	橙	一　密 ◎	
77	円	高（6.7）	突帯台形（上端尖る） 円孔	ヨコハケ（複数段）	ナデ	橙	橙	砂 ◎	Ｂヨコ　爪擦痕
78	円	高（7.1）	突帯台形（上端尖る）	ヨコハケ（複数段）	ナナメナデ	橙	橙	金　密 ◎	Ｂヨコ　突帯と胴部の色調異なる
79	円	高（12.1）	突帯台形　円孔	ヨコハケ	ナナメナデ（板）	橙	橙	石・長（1～2） 赤◎	爪擦痕
80	円	高（7.0）	突帯台形（上端尖る）	ヨコハケ	指オサエ ナデ	橙	橙	石・長（1） ○	Ｂヨコ　赤色　爪擦痕
81	円	高（12.1）	突帯台形（上端尖る）	ヨコハケ（複数段）	タテ ナナメナデ	淡橙	淡橙	砂　赤 ◎	Ｂヨコ　爪擦痕
82	円	高（7.0）	突帯台形　円孔	ヨコハケ（複数段）	ナナメナデ	橙	橙	砂 ◎	Ｂヨコ 爪擦痕（複数段） 突帯と胴部の色調異なる
83	円	高（7.7）	突帯台形（中央窪む） 円孔	ヨコハケ	ナデ	橙	橙	一　密 ◎	爪擦痕（複数段・黒色斑点）
84	円	高（5.3）	突帯台形（上端尖る）	ヨコハケ	ナナメナデ	橙	橙	砂 ◎	Ｂヨコ　爪擦痕
85	円	高（25.7） 底〔21.2〕	基底外傾　突帯台形（上端尖る）２段目に円孔	ヨコハケ（複数段） 底：指ナデ	ナナメ・タテナデ 底：指オサエ	橙	橙	砂　赤 ◎	Ｂヨコ　爪擦痕
86	円	高（18.7） 底〔17.2〕	基底外傾 突帯台形（上端尖る）	ヨコハケ（複数段） 底：指ナデ	ナナメナデ（板） ※強め 底：オサエ	橙	橙	砂　赤 ◎	Ｂヨコ　爪擦痕 置台痕
87	円	高（15.7） 底〔19.4〕	基底外傾 突帯台形	ヨコハケ（複数段） 底：ナデ	オサエ　ナデ 底：ナデ	橙	橙	石・長（1～5） 赤◎	Ｂヨコ　爪擦痕 置台痕
88	円	高（17.0） 底〔17.2〕	基底外傾 突帯台形（端部尖る）	ヨコハケ（複数段） 底：ナデ	オサエ　ナデ 底：ナデ	橙	橙	石（1～5） 赤　○	Ｂヨコ　爪擦痕 置台痕
89	円	高（11.5） 底〔19.6〕	基底外傾 突帯台形（摩滅）	ヨコハケ（複数段） 底：指オサエ	指オサエ　ナデ 底:オサエ（強い）	橙	橙	石・長（1） ◎	Ｂヨコ 爪擦痕（複数段） 置台痕
90	円	高（8.8） 底〔17.2〕	基底外傾	ナナメ→ヨコハケ 底：指ナデ	指オサエ　ナデ 底：ナデ	橙	橙	一　密 ◎	Ｂヨコ　爪擦痕 置台痕
91	朝	高（2.7）	口縁端尖り	口：指ナデ ヨコナデ	ヨコハケ	橙	橙	砂 ○	
92	朝	高（2.7）	口縁端尖り	口：指ナデ ヨコナデ	ヨコハケ	橙	橙	砂 ○	
93	朝	高（5.6）	口縁外開き 突帯台形	ナナメハケ	ナナメハケ 指ナデ　オサエ	橙	橙	石・長（1～2） 赤◎	段接合部擬口縁 上段と下段の色調異なる

埴輪観察表（後円部西側・南括れ部）　(2)

報告	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 焼成	備考
94	朝	高 (7.3)	口縁外開き 突帯台形	ナナメハケ 指オサエ	ヨコハケ（断続） ナナメナデ	橙	橙	砂 ◎	段接合部擬口縁 （突帯貼付面に刻目） 上段と下段の色調異なる
95	朝	高 (6.9)	口縁外開き 突帯台形	ナナメナデ 指オサエ	ナナメナデ （部分的にハケ？）	橙	橙	砂 ◎	段接合部擬口縁 （突帯貼付面に刻目） 上段と下段の色調異なる
96	朝	高 (11.1)	口縁外開き 突帯台形	ナナメナデ 指オサエ	ナナメナデ 板ナデ（ハケ？）	橙	橙	一　密 ◎	段接合部擬口縁 内外面爪痕 上段と下段の色調異なる
97	朝	高 (9.9)	肩張り大きい 括れ突帯三角	ヨコハケ　ナデ	ナナメナデ 指オサエ	浅黄橙	浅黄橙	砂　赤 ○	赤色 内外面爪痕
98	朝	高 (8.0)	肩張り少ない 括れ突帯三角	ヨコハケ　ナデ	指ナデ（ナナメ） 指オサエ	浅黄橙	浅黄橙	一　密 ◎	接合痕明瞭 Ｂヨコハケ　赤色
99	朝	高 (6.5)	肩張り少ない 括れ突帯三角	ヨコハケ　ナデ	指ナデ（ナナメ） 指オサエ	橙	橙	砂 ◎	接合痕明瞭

表９　埴輪観察表（線刻）

報告	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 焼成	備考
100	円	口〔29.2〕 高 (7.0)	口縁外傾 外面に波形線刻	口：指ナデ ヨコハケ	ナナメナデ 指オサエ	橙	橙	砂　赤 ◎	Ｂヨコ
101	円	口〔27.0〕 高 (5.6)	口縁外傾 外面に波形線刻	口：指ナデ ヨコハケ	ナデ　指オサエ	橙	黄橙	砂 ◎	爪擦痕
102	円	高 (6.9)	口縁外傾 外波形線刻	口：指ナデ ヨコハケ	ナデ	橙	橙	砂　赤 ○	赤色
103	円	高 (6.7)	口縁外傾 外面に波形線刻	口：指ナデ ヨコハケ	ナデ　指オサエ	淡橙	淡橙	一　密 ◎	Ｂヨコ　赤色
104	円	高 (2.9)	口縁外傾 外面に弧状線刻	摩滅	摩滅	橙	橙	砂　赤 ○	
105	円	高 (5.1)	口縁外傾 外面に弧状線刻	口：指ナデ ヨコハケ	ナデ(ヨコ･ナナメ) 指オサエ	橙	橙	砂　赤 ◎	Ｂヨコ　赤色 爪擦痕（複数段）
106	円	高 (7.5)	外面に弧状線刻	ヨコハケ(複数段)	ナナメナデ 指オサエ	黄橙	黄橙	長（1～3） ◎	Ｂヨコ　赤色 爪擦痕（複数段）
107	円	高 (8.6)	外面に弧状（波？） 線刻	ヨコハケ(複数段)	ナナメナデ	橙	橙	一　密 ◎	Ｂヨコ 爪擦痕
108	円	高 (4.5)	外面に弧状（波？） 線刻	ヨコハケ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	砂　赤 ○	Ｂヨコ
109	円	高 (3.8)	外面に弧状（波？） 線刻	ヨコハケ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	一　密 ◎	Ｂヨコ？　赤色
110	円	高 (2.8)	外面に弧状線刻	ヨコハケ	ハケ　ナデ	橙	橙	砂 ◎	
111	円	高 (7.1)	外面に弧状線刻	ヨコハケ(複数段)	ナナメナデ	橙	橙	砂 ◎	Ｂヨコ　赤色 爪擦痕（複数段）
112	円	高 (7.0)	外面に弧状線刻	ヨコハケ	ナナメナデ	黄橙	黄橙	砂　赤 ○	
113	朝	高 (6.9)	肩張り大きい 括れ突帯三角 外面に四角（井？） 線刻	ヨコハケ 指ナデ	ナデ　指オサエ	橙	橙	石･長(1~3) ◎	赤色

表 10　埴輪観察表（馬形）

報告	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 焼成	備考
114	馬	長（65.5） 高（64.5） 幅　23.8	詳細は本文に記す	ハケ　ケズリ ナデ	指ナデ　オサエ	橙	橙	砂 ◎	頭部を除く全体復元 首部分に赤色塗彩残存
115	馬	長　(7.8) 幅　6.2	器面は湾曲 十字形粘土帯 （一部剝離）	ナデ	ナデ　指オサエ	橙	橙	赤　密 ◎	馬の革紐 （交差部は辻金具を？）
116	馬	長　(8.1) 幅　6.3	器面に湾曲粘土帯	摩滅	ナデ　指オサエ	黄橙	黄橙	砂　赤 ◎	障泥？
117	馬	長　(8.3) 幅　6.1	器面は大きく湾曲 十字形粘土帯 （一部剝離）	摩滅	ナデ　指オサエ	浅黄橙	浅黄橙	赤　密 ○	馬の胴部片？ （人物等の可能性あり）

表 11　埴輪観察表（家形）

報告	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 焼成	備考
118	家	高（18.9） 幅（21.1）	破風外傾 屋根線刻列で加飾 省略直弧文（一部）	ハケ　指ナデ	ナデ	橙	橙	砂　赤 ◎	赤色
119	家	長　(3.8) 幅　(6.7)	器面は平坦で粘土紐 積み上げ 横線刻・縦線刻 （2 条単位）	ヨコハケ	指オサエ	橙	橙	砂　赤 ◎	家の壁表現？ （柱・窓？）

表 12　埴輪観察表（盾形）

報告	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 焼成	備考
120	盾	長（11.5） 幅　(4.8)	円筒に鰭部貼付 器面に山形文を線刻 横方向線刻で装飾部 を区画	ハケ　ナデ	指ナデ　オサエ	浅黄橙	浅黄橙	―　密 ◎	小型の盾（器壁が薄め） 赤色
121	盾	長　(4.4) 幅　(3.1)	円筒に鰭部貼付 器面に線刻 （連続山形文？） 横方向の線刻で装飾 部を区画	摩滅	指ナデ　オサエ	浅黄橙	浅黄橙	砂　赤 ○	円筒と鰭部の接合付近 赤色
122	盾	長　(3.4) 幅　(2.4)	鰭端部に斜線刻	ナデ	ナデ	灰白	灰白	砂　軟質	盾面の縁部付近 赤色
123	盾	長　(3.0) 幅　(4.5)	器面に山形文線刻？	摩滅	ナデ	淡橙	淡橙	砂 ○	盾面部

表 13　埴輪観察表（不明）

報告	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 焼成	備考
124	不明	長　(5.6) 幅　(5.1)	椀状の器面に円孔 下部に工具切断痕跡	指ナデ	オサエ　シボリ	橙	橙	砂 ◎	人物または馬？
125	不明	長　(8.8)	下方大きく開く 内面に上下の接合痕	ハケ　指ナデ	オサエ	橙	橙	砂　赤 ◎	人物の肩～頸部？

表 14　その他の出土遺物観察表（環頭大刀柄頭）

番号	器種	残存	材料	全長（cm）	法量 / 環部 長径（cm）	法量 / 環部 単径（cm）	法量 / 環部 厚さ（cm）	法量 / 茎部 幅（cm）	法量 / 茎部 長さ（cm）	法量 / 茎部 厚さ（cm）	法量 / 茎部 重さ（g）	備考
126	単鳳環頭大刀柄頭	完存	銅	7.61	6.53	4.69	0.84 ～ 0.95	2.16	2.92	0.48	98.89	鍍金

第３章　まとめ

第１節　祝谷古墳群について

まずは第１章第３節（2）歴史的環境で記した、祝谷古墳群について触れたい。

既述のとおり、祝谷１～５号墳と６～11号墳はそれぞれ別の丘陵に立地し、丸山川によって右岸、左岸に隔てられている。さらに両者は500m以上離れていることから、何らかの整理が必要であろう。

これに加えるならば、上記の中間に位置するのが祝谷アイリ遺跡であるが、この範囲内では古墳は確認されていない。しかし、今後発見される可能性は否定できない。

これらを勘案すると、すでに名称が付された１～11号墳の名称変更をするよりも、各支群に分けることで混乱を回避するために、以下のとおり提案したい。

◦六丁場支群　：丸山川右岸　包蔵地地図『№.51　祝谷六丁場遺跡』の範囲　祝谷１～５号墳
◦アイリ支群　：丸山川左岸　包蔵地地図『№.49　祝谷アイリ遺跡』の範囲　未確認
◦大地ヶ田支群：丸山川左岸　包蔵地地図『№.55　祝谷大地ヶ田遺跡』の範囲　祝谷６～11号墳

（作田）

第２節　松山市内の前方後円墳について

次に松山平野、北条平野における前方後円墳を中心に簡単に記したい。この中には規模や時期等について不明確なものも含まれるが、先学の成果を引用する形で記していきたい。

記述の流れによっては、円墳、方墳など、他の墳形を持つ古墳についても触れるが、直径もしくは一辺が約20m以上の中型から大型古墳に限って記していく。

前方後円墳を構成する要素は規模、墳形、時期等多くあるが、このうち特に中期古墳では墳丘規模が分るものは多いが、主体部や副葬品が残存しているものは少ない。このため比較対照する資料としては、墳丘規模を中心に見ていくこととしたい。

なお、文章中に旧国名、郡名を便宜的に使用しているが、これは７世紀後半に開始された律令制による名称を意識したものである。

このことは、中央政権が公地公民制の理念を取り入れるにあたり、すでにある地方の政治的、軍事的、文化的まとまりを意識した、又はせざるを得なかったとするもので、古墳時代の松山平野においてもそれが存在したことが容易に推測できる。その意味において各古墳の築造エリアを分かりやすくするために、あえて古代に使用される国名や郡名の範囲にあてはめたもので、本書で扱っている古墳時代の実像を反映したものではないことをあらかじめお断りしておく。

さらに、松山市内の前方後円墳を見ていく上で、概ね墳長30m前後もしくはそれ以下の古墳を「小型前方後円墳」、45m前後のものを「中型前方後円墳」、60m前後もしくはそれ以上のものを「大型前方後円墳」として記していく。

１）前期の前方後円墳

風早郡エリアの古墳としては国津比古命神社古墳、櫛玉比売命神社古墳が挙げられ、両古墳とも所

在は後の風早郡五郷の内の高田郷にあたり、5世紀を相前後する時期の古墳とされるが、正式な調査はなされていない。

国津比古命神社古墳は、全長が約50mあるということ以外は詳細不明である。

櫛玉比売命神社古墳は、概略の全長75.0m、後円部径42.0m、高さ7.5m、前方部長39.0m、高さ6.1mを測り、主体部は竪穴式石室で、4世紀末頃の古墳ではないかと推測されている。（森　1982）

温泉郡エリアは、概ね現在の松山市北吉田～衣山～清水～桜谷～湯の山を結ぶラインと南吉田～土居田～立花～東野を結ぶラインの間を指す。水系で見ると宮前川並びに石手川中流域に該当する。

朝日谷2号墳は前期初頭（3世紀後半）の前方後円墳で、愛媛県内でも最も古い古墳の一つである。規模は全長25.5m、後円部径16.4～17.6m、前方部の長さ10.0m、前方部幅17.2m、後円部の高さ3.3mを測る。主体部は二つあり、木棺直葬である。副葬品は土師器の他、青銅鏡2面（二禽二獣鏡、斜縁二神二獣鏡）、武具、工具、玉類等が出土している。（梅木　1998）

伊予郡エリアは、現在の伊予市、松前町に該当する。

吹上の森1号墳は伊曽能神社南側にある標高約60mの低位丘陵に立地する。全長約40mで、前方部は狭長な形状をし、墳裾部には葺石や埴輪片も見られるが、主体部の構造や副葬品は不明である。

吹上の森2号墳は全長約60mの前方後円墳で、主体部は粘土槨で、4世紀後半の築造といわれている。遺物は鏡鑑、筒形銅器、碧玉製紡錘車等が出土している。

嶺昌寺境内の古墳からは三角縁神獣鏡片が多数収集され、2～3面分あるのではないかとされている。このうちの1面が椿井大塚山古墳出土のものと同范であることから、報文では畿内との強い関係性を指摘している。同時に、墳形や規模が不明ながら、副葬品で三角縁神獣鏡を複数出土した大分県宇佐市の赤塚古墳や今治市の国分前方後円墳との類似性をもとに、両古墳と同規模の前方後円墳（全長40.0m前後）ではないかと推察している。（森1982）

松山平野を概観すると、現在の伊予市、松前町は律令制のもとの「伊余国」にあたり、その他は「久味国造」の支配する地域になる。つまり和気郡、温泉郡、久米郡、浮穴郡が該当する。

このうち、伊予国造支配地域である伊予郡エリアでは上記のとおり、概ね4世紀中葉から後半の古墳が2～3基確認されているが、北部の久味国造支配地域である和気郡、温泉郡、久米郡、浮穴郡エリアでは朝日谷2号墳のみである。

朝日谷2号墳は3世紀後半の古墳で、現時点で中期古墳に直接繋がる古墳とは言えない。さらに当エリアにおける4世紀代から5世紀前半は円墳や方墳が主体で、前方後円墳は見つかっていない。

【各エリアの前期古墳】

風早郡エリア

森　光晴　1982　国津比古神社古墳　（前方後円墳　全長約50m　4C代）
　　櫛玉比売命神社古墳（前方後円墳　全長約75m　4C末）　『愛媛県史　原始・古代Ⅰ　p.553』

温泉郡エリア

梅木謙一　1998　朝日谷2号墳　（前方後円墳　全長25.5m　3C後半）
　　『松山市文化財調査報告書62　大峰ケ台遺跡Ⅱ－9次調査－』
　　松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

伊予郡エリア

森　光晴　1982　吹上の森1号墳　（前方後円墳　全長約40m　4C代）
　　吹上の森2号墳　（前方後円墳　全長約60m　4C後半）『愛媛県史　原始・古代Ⅰ　p.555』

２）中期の前方後円墳

風早郡エリアには上難波南古墳群内の 10 号墳と帆立貝式前方後円墳と言われる小竹 8 号墳がある。どちらも墳長 22.0mを測る 5 世紀後半の小型前方後円墳とされている。

和気郡エリアには船ケ谷向山古墳と柄鏡形前方部を持つと言われる石風呂前方後円墳がある。

船ケ谷向山古墳は高縄山地西側の独立丘陵南部に位置する。標高は 29 ～ 31 m、低地部との比高は 20m前後で、眺望は南に開けている。墳丘は全長 32m、後円部径 26mを測り、帆立貝式の可能性もある前方後円墳で、祝谷 9 号墳（以下、本古墳という。）より一回り大きい。

石風呂前方後円墳は全長 80m前後と言われているが、未調査のため詳細は不明である。墳丘がこの規模だとすれば、愛媛県内で最も大きな前方後円墳の一つとなる。

温泉郡エリアには本古墳と共に東雲神社古墳と経石山古墳がある。本古墳は和気郡エリアとの境界付近に所在するが、南に広がる温泉郡エリアを望む絶好の場所にあり、平地部から仰ぎ見るという古墳の視覚的効果を考えると、温泉郡エリアの前方後円墳という位置付けがふさわしいと判断した。

なお、本古墳及び東雲神社古墳は本エリアの比較的北部にあり、経石山古墳は南部の久米郡エリアに近いところに位置している。

本古墳は道後温泉の北西に位置し、瀬戸風峠のある丘陵と御幸寺山及びその北に連なる丘陵の間を南流する丸山川の左岸に立地する。現在の道後温泉本館からは直線で約 1.4㎞の距離にあるが、松山神社のある丘陵先端が障壁となり直接見通すことはできない。

温泉郡エリアの中期古墳の中で、現在のところ最も古い前方後円墳の一つである。周壕とその外壁に葺石を伴うという特殊性に加え、眺望的に視野は狭いが、松山平野南部の行道山まで見通すことができるということから、本地域を代表する古墳と位置付けても間違いではないであろう。

本古墳が立地する丘陵の現標高は約 52.5 ～ 54.5mで、県民文化会館付近の平地との比高は約 20m である。周壕を含めた古墳の全長は 31.6m、墳丘の全長は約 26.8m、後円部径は若干の歪みはあるが 18.9 ～ 19.9m、前方部長約 7.5 m、前方部先端幅 14.5m を測る。墳丘盛土は完全に削り取られ、主体部は埋葬施設を含め、墓坑掘り方の痕跡も残っていない。しかし、本古墳が所在する御幸寺山から道後温泉北側の丘陵一帯は、瀬戸風峠の古墳群をはじめ、古墳時代中期から後期にかけての古墳が多く築造されており、さかんに古墳埋葬が行われてきた地域である。その中で市内中期の小型前方後円墳には見られない特徴的な形態を持つことは、他とは一線を画する古墳と見ることができる。

このことは、本古墳が律令制開始からかなり遡る墳墓ではあるが、古代の道後温泉にまつわる記事等も考え合わせると、この一帯は、他の小型前方後円墳の被葬者が治めるエリアとは違った特色を有する可能性がある。

東雲神社古墳は松山城のある勝山東麓にあり、全長 34mの前方後円墳と言われている。詳細な調査を行っていないので今後の解明が待たれるが、伝えられるとおりの規模であれば、船ケ谷向山古墳や本古墳と規模や平地との比高もほぼ同じ古墳である。

経石山古墳は全面的な調査は行われていないが、墳丘測量や墳裾から周壕にかけての部分的な調査から、全長 56.0m、後円部径 29.0m、周溝幅 7.0 ～ 11.0m、周溝の深さ 0.2 ～ 0.5m を測る、5 世紀末から 6 世紀初頭の古墳とされている。

その他本古墳に近接する瀬戸風峠Ｅ区 6 号墳、本エリア西端部の斎院茶臼山古墳がある。墳形や墳

丘規模は不明であるが、主体部や出土遺物に卓越したものがあり、参考までに掲示しておく。

久米郡エリアでは、大型前方後円墳が多く築かれ、他地域を圧倒している。なお、大型前方後円墳はほぼ中期末から後期初頭の時期が与えられているが、ここでは中期古墳として扱う。

タンチ山古墳は未調査のまま旧軍部の滑走路建設によって破壊、消滅しているため詳細は不明である。しかし、1992 年の調査で古墳を囲繞する周壕の前方部北東角と推測できる部分を検出し、埴輪も出土している。この調査に関連して聞き取り調査を行っており、前方部と後円部にあったと言われる石室の位置や開口状況のほか、地形や土地利用等が詳述されている。この古墳は円墳が並立していたという説もある。しかし、調査報告書の中で、検出した周壕の形状やこの地域で後続する一墳丘多石室を持つ古墳との共通性なども勘案して前方後円墳である可能性もあるとして、図上復元を試みている。その結果、全長 65m、後円部径 46m、前方部幅 42mの規模を提示している。

二つ塚古墳は破壊が著しく、後円部の墳頂付近の一部が残存しているのみであるが、二度にわたる調査で、ほぼ東西方向に横たわる前方後円墳の前方部北西角と後円部南西裾を検出している。

これによる図上復元で、墳丘は全長 63 m、後円部径 38m、前方部幅 47mを有する前方後円墳であるとされ、約 3.6 mを測る後円部現存高と併せたものが、この古墳の規模と判断してもよいであろう。

波賀部神社古墳は全長 62.0m、後円部径 28.0m、高さ 6.7m、前方部の長さ 22.0m、幅 28.0mを測る、5 世紀末から 6 世紀初頭の前方後円墳であるが、本格調査が行われていないため詳細は不明である。

タンチ山古墳と二つ塚古墳の規模復元については、部分的な調査のデータを使用しており、完全ではないかもしれないが、一定の根拠を持つ案として捉えておきたい。

経石山古墳は後の温泉郡エリアに属するが、それも含めてタンチ山、二つ塚、波賀部神社古墳の大型前方後円墳は墳長が 56 ～ 65mあり、本古墳（祝谷 9 号墳）の 2 倍を超える。

桧山峠 7 号墳は松山平野東部の高縄山地南麓にあり、南に向かって延びる尾根上に立地する。標高は 165m前後で眺望は南西方向に開け、松山平野南西部から砥部町方面の山並みも一望できる。後世の削平等によって前方部の形状や規模は不明であるが、出土遺物により 5 世紀後半から末ごろの前方後円墳である。本エリア内の大型前方後円墳であるタンチ山、二つ塚、波賀部神社各古墳とは立地も規模も大きく異なっている。本古墳と比べると後円部の直径が 16 ～ 17mと、一回り小さい。温泉郡エリアの本古墳や東雲神社古墳、和気郡エリアの船ケ谷向山古墳同様、小型前方後円墳の範疇に入るものであり、被葬者の階層として大きな違いはないものと推断できる。しかし、他エリアの小型前方後円墳が平地部との比高 20 ～ 30mであるのに対して、この古墳は 100mを超えるという立地的な特徴がある。これは大型前方後円墳を多く有するエリア内にある同一系譜に属する集団でありながら、それらと隔絶するための選地なのか、背景を異にする系譜であるための占地なのか、はたまたそれ以外の理由によるものなのかは不明である。あえて平地部との比高 20 ～ 30mにこだわるならば、桧山峠 7 号墳のある平井、鷹子地区では観音山古墳や素鵞神社古墳（後期古墳の項で記述）などが該当する。

観音山古墳は素鵞神社古墳から約 600m 東にある古墳で、現行政上は平井町に属する。墳丘径約 40mの円墳とされているが、他に 100mを超える帆立貝式前方後円墳ではないかとも言われる古墳で、埴輪も表面採集されている。現地踏査や地形図を見るかぎり前方後円墳の可能性は低いように感じられる。しかしながら、円墳であったとしても直径 40mの規模となると松山平野内には類例が無く、その点での解明が期待される古墳ではある。

ここまで、松山市内における中期の前方後円墳（可能性があるというレベルのものも含む）を中心

に概略を記したが、概ね律令制成立後の和気郡、温泉郡、久米郡エリアに該当する地域に分布する。

一部、風早郡エリアの前方後円墳についても記したが、情報が少ないのと、前期の国津比古命神社古墳、櫛玉比売命神社古墳と比べて規模等に隔絶があるので、詳細は不明としたい。

和気郡、温泉郡、久米郡エリアにおける古墳時代中期後半の前方後円墳に限って見ると、経石山古墳、タンチ山古墳、二つ塚古墳、波賀部神社古墳の墳長が60m前後と、船ケ谷向山古墳、桧山峠７号墳の２倍前後ある。この差は当時の社会的な関係や系譜等の違いによるものと考えることができる。

大型前方後円墳の被葬者が、当時の地域社会において強大な力を持つ者又は正当な系譜を持つ者とするならば、小型前方後円墳をはじめとする中小の円墳等の被葬者やその母集団は、その補完的立場にあると理解することもできよう。

和気郡、温泉郡、久米郡エリアの小型前方後円墳等は概ね平坦面の少ない丘陵先端部や尾根上に立地し、大型前方後円墳は平地部に築かれている。これが上記の違いに由来し、古墳を築く際の選地に影響を与えたり、築造の原動力になっている可能性もあるのではないだろうか。

【各エリアの中期古墳】

風早郡エリア
阪本安光　1982「上難波南古墳群第10号墳」『北条市上難波南古墳群調査報告書』　愛媛県教育委員会
森　光晴　1982「小竹８号墳」『愛媛県史　原始・古代Ⅰ　p.564』
和気郡エリア
栗田茂敏　2014「船ケ谷向山古墳」『松山市文化財調査報告書168　三味線山古墳・船ヶ谷向山古墳』
松山市教育委員会・（公財）松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター
森　光晴　1982「石風呂前方後円墳」『愛媛県史　原始・古代Ⅰ　p.567』
温泉郡エリア
作田一耕　2024「祝谷９号墳」『松山市文化財調査報告書213　祝谷９号墳』
森　光晴　1982「東雲神社古墳」『愛媛県史　原始・古代Ⅰ　p.567』
梅木謙一　2001『松山市文化財調査報告書79　東雲神社遺跡』
松山市教育委員会・(財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
森　光晴　1982「経石山古墳」『愛媛県史　原始・古代Ⅰ　p.566』
田城武志　1992『桑原地区の遺跡　樽味立添・樽味高木・樽味四反地桑原西稲葉１・２次・桑原田中・経石山古墳・枝松３次』
（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
久米郡エリア
重松佳久　2009「タンチ山古墳」『タンチ山（双子塚）古墳』
松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
西田　栄・森　光晴
1980「二つ塚古墳」『松山市史料集第一巻　考古編　p.697』　松山市
高尾和長・山之内志郎
2007「北久米遺跡４次調査地・６次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報19』
松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
西田　栄・森　光晴
1980「波賀部神社古墳」『松山市史料集第一巻　考古編　p.696』
栗田茂敏　1997「桧山峠７号墳」
『桧山峠７号墳』　松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

3）後期の前方後円墳

6世紀前半以降に築造された前方後円墳は、温泉郡エリアの永塚古墳、三島神社古墳、久米郡エリアの播磨塚天神山古墳、鶴塚古墳がある。このうち、三島神社古墳以外は6世紀前半から後半の小型前方後円墳で、これ以降松山平野では前方後円墳が見られない。このことから、三島神社古墳以外の前方後円墳は、終焉に向かって小型化していく姿を表しているのではないかと推測している。

現時点で、少なくとも久米郡エリア東部では、葉佐池古墳や川上神社古墳のように6世紀後半から7世紀にかけての墳長40mを超える長円墳や長方墳が出現し、首長墳としての前方後円墳という威信的な位置付けが変質しているように見える。その中で、久米郡エリア中心部に近い三島神社古墳は6世紀前半の全長45.2mの中型前方後円墳で、首長墳としての面目を保っていると推定している。

古墳時代後期の首長墳として、三島神社古墳が中期の大型前方後円墳被葬者に匹敵する首長層を埋葬する役目を担い、その後、規模は保ちつつも葉佐池古墳から川上神社古墳へと墳形を変えながら、首長墓を構築し続けるという姿を見せているのかもしれない。

その他、素鵞神社古墳は前述の桧山峠7号墳の立地する尾根の裾部と言ってもよい位置にあり、直径30～40mの円墳と言われている。主体部がある墳頂部には社殿が建っているばかりではなく、戦前に盗掘され、遺物も散逸したとされているため、後期という以外に詳細は不明である。地形図を見るかぎり、前方後円墳又は長円墳の可能性も残しているが、現時点では詳細把握は難しい。

以上、重信川以北における古墳時代中期以降の前方後円墳について概観した。域内では前期古墳として、朝日谷2号墳以外は確認できない。中期も前半は確認できず、本古墳が5世紀中葉に出現する。後期になると前半に築造された三島神社古墳、鶴塚古墳、播磨塚天神山古墳や後半に位置付けられる永塚古墳以外は分布が薄く、首長墓として長円墳や長方墳に変化していく状況が見て取れる。（作田）

【各エリアの後期古墳】

温泉郡エリア
栗田茂敏　2013「永塚古墳」『福住2号墳・永塚古墳・御産所権現山古墳』
松山市教育委員会・（公財）松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター
森　光晴　1972「三島神社古墳」『三島神社古墳』 松山市教育委員会
久米郡エリア
吉岡和哉　2001「播磨塚天神山古墳」『播磨塚天神山古墳』 松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団
相原浩二・山内英樹
2018「鶴塚古墳」『鶴塚古墳調査概要報告書』（平成29年度に調査を行ったが、調査報告書は未刊行）

第3節　前方後円墳の築造工事と地域内での勢力の有り様

松山平野の中期古墳で見ると、後の久味国造の支配地域の中にある大型前方後円墳は現在の久米地区に集中するが、小型前方後円墳は松山平野の広い範囲に分布する。後期になると大型前方後円墳は姿を消し、中型前方後円墳や同規模の長円墳、長方墳が久米エリア、東温市、砥部町に広がっている。小型前方後円墳も一部を除き、大型前方後円墳と同様に姿を消し、円墳や方墳に置き替わる。

そのような状況を踏まえ、一定地域内における同時期の大小の前方後円墳の有り様や関係について土木工事の側面から考えてみたい。削平が著しい本古墳では、墳丘や主体部の構造について言及しえ

ないことから、本節では省略する。

このことを考える中で、実際には墳形や築造場所の地形、地質等で多様な条件が生じるが、それらを省いて相似形に単純化してしまうと、A 墳を B 墳の 2 倍の規模（平面・高さ共）で築造しようとした時、必要な土量は 8 倍になる。つまり、A 墳を築造するために 8 倍の労働力（労働者数×時間数）を要し、B 墳を築造した集団のみで A 墳を築造するのは、集団規模の点から無理がある。

A 墳築造のためには、その古墳が所在する地域に、B 墳が築かれる地域の 8 倍前後のの労働力があれば、単独で築造することは可能である。しかし、重信川以北の松山平野という、それほど広大なエリアでもない中で、突出した勢力と小さな諸勢力の対立というよりも、両者の主従関係もしくは下位勢力の中から選ばれた者が松山平野の首長として君臨すると想定する方が自然ではないだろうか。

つまり、A 墳と B 墳の被葬者や築造集団は、ピラミッド型の階層を成しているとも言える。

そのように考えると、大型前方後円墳（A 墳）の被葬者は、概ね和気郡、温泉郡、久米郡、浮穴郡エリア全体の統括者で、小型前方後円墳（B 墳）の被葬者は、各郡もしくはもう少し小さいエリアの長という関係が想定できる。つまり、小型前方後円墳を擁する各エリアの労働力を集結して大型前方後円墳を造るという構図である。その場合、本古墳や船ケ谷向山古墳、桧山峠 7 号墳といった小型前方後円墳の被葬者やその母集団は、大型前方後円墳築造集団の一つに過ぎず、場合によっては 1 世紀以上を隔てて成立する国造に肉薄する勢力へと発展する集団の原形を成すものかもしれない。

現在分かっている前方後円墳を中心に、ここまで久米地域の前方後円墳の築造や分布の在り方から、被葬者や母集団の階層や有り様、関係について簡単に触れてきたが、浅学ゆえに至らざるところがあることをご寛恕いただき、広くご教示を賜れば幸いです。（作田）

【参考文献】

森　光晴　1982「嶺昌寺境内古墳」『愛媛県史　原始・古代Ⅰ　pp.554 - 555』 愛媛県
西尾幸則　1983「斎院茶臼山古墳」『斎院茶臼山古墳』 松山市教育委員会
相原浩二　1998「瀬戸風峠Ｅ区 6 号墳」『瀬戸風峠遺跡』
松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
森　光晴　1982「観音山古墳」『愛媛県史　原始・古代Ⅰ　p.565』
栗田茂敏　2008「鶴が峠Ｌ区 1 号墳」『鶴が峠遺跡Ⅱ』
松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
高尾和長・宮内慎一・相原浩二・水本完児
1998「大池東 1 号石室」『大峰ケ台遺跡Ⅱ－ 9 次調査－』
松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
吉岡和哉　2006「畑寺 6 号墳」『東野お茶屋台遺跡 6 次調査』
松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
下條信行・栗田茂敏・加島次郎
2003「葉佐池古墳」『愛媛県松山市葉佐池古墳』 松山市教育委員会
栗田茂敏　2010『葉佐池古墳　3･4･5 次調査』 松山市教育委員会･（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
森　光晴　1982「川上神社古墳」『愛媛県史　原始・古代Ⅰ』 1982
橋本雄一　1996「東野お茶屋台 11 号墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』
松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
田城武志・高尾和長
1994「東山 19 号墳」『東山古墳群　4・5 次調査』
松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
大山正風　1990「宝泉遺跡 1 号古墳」 川文報 2 『宝泉遺跡Ⅱ』 愛媛県温泉郡川内町教育委員会

第４節　祝谷９号墳出土埴輪について

祝谷９号墳より出土した埴輪は、後世の墳丘削平により原位置をとどめる個体はないものの、周壕全域で出土が確認されることから、本来は墳頂部（または段築部）を全周して配置されたものと推測される。また、その器種は円筒・朝顔形埴輪、各種形象埴輪と多岐にわたり、松山平野では数少ない中期古墳の埴輪資料として大いに注目される。そこで各種埴輪の諸特徴を列記したうえで、円筒埴輪を中心に松山平野内の中期埴輪と比較検討を試み、最後に埴輪からみた祝谷９号墳の年代的位置付け及び評価を行いたい。

（１）各種埴輪からみた特徴と評価

円筒埴輪

完形に復元できる個体（46）を参考に復元すると、器高 45cm 前後、口縁部径 24 ～ 28cm、基底部径 18 ～ 21cmと若干の差異はあるものの、突帯３条４段構成で、３段目に対面して円形スカシを２個穿つ個体が主体をなすものと考える。また、突帯間距離と口縁・基底部長の観察では、口縁部高 10 ～ 12cm、突帯間隔 10 ～ 11cm、基底部高 10 ～ 11cm で、口縁部高が突帯間隔をはるかに超えるものはなく、「基底部高＝突帯間隔」という一定規格に基づいて製作されたことが確認できる。

器面には外面を中心に赤色顔料が塗布される個体が殆どで、中には黒色斑点も散見される。器面調整は口縁部から基底部にかけてＢ種ヨコハケ（一瀬 1988）が施されており、特に突帯間を２周程度で充足し、静止痕を残す「Bb 種ヨコハケ」が主体となる。ハケ原体はハケ目の粗密度合から少なくとも２種類存在しており、１個体の製作にあたり複数のハケ原体を使用していることも確認できる。また、口縁部外面には Bb 種ヨコハケを施した後、幅３～ 4cmでヨコハケ（板ナデの場合もあり）を１周させる点で共通しており、ストロークが長く明確な静止痕は確認できない点は特徴的である（内面には対応するようにナデが施される）。

突帯は断面台形で、器面調整用のハケ原体を用いて突帯外面をナデ付けた後、指ナデにより端部を尖り気味に仕上げる個体が殆どである。また、突帯が剝離した資料が殆どない点からも、丁寧かつ強固に貼り付けしていることが分かる。さらに突帯設定用の刺突・線刻等は確認した中では見られないが、突帯上部に紐圧痕が残る個体（30）がある点は注意を要する。

基底部調整は、全てに「基底部正立調整」が施されており、外面端部付近をナデ・ハケ、内面端部を指オサエ・ナデにより潰れを抑えている。基底端部内面には強めの指オサエと連動して爪状擦痕が列状に並ぶ場合も少なくない。

以上の基本情報に加えて、本古墳出土の円筒埴輪を観察する上で特記すべき２点を報告する。１点目は内面に残る「爪状擦（圧）痕」の存在である。口縁部から基底部まで局所的にみられ、

（ア）幅広・長めの弧状が列状に並ぶもの
（イ）線・長めの弧状が列状に並ぶもの
（ウ）短線・直線状が列状に並ぶもの
（エ）不定方向に指単位で圧痕状に残るもの

の４種類に大別できる。

その内、（イ）・（ウ）は前述の基底端部内面や突帯内面付近に多くみられることから、突帯貼付と

連動して内面を押さえる際に、一定方向に沿う形で列状に残った痕跡と推察される（複数列ある場合あり）。また（エ）は特定箇所への指オサエに連動した偶発的なものと理解する。また（ア）は、口縁部に一定間隔を空けて確認される場合が多く、１ヶ所で複数段みられることはない。対応する外面は（B 種）ヨコハケの重複部分にあたることが多い点から、外面２次調整時のヨコハケ調整に対応した痕跡であろう。指（爪）痕跡に形状・幅・強弱の差が生じる要因としては、製作工程上、突帯貼付・基底部調整時はより強く、器面二次調整時はハケ原体に対応するための比較的弱い力、という差異に比例した結果ではないかと推測する。

２つ目は、胴部と突帯で異なる色調の粘土を用いる点である。この点は次節でも詳述するが、意図的に異なる粘土を使用しており、胴部（橙色）に淡黄橙色の突帯が貼付されることが殆どである。赤色顔料塗布の有無や朝顔形埴輪との関係もあるが、復元可能な個体が少ないこともあり現状ではその指摘にとどめたい。

朝顔形埴輪

肩部まで復元できる（2 段目は推測含む）個体（69）を参考に復元すると、括れ部までで器高約 48.0cm、基底部径 14.8㎝、括れ部を除く突帯は４条５段構成で、４段目に対面して円形スカシを２個穿つ個体である。また、突帯間距離と基底部長は、突帯間隔９～ 10cm、基底部高 10cm で、円筒埴輪と同様、「基底部高＝突帯間隔」という一定規格に基づいて製作された可能性が高い。しかし、円筒埴輪と比較して基底部径・胴部径がやや小さく、突帯間距離も僅かに幅狭である点などは、円筒埴輪胴部との分類の際に参考になると推測できる。

器面調整・突帯成形・基底部調整は円筒埴輪と同様であるが、肩部・括れ部、口縁部は成形・調整に特徴が認められる。肩部は大きく張るもの（43・67・97・113）が殆どで、少数ながら直線的で大きく張らないもの（68・98）が混じる。外面には B 種ヨコハケが施される個体もあり、括れ部にはいずれも断面三角形の突帯を貼付する。

口縁部は大きく外方へ開き、一次口縁の内側から二次口縁を貼付し、更に外方へ広がる。擬口縁部（口縁接合部）には断面が幅広台形状の突帯を貼付しヨコナデ調整を施す。94 の一次口縁端部には幅広の刻み痕があり、二次口縁との接地面を広げ、より強固に接合させる工夫がみられる。さらに一次・二次口縁で粘土の色調が大きく異なり、一次口縁が淡黄橙（褐）色、二次口縁が橙色を呈する。これは赤色顔料塗布に加え、粘土色調の違いで視覚的効果を狙ったものと解釈したい。

形象埴輪

本古墳出土の馬形埴輪は、頭部を欠損しているものの、面繋・尻繋・手綱の表現を粘土帯、鬣の断面「T」字形の突帯など立体的表現が採用されており、杏葉表現を含め飾馬として製作されたことが明らかである。鞍表現については、前輪、後輪に加え、居木も粘土板貼り付けにより表現されており、障泥も粘土板表現であったが、剝離痕の存在から大半が欠損したものと推察する。

透孔表現については、腹部・尻穴に穿孔はみられるものの、前後・側面に円形透孔は確認できない。脚部表現も脚下半が４本とも欠損しており、破片資料を含め蹄表現の復元は困難である。

ここで注目したいのは胴部に表現された線刻・刺突表現である。輪鐙や杏葉、革紐部分の粘土剝離跡には刺突・線刻が施されているが、これは粘土帯・板の貼付箇所を示す「下書き」の役割を担っており、設計に基づき丁寧かつ忠実に製作されたことを示す良好な資料である。なお、線刻表現が残る杏葉は、粘土板・線刻の様子から剣菱形杏葉を表現したものと推測する。

杏葉は、粘土板・線刻の様子から剣菱形杏葉を表現したものと推測する。

家形埴輪は屋根部および破風が残存しているが、切妻造か入母屋造かの判断はできない。破風内側に　剝離痕がみられるが、おそらく棟木が表現されていた可能性が高い。屋根部（棟部）は粘土紐による輪積み成形で、線刻表現による区画には、大阪府・今城塚古墳でもみられる省略化された直弧文が表現される点は注目できる。

（2）松山平野における中期埴輪との比較検討

松山平野における中期埴輪は数量的に非常に少なく（山内 2023）、平野南部の桜山古墳（山内 2007）や土壇原Ⅲ遺跡・第１周溝（山内 2008）、平野東部の観音山古墳（山内 2007）が挙げられる。桜山古墳は円筒埴輪に方形（隅丸）スカシを有し、器面調整にタテハケのほか二次調整ヨコハケを施す個体がある。また当初「盾形」とした破片は鰭部片となる可能性もある。観音山古墳は突帯口縁を有する大型円筒埴輪のほか、B 種ヨコハケを有する小型品の２種が確認できる。突帯剝離部分には突帯設定の線刻が残っていることから、一定の規格性のもと製作された可能性が高い。なお、両古墳の円筒埴輪には赤色顔料の塗布がみられる。

先述の２古墳は丘陵上に築造された大型円墳で、いずれも地域内の有力首長墳とされる。同エリア内では埴輪自体の系譜を追うことは困難で、特定首長墳への単発的な埴輪採用とみられる。砥部地区の土壇原Ⅲ遺跡・円筒埴輪も、器壁の厚い中型品（タテハケ・粗目のヨコハケ）と小型品（Bc 種ヨコハケほか）が確認されているが、その全容は不明である。

中期末の埴輪として注目されるのは、平野北部に所在する小型前方後円墳である船ヶ谷向山古墳（栗田 2014）である。大・中・小型品に分類可能で、大型品外面には口縁部外面および内面端部にヨコハケを施す個体が残るが、突帯間隔や口縁部高との関係において規格は曖昧である。朝顔形埴輪や各種形象埴輪（馬・鳥・鶏・家・蓋）の採用という点では大きな画期ではあるが、祝谷９号墳との技術的系譜については追うことが出来ない。また、同時期に展開する初期群集墳（鶴が峠・東野お茶屋台など）の中には、小型品の中に（B 種）ヨコハケや各種形象埴輪を見ることができるものの、船ヶ谷向山古墳と同様、祝谷９号墳とは円筒埴輪の規格性の観点からも大きな隔たりがある。

つまり、祝谷９号墳の埴輪資料、特に円筒埴輪にみられる諸特徴は、同平野の中期古墳に採用される埴輪とは規格性や技術的な共通項に乏しく、むしろ同時期の倭王権中枢地域での円筒埴輪の規格性が大きく反映されたものと理解したい。

（3）埴輪から見た祝谷９号墳の年代的位置付け

ここまで、出土埴輪の各属性検討や松山平野での中期埴輪との比較の中で、祝谷９号墳出土の埴輪について検討を進めてきた。最後に本古墳の年代的位置付けについて、倭王権中枢地域（古市・百舌鳥古墳群ほか）での研究成果をもとに円筒埴輪の位置付けを行い、さらに各種形象埴輪や松山平野内での研究成果を参考に、本古墳の位置付けと評価を行いたい。

本稿では、近年の古墳時代中期の埴輪編年について木村理氏による編年（木村 2022）を参考とする。祝谷９号墳出土の円筒埴輪にみられる規格品は主に小型品で、口縁部高 10 ～ 12cm、突帯間隔 10 ～ 11cm、基底部高 10 ～ 11cm で、「基底部高＝突帯間隔」となるものである。Bb 種ヨコハケが時間幅を有することを考慮に入れると、概ね木村氏のいう「Ⅳ － １期」（TK216 並行）に該当すると考え

倭王権中枢部の規格性が反映された結果として、地域の埴輪編年との齟齬が若干生じること自体に、むしろ意味があるものと解釈したい。

また、馬形埴輪に表現された剣菱形杏葉については、日本列島でのｆ字形鏡板轡・剣菱形杏葉の出現時期（諫早 2022）とも矛盾しないことから、倭王権中枢地域にいち早く導入された馬装のモチーフを馬形埴輪に反映させた結果として積極的に評価したい。

さらに松山平野では、同時期（5 世紀中葉）の前方後円墳は現状では確認されておらず、馬蹄形周壕や周壕外壁への葺石など、在地での検出例がない事例であることから、現時点で、本古墳出土の各種埴輪が示す各種情報は、墳丘形状・構築情報と併せて古墳時代中期（5 世紀中葉）の倭王権中枢との政治的関係性を考察する上で貴重な成果である。（山内）

【参考文献】
諫早直人　2022「馬具の暦年代論と古墳時代中期の対外交渉」『中期古墳研究の現状と課題Ⅵ　～新編年で読み解く地域の画期と社会変動～』　中国四国前方後円墳研究会
一瀬和夫　1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要Ⅴ』大阪府教育委員会
木村　理　2022「古墳時代中期の円筒埴輪」『埴輪の分類と編年』埴輪検討会シンポジウム 2022 資料集　埴輪検討会
栗田茂敏　2014『三味線山古墳・船ヶ谷向山古墳』　松山市教育委員会・（公財）松山市埋蔵文化財センター
山内英樹　2007「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（7）－松山平野における中期古墳の埴輪について－」『紀要愛媛』第７号　（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
山内英樹　2008「伊予の埴輪編年」『紀要愛媛』第８号　（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
山内英樹　2023「松山平野における埴輪の展開」『埴輪からみた王権と社会』季刊考古学 163　雄山閣

第５節　祝谷９号墳周壕出土の環頭大刀柄頭について

環頭大刀は元来中国で発生し、朝鮮半島を経由して日本に舶載されたと言われている。古くは漢代の官人墓等に副葬されていたようである。日本における大刀の出現は古墳時代初頭から前期（3 ～ 4 世紀代）の古墳から出土するいわゆる素環頭が主体である。5 世紀代は出土量が多くなるものの、素環頭が一般的であるのは前代と概ね変わらない。

5 世紀後半から 6 世紀前半になると朝鮮半島の伽耶を中心に分布する「伽耶式」と呼ばれる龍鳳文を施した装飾環頭大刀が現れる。但し製作地は百済製とする考えが多い。その根拠としては、大刀の規格性や特定古墳からの出土（町田　1986）、百済武寧王陵遺物の高い工芸水準や 5 世紀末から 6 世紀初めの朝鮮半島の政治情勢（穴沢・馬目　1993）等がある。

これに対して倭国を製作地と考える意見として、海北塚古墳刀等の伽耶式と武寧王陵系の意匠と技法の折衷的な大刀の存在から、意匠が百済系、技術は伽耶系であるとし、伽耶系の技術保持者が百済系単龍環頭を元に第三国である倭国で製作した可能性があるとするものもある。（持田　2005）

6 世紀後半になると上述の武寧王陵から出土した大刀（武寧王陵刀）の影響を受け単龍単鳳環頭大刀が倭でも多く出土する。これを「武寧王陵系龍鳳文環頭大刀」とする分類（大谷　2006）もある。この系列の製作地は意匠の類似性によっていくつかに整理し、より精巧なものを先行形式とし、それらを模倣したものを後続型式と認定した。その上で前者を舶載品の候補とし、後者を倭製とする意見もある。（穴沢・馬目　1986）

この時期の円環部の装飾は、それ以前のものに比べ立体感に欠けるようになる。中心飾りの鳳凰も

6世紀第3四半期前半の嘴に玉を持つものから、別系列として第3四半期後半には玉を持たないものが現れる。（穴沢・馬目　1986）

このような意匠と技工の流れの中で、本遺物の編年的な位置を見てみたい。

まず円環部の飾りが立体感に欠け、中心飾りの鳳凰が非含玉であることから、穴沢、馬目両氏の系列表における龍王山系列等の6世紀第3四半期後半から第4四半期に該当するものと判断した。

さらに、新納泉は中心飾りの龍鳳文の型式学的分析によって、単龍・単鳳環頭大刀の盛行期は6世紀中葉から末と推定しており、穴沢・馬目氏の編年観とおおむね同じである。（新納　1982）

本遺物の特徴は以下のとおりである。

・材質は銅地で、円環部、環内飾り、茎は一体造りである
・茎の先端面にわずかながら段差を認めることができる
・円環部に走龍紋、環内飾りは鳳凰である（単鳳）
・嘴は非含玉で、冠羽と中が空洞になるように巻いた後羽先端が円環に接する
・円環部、中心飾りともに彫金で意匠を整えている
・鍍金を施す（円環部、環内飾り、茎の一部）

その中で、冠羽と中空に巻いた後羽の先端が円環に接する意匠は、栃木県益子町天王塚古墳出土のものと酷似している。彼我の遺物を詳細に検討したわけではないが、天王塚古墳出土の環頭は本遺物と同様、円環部分も簡略化された走龍文が表現されている。

しかし、法量が大きく異なっており、同范である可能性はない。ただ、この時期多くの出土が知られる龍鳳文環頭大刀であるが、同范もしくはその可能性があるものは、ごくわずかである。他は同じ意匠でも個体差が大きいのが通例である。その点、益子天王塚例と祝谷9号墳例の意匠は相似形といっても良いほど似かよっており、同一工房または同一工人による製作ではないかと推測できる。

今後は、本書で叶わなかった成分分析や実見比較により、両者の親縁性や相違性を明らかにしたい。

【参考文献】

新納　泉　1982「単龍・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号
町田　章　1986「環頭大刀二三」事『山本清先生喜寿記念論集　山陰考古学の諸問題』
山本清先生喜寿記念論集刊行会
穴沢咏光・馬目順一　1986「日本における龍鳳環頭大刀の製作と配布-一つの試論-」『考古学ジャーナル』№266
穴沢咏光・馬目順一　1993「陜川玉田出土の環頭大刀群の諸問題」『考古学談叢』第30集上　九州古文化研究会
持田大輔　2005「韓半島と倭国における装飾環頭大刀の展開」『益子天王塚古墳の時代』
早稲田大学會津八一記念博物館
大谷晃二　2006「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・
大阪府立弥生博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館　2004年度共同研究成果報告書』
財団法人大阪府文化財センター

ここまで、本古墳を倭王権との関係性の中で語られることの多い前方後円墳の一つとして見てきた。規模を基準とした松山平野内での位置付けは高くないように見えるが、一方、他の中期前方後円墳よりも早く築造された上、しっかりとした周壕を伴い、墳丘のみならず周壕外壁にも葺石を持つ。埴輪も器種に多様性があるほか、松山平野内での特異性を有する。道後地区という歴史的にも重要な場所にあることを併せみると、本古墳の位置付けの検討をさらに深化させる必要があろう。（作田）

写真図版

写真図版データ

1．遺構は、デジタルカメラで撮影した。
　使用機材：デジタルカメラ　Nikon D90　AF-S　DX18 ～ 140㎜

2．高所撮影は、南海放送サービス株式会社にドローン撮影を委託した。

3．遺物は、デジタルカメラで撮影した。
　使用機材：
　デジタルカメラ　Nikon D610　マイクロニッコール 105㎜・AF-S ニッコール 24 ～ 85㎜
　ストロボ　コメット /CA32・CB2400
　スタンド等　トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド 101

4．製版：写真図版 175 線
　印刷：オフセット印刷
　用紙：マットコート 76.5kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1 ～ 21・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』vol.1 ～ 6

図版1

1．俯瞰写真（検出状況）

2．鳥瞰写真（南より）

図版２

1. 墳丘葺石立面ｃ区（北より）
（H-H´～G-G´トレンチ間）

2. 墳丘葺石立面ｃ区（北より）
（H－H´～B②-B②´
トレ ンチ間）

3. 墳丘葺石立面 a-b 区
（北より）
（前方部北東角Ｆ－Ｆ´
トレ ンチ部）

1. 周壕葺石立面３区
（南西より）
（B②-B②´～G-G´
トレンチ間）

2. 周壕葺石立面３区
（南西より）
（B②-B②´～ D②-D②´
トレンチ間）

3. 葺石検出状況（北西より）
（F-F´～B②-B②´
トレンチ付近）

図版４

1. Ａ②－Ａ②´土層断面（南西より）

2. Ｂ②－Ｂ②´土層断面（西より）

3. Ｃ①－Ｃ①´土層断面（東より）

4. Ｈ－Ｈ´土層断面（西より）

5. Ｇ－Ｇ´土層断面（南より）

6. Ｅ－Ｅ´（SK172）土層断面（北より）

1. 馬形埴輪出土状況（東より）

2. 馬形埴輪出土状況（南より）

3. 馬形埴輪出土状況（西より）

4. 円筒埴輪等出土状況（南より）
（A①－A①′～C①－C①′トレンチ間）

5. 円筒埴輪等出土状況（南より）
（B①－B①′～D①－D①′トレンチ間）

6. 環頭大刀柄頭出土状況（俯瞰）
（B②－B②′トレンチ土層断面）

図版６

1. 周壕葺石断面（ｈ－ｈ´北西面）（北西より）

2. 墳丘葺石断面（ｈ－ｈ´北西面）（北西より）

3. 墳丘葺石断面（ｎ－ｎ´東面）（東より）

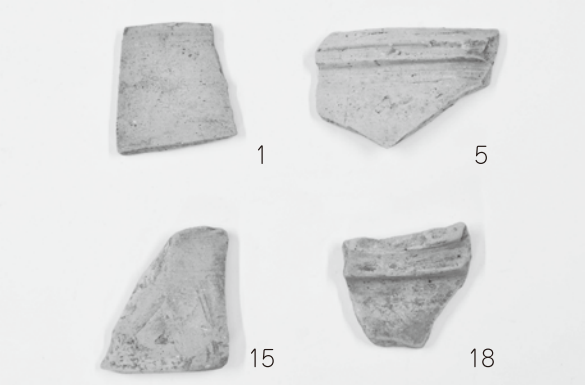
4. 周壕葺石断面（ｎ－ｎ´東面）（東より）

5. 墳丘葺石断面（ｆ－ｆ´北西面）（北西より）

6. 墳丘葺石断面（ｓ－ｓ´南東面）（南東より）

1．形象埴輪（馬形：114、円筒：46、朝顔：69、家形：118、盾形：120）

図版８



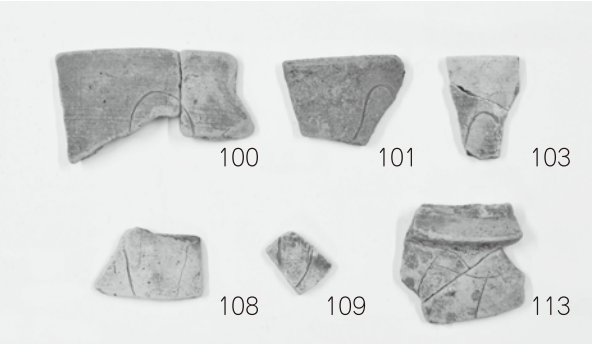
1. 出土遺物（前方部）

2. 出土遺物（北括れ部）

3. 出土遺物（後円部北側）

4. 出土遺物（後円部南側）

5. 出土遺物（後円部西側・南括れ部）



6. 出土遺物（線刻）

報　告　書　抄　録

ふりがな	いわいだに9ごうふん
書名	祝谷９号墳
副書名	
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第213集
編著者名	作田一耕　山内英樹　大西朋子
編集機関	公益財団法人　松山市文化・スポーツ振興財団　埋蔵文化財センター
所在地	〒791－8032　愛媛県松山市南斎院町乙67番地6　TEL 089－923－6363
発行年月日	西暦2024（令和6）年6月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
いわいだに９ごうふん 祝谷９号墳	まつやまし 松山市 いわいだに6ちょうめ 祝谷六丁目	38201		33°51′ 39.40″	132°46′ 36.78″	20160916 ～20170115	2,420㎡	高齢者総合 福祉施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
祝谷９号墳	散布地	弥生時代中期 古墳時代中期	貯蔵穴 前方後円墳	弥生土器 埴輪（円筒・朝顔・馬・家・盾） 環頭大刀柄頭（鳳凰）	弥生時代中期の貯蔵穴群と古墳時代中期中葉の前方後円墳を検出

要　約

祝谷大地ヶ田遺跡６次調査地は松山市城北地区にある。平地部には文京遺跡、道後今市遺跡などの弥生時代の拠点集落遺跡や平形銅剣を多く出土する遺跡が分布する。本遺跡は、そこから北方の丘陵地へ向かう丸山川沿いの左岸に立地し、周辺にも多くの古墳が分布している。そのほとんどは後期古墳であるが、本古墳は中期古墳として、松山平野を見下ろす、眺望の良い丘陵上に築かれている。

全長31.6mで、松山平野内では小型の前方後円墳であるが、周壕を廻らせ、墳丘部だけではなく周壕外壁にも葺石を持つ特異な古墳である。周壕内からは、6世紀後半の環頭大刀の単鳳柄頭が出土している。

近接する後期古墳から副葬品として、大刀の円頭柄頭も出土しており、本古墳を含む道後・城北地区の中期から後期にかけての古墳群は、松山平野の中でも特筆できる。

松山市文化財調査報告書　　第213集

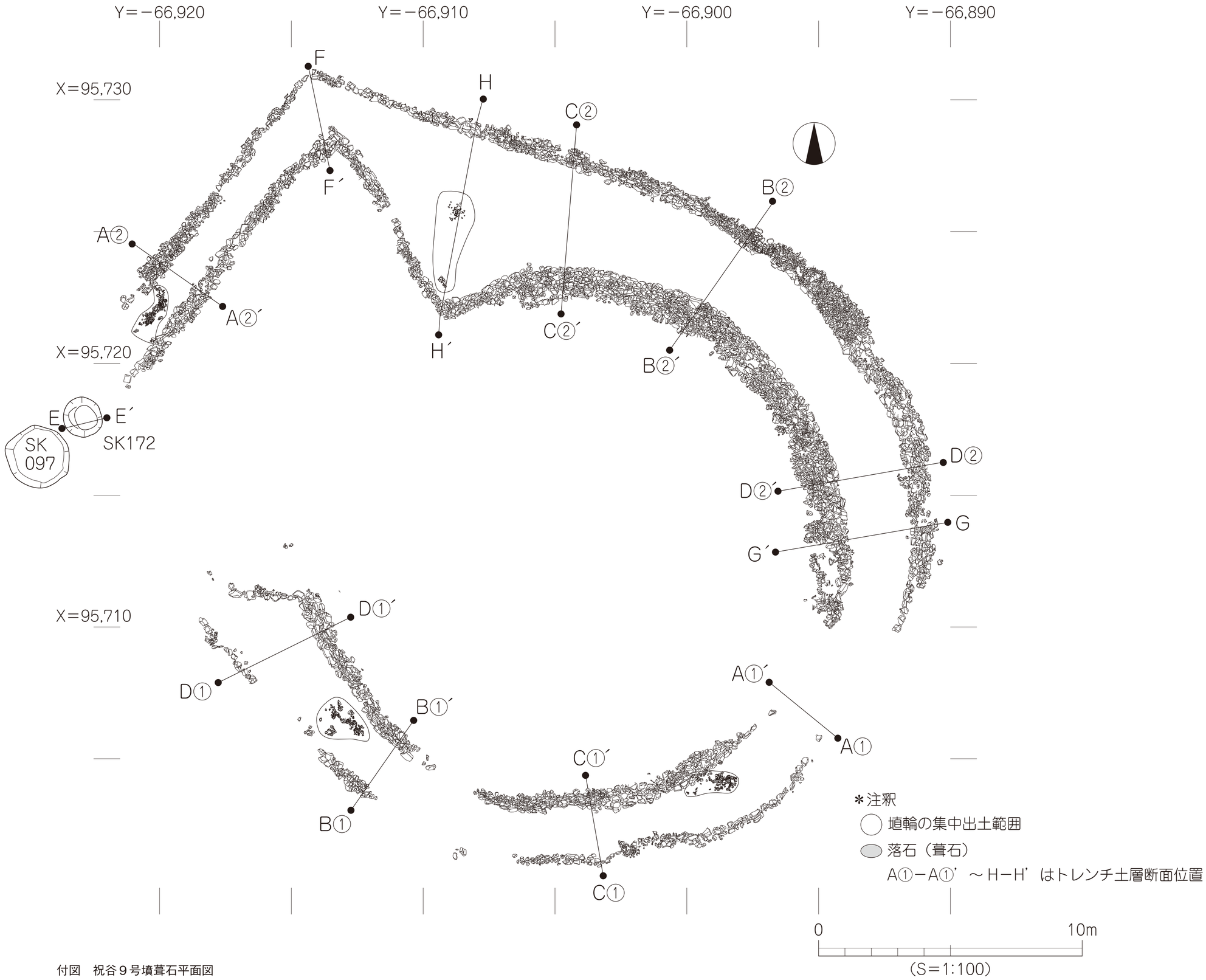
祝谷9号墳

令和6年6月30日　発行

編　集　公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
・　埋　蔵　文　化　財　セ　ン　タ　ー
発　行　〒791－8032　松山市南斎院町乙67番地6
TEL（089）923－6363

松　山　市　教　育　委　員　会
〒790－0003　松山市三番町六丁目6番地1
TEL（089）948－6605

印　刷　株式会社プロックス
〒791－3142　伊予郡松前町大字上高柳383－4
TEL（089）985－3339



付図　祝谷９号墳葺石平面図